

---

# 虚像の追跡者-Pursuer-

楼蘭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚像の追跡者 - Pursuer -

### 【Nコード】

N0581X

### 【作者名】

楼蘭

### 【あらすじ】

工藤新一が江戸川コナンとなつて九年の歳月が流れた。十五歳になつたコナンを内なる敵が追い詰める。

## Prologue (前書き)

前作「真実へのCountdown」では、本当に有り難う御座いましたm(\_\_\_\_\_)m

前作に続いて二作目の組織物の小説になりますが、前作とは違って組織色は若干薄くなると思います……多分？

この小説はのんびり更新する予定です。下手すれば二〜三日に一回の更新になるかも知れませんが、宜しく願いますm(\_\_\_\_\_)m

## Prologue

「ICPOに友人がいる、彼等に頼んで、奴等の組織の事を探って貰う事にしよう。その内、例の薬が手に入りお前の体も元に戻るだろっ」

「だから、危険な探偵ごっこは、もう終わり」やだね!!」「」

「これは俺の事件だ、俺が解く!!」

「父さん達は手を出すな!!」

「それに……俺は未だ、日本を離れる訳にはいかねえんだ……」

「新」

「まあいい、暫くこいつの好きにさせてやるか?」

「あなた……」

「その代わり、危なくなったら、直ぐに外国へ連れて行くぞ」

「それに……他にも日本を離れたくない理由がありそうだ」

米花ホテルの301号室で、交わされた

……父優作とのある約束

この時の俺は、未だ気付いていなかった……

あの時の、約束の言葉には……

・無理があると言っ事実には・

## 移り行く想い

工藤新一がトロピカルランドで幼児化して、早九年の歳月が経っていた

あまりにも長すぎた九年と言う長い歳月は、表面上穏やかな時を刻むコナンの強靱な精神を、着実に蝕んでいた……

帝丹中学校の帰り道にある川沿いの通学路

学ランに身を包み、学生鞆と空手胴着を肩からぶら下げたコナンは、傍らを歩く哀に声を掛けた

「おめえさ、俺が部活終えんの、わざわざ待つてなくて良いんだぜ？」

「別に待つてなんかいないわよ。私は薬学書と呼んでいるだけで、偶々部活を終えた貴方と帰ってるだけよ」

「なら良いけどよ……」

組織に通用する強さを身に付ける為、帝丹中学校空手部に所属す

るコナンが空手部の練習に出ている間、毎日と言って良い程、哀は必ず空手道場の近くで薬学書を読んでいた

まあ哀が素直になれる訳もなく、幾分類を染めて平静を装ってはいるが、哀が毎日コナンを待っている事は最早周知の事実、従って……二人は付き合っている！……と、帝丹中学校では噂の的になっていた

コナンはと言うと、哀が待っている事に内心笑みを溢しており、そんな自分がある事をちゃんと解っていた

(素直じゃねえ奴?)

何時もの様に、哀と二人で夕陽に照らされた道を歩いていると、新出智明と口付けを交わす蘭の姿が、目に飛び込んで来た

「どっかし……」

突然、立ち止まるコナン

怪訝に思った哀がコナンに声を掛け様として、その光景に言葉を失った

(蘭さんと新出先生……)

ここで蘭が新出を拒絶していたなら、コナンは全速力で駆け付けて蘭を助けていたに違いない

だが、目の前の蘭は抵抗する事なく新出を受け入れて、嬉しそうに微笑んでいた

そんな仲睦まじい二人を、無言で見つめるコナンの左手をそっと握り締めた哀は、一言だけ言葉を紡いで立ち竦したコナンを促す

「行きましょ」

哀に促されたコナンは、再び歩き出した

「ああ…… (Thank You……灰原)」

蘭と新出が三年前から付き合っている事は、コナンも知っていた

……待たせたのは自分自身だから仕方がない……



……それで蘭が幸せならいい……

と……自分に対して何度もそう言い聞かせたコナンは、蘭の幸せの為に涙を吞んで三年前に一度別れを告げた

だが当の蘭は受け入れられず、身勝手だと解っていてもコナンを手離せなかった

しかしながら血の繋がりが無い成熟した蘭との同居は、第二次性徴期を迎えたコナンにとっては、肉体的にも精神的にも好ましくない過酷なもので、コナンが頻繁に工藤邸へ泊まる事で良好な関係を保って来た

奥手とは言え多感な時期を迎えた上に、蘭と新出が寄り添う姿を見掛ける度、傷付いて来たコナンを支えたのが他ならぬ哀だった

……もし哀がいなかったら？

コナンは一人では立ち直れなかっただろう……

無言の儘で歩き続けた二人は、二丁目と五丁目の別れ道へ差し掛かると、哀が何時もの様にコナンへ声を掛ける

「今日……、隣に泊まって行くんでしょ？」

こんな時のコナンが、居候先である毛利探偵事務所には、絶対に帰らない事を哀は良く解っていた

九年間と言う空白に依って生じた新一と蘭の亀裂と、姉弟の様に過ごしたが為に最愛の蘭を失ったコナン

中途半端な状態を強いられているが故に、深く傷付いているコナンを放って置けば、広大な工藤邸で何も食べない儘一日を過ごして仕舞う

その為、哀は必ず声を掛けていた

自分を案じて優しく包み込んでくれる哀に悪いと思いつつも、コナンは何時も誘われる儘に頷く

「……ああ、そうだな。今日は自宅に泊まってくか？」

「そう、なら夕食を用意するから寄って行きなさい」

「Thank You……灰原」

哀の包み込む様な優しさに甘えてコナンは、素の自分を曝け出せる数少ない場所である阿笠邸に立ち寄った

「ただいま、博士」

「邪魔するぜ、阿笠博士」

「おかえり哀君、新一」

鞆をソファーに置き、崩れ落ちる様に腰を下ろすコナンを案じた阿笠博士は、自分用に入れた珈琲をコナンに差し出した

「何か疲れとる様じゃの、新一」

「まあな……、Thank You」

香り立つ珈琲を受け取ると、コナンは心を落ち着かせる様に一口飲み込んだ

何時もと違って覇気のないコナン、阿笠博士は直ぐに異変を感じ取った

(何事かあった様じゃの……)

心配でならない阿笠博士は、着替えて来たばかりの哀にそっと声を掛けた

「哀君……」

阿笠博士が何を言いたいのか？

全部聞かなくても解る哀は手短に経緯を話した

「川沿いの土手で、蘭さんと新出先生がキスしてたのよ」

「……！ そうじゃったのか……」

幼い頃から蘭に一途だった事を知っている阿笠博士は、コナンの胸中を思い表情を曇らせた

(新一……)

「蘭さんを忘れるには、もう少し掛かりそうね」

「そうじゃの……、新一は小さい時から蘭君にべた惚れじゃったから」

「せめて、中学に上がると同時に毛利探偵事務所を出ていれば、未だ割り切る事も出来たじやろうが、蘭君が新一を頑なに手離さんからの」

「ええ、蘭さんは江戸川コナンと工藤新一を重ねてるから、工藤君を手離したくないんでしょうね……」

「そうじゃの……」

少し離れた場所から、無言の儘見守る哀と阿笠博士の視線の先には、覇気をなくして頂垂れるコナンの姿があった……

## 名探偵の涙

この日、当たり障りのない会話を交わした後、本来の自宅である工藤邸へに戻ったコナンは、月明かりの射し込む私室で膝を抱えていた

（蘭……、新出先生と結婚するんだろうな。もう九年……、じゃあねえか）

携帯を手に取り時刻を確認すると、既に深夜0時を差そうとしていた

（この時間は未だ起きていたな……）

意を決したコナンは、けりを着けるべくアドレスを呼び出して、蘭の携帯へ新一として電話を掛けた

数回の呼び出しの後、繋がった筈の通話口からは……

無情にも無機質なアナウンスが響いた

「この電話番号はお客様の希望によりお繋ぎ出来ません」

「!!! (着信 拒否かよ……)」

あまりのショックに茫然となったコナンは電話を切り、ベッドへ倒れ込むとシーツをきつく握り締めた

(蘭………)

四方や着信拒否をされるとは、夢にも思わなかったコナン

深く傷付いた心を持って余して、拳を握り枕に顔を埋めて嗚咽を漏らした……

工藤新一と江戸川コナンの初恋が儚く散ったこの夜から一週間、コナンは受けた傷を癒すかの様に自宅である工藤邸に閉じ籠った

この間、哀は食事の用意をする傍ら、頻繁に部屋を訪れてコナンを支えていた

「工藤君、朝食を持って来たわ」

哀が声を掛けて暫くすると、真っ赤な目をしたコナンが扉を開けた

(泣いていたのね……)

「何時もわりいな……灰原」

「それは良いけど、貴方 無理にでも食べた方が良いわ」

「食欲はねえけど……、風呂に入ってから食べるよ」

「じゃあ、下に用意して置くから」

「わあった」

お風呂から揚がり食事を取ったコナンは、壊れたオルゴールの様に蘭に着信拒否をされた事実を吐露した

「蘭に……着信拒否されてた……」

「……え？」



(蘭さんが、着信拒否？ そんな……あんまりだわ)

まさか蘭が着信拒否をしていた衝撃的な事実にも、哀は茫然となつて目を大きく見開いた

「ははは……、ここ迄嫌われてたなんてよ」

深く傷付き懸命に涙を堪えて頂垂れる、あまりにも弱々しいコナンの姿に、哀はただ胸を締め付けられた

「工藤君……」

この三年間、事ある毎に傷付いて来たコナン

哀は堪らず傍らの席に座って、傷付いたコナンを優しく抱き締めた

「……！ 灰原……」

コナンは少し驚きはしたものの、心地よい哀の温もりに涙を溢れさせる

「辛い時は泣きなさい、私が全て受け止めてあげるから我慢しないで」

「……………灰原） 格好悪いだろ……………」

懸命に平静を装うコナン

「あらそう？ 私はそうは思わないわ」

全部吐き出して楽になりなさいと、言外に告げる哀の優しさは、コナンは一筋の涙を流す

「Thank You……………」

「……………ちくしょう」

哀に寄り掛かって涙を流すコナンと、優しく抱き締める哀の姿を阿笠博士は静かに見守った

（新一……………哀君……………）

哀に寄り添われた一週間、少しずつ落ち着きを取り戻し始めた矢先に、これ迄コナンを避けていた蘭が様子を見に来て仕舞った

哀と阿笠博士の制止を振り切り、部屋に籠っているコナンの元へ向かう蘭を追う哀と阿笠博士

「ちょっと待ってくれんか、蘭君？」

「新出先生と深い付き合いをする様になって、工藤君を避けていたからてつきり来ないだろうと油断していたわ」

「ああ？」

自分が元凶とは思ってもいない蘭は、コナンに声を掛け続けた

「コナン君、大丈夫？ コナン君」

部屋の扉を叩きノブを回して、中にいるコナンへ無理矢理にでも会おうとする蘭

阿笠博士と哀がこの暴挙を許す筈もなく、蘭をコナンの部屋から

遠ざけるべく言い放った

「蘭君、済まんが帰ってくれんかの」

「え、阿笠博士……？」

理解出来ず首を傾げる蘭に対し、二人はきつぱりと言い放った

「コナン君は、蘭君と新出先生の関係にショックを受けて酷く傷付いておるんじゃないよ」

「こう言っちゃ悪いけど、蘭さんがいたら江戸川君は永久に出て来ないわ。三年前、別れを告げた彼を無理矢理引き留めた癖に、今では避けて傷付けてるじゃない？」

「少なくともコナン君が落ち着く迄は、そっとして置いてくれんかの」

コナンを思う阿笠博士の言葉と、蘭を責める哀の言葉を受けて、蘭は自分がコナンの心を傷付けていた事を思い知った

（私が……コナン君を傷付けた？）

茫然と立ち竦む蘭

哀と阿笠博士は尚も言い放つ

「今、江戸川君は漸く落ち着いて来てるの。これ以上彼を振り回して傷付けないで頂戴」

「済まんが、帰ってくれんかの……」

「解りました……」

阿笠博士と哀に事実を突き付けられた蘭は一礼すると、後ろ髪引かれる思いでその場を後にした

(「ごめんね……」コナン君)

蘭の後ろ姿を見送った哀は、ぽつりと呟いた

「ごめんなさい……お姉ちゃん」

阿笠博士が蘭を見送りに玄関へ降りると、コナンは漸く姿を見せた

「何時もわりいな、灰原」

閉じ籠っている自分の代わりに、哀と阿笠博士に蘭の対応をさせて仕舞ったコナンは、部屋から出るなり済まなそうに謝った

だが、余程思う所があったのか、哀は腰に手を当てて小さな溜め息を吐いた

「良いのよ、蘭さんには一言言いたかったから丁度良かったわ？」

「蘭に？」

蘭に対して哀が何を思っているのか、皆目見当が着かないコナンは首を傾げて哀に問い返す

数秒の沈黙の後哀は、その想いを語った

「私達が中学に進学した三年前、蘭さんは新出先生と付き合い出していたながら、工藤新一に酷似した貴方を頑なに手離さなかったわ。」

それなのに、今では工藤新一を着信拒否した上に、瓜二つの貴方を避けているじゃない」

「三年前の貴方は工藤新一として江戸川コナンとしても、蘭さんの為<sup>ため</sup>に別れを告げた。それなのに工藤新一に似てるからって避けるだなんて、自分勝手にも程があるわ」

「……灰原、ありがとな……ほんと」

「別に私は？」

頬を染めて横を向く哀

コナンは満面の笑みを湛えていた

「哀君の言う通りじゃな」

「阿笠博士」

蘭の見送りを終えた阿笠博士は、一言だけ残念そうに呟いた

「三年前、蘭君が受け入れてくれたの〜」

「ああ、無理矢理にでも出れば良かったんだろうけどな？」

「あの時は仕方ないわよ？」

「そうだな？」

「で、どうするんじゃ？」

三年経った今、再び決断の機会を得たコナンは毛利探偵事務所を出る決意を固めた

「近日中に毛利探偵事務所を出る」



## 父娘

阿笠博士に見送られて工藤邸を出た蘭は、ふらつく足取りで自宅である毛利探偵事務所へと続く道をとぼとぼと歩いていた

何時もの笑顔は消え失せ、焦点の合わない目をした覚束ない足取りの蘭と擦れ違う人々は、一様に怪訝な眼差しを向けた

「ねえ、あれって毛利探偵の所のお嬢さんよね？」

「ええ、そうよ。一体どうしたのかしら？」

周囲の声も聞こえず、ただ歩き続ける蘭の脳裏には、先程、哀と阿笠博士に言われた言葉が響いていた

>コナン君は、蘭君と新出先生の関係にショックを受けて酷く傷付いておるんじゃないかよ

>こう言っちゃ悪いけど、蘭さんがいたら江戸川君は永久に出て来ないわ。三年前、別れを告げた彼を無理矢理引き留めた癖に、今では避けて傷付けてるじゃない？<

>今、江戸川君は漸く落ち着いて来てるの。これ以上彼を振り回して傷付けないで頂戴<

>済まんが、帰ってくれんかの<

殆ど無意識の内に自宅があるビルへと戻った蘭は、呼び止める小五郎の声も耳には届かない様子で、三階への階段を上って行った

「帰ったのか、蘭。コナンの様子はどうだったんだ？　おい、蘭  
!?!」

完全に外界を遮断した蘭の姿、流石の小五郎も何事が起こった事を察した

「……………何かあったな」

恋愛は当事者の問題故に傍観を決め込んでいた小五郎だったが、頂垂れる娘の姿を見るに見兼ねて、蘭の部屋の扉を数回ノックした

「おい蘭、コナンと何かあったのか？　何なら相談に乗ってやるぞ  
?」

愛娘を心配する小五郎の声に、蘭は数秒の沈黙の後、部屋の扉を開けた

「……一体何があった？」

涙に濡れた娘の頭を、幼い頃のように優しく撫でる小五郎の表情は、父親以外の何者でもなかった

「お父さん……、コナン君に……新一に酷い事しちゃった」

「そうか……（やっと気付いたか？）」

父親の胸で啜り泣く蘭

小五郎は父親として人生の先輩として、幼い恋を未だに引き摺る蘭に言葉を紡いだ

「いいか蘭……、恋愛ってのはな、待ってるだけじゃ逃げちゃあ駄目なんだよ。ぶつかり合うのも時には必要な事だ」

「え？」

怪訝な顔で父親を見上げる蘭

小五郎は男の立場から言葉を紡ぐ

「例え会えなくてもな、あらゆる媒体を使って相手を支えなきゃならんねえ。探偵坊主が姿を消してもう九年だ、とんでもねえ事件に巻き込まれている事は間違いねえんだよ」

「とんでもない事件って？」

「これは俺の想像でしかねえが、探偵坊主は、トロピカルランドで何だかの事件に巻き込まれたんだ」

小五郎の言葉で、何かが蘭の脳裏を掠めた

(何……今の……、何かを思い出した様な気がしたけど……)

「探偵坊主はその事件が元で姿を消した……と見て先ず間違いないだろう。そうなれば、周囲の人間に危害が及ぶのは必定、要するに蘭……おめえが一番危険なんだ」

「……！」

父親が発した言葉に驚愕する蘭

小五郎は尚も言葉を続けた

「死んだ事になっている探偵坊主は、蘭おめえを守る為に姿を消し影から守って来た筈だ。もしも仮に、江戸川コナンと工藤新一が同一人物だとしたら……工藤新一を待たない、だが江戸川コナンとして側にいて欲しい、でも見るのは辛いから避けるってのはあんまりじゃねえか？」

「俺が探偵坊主の立場だったら、間違いなく同じ事をするだろうよ……蘭、おめえと英理を守る為に、俺は自分を殺す」

「そりゃあ〜父親としては、散々おめえを泣かせて来た探偵坊主が腹立たしいかな？」

「一人の男としては理解出来る」

「……お父さん」

父親の推理を聞いて立ち竦む蘭

九年の歳月を得て、蘭は記憶の底に埋もれている出来事を思い出そうとしていた

「私……私……」

「良しく考えろよ、蘭」

優しく諭す小五郎に小さく頷くと、蘭は父親の言葉を重く受け止めて一人、部屋で考え込んだ

（もし……もしも、お父さんの言った事が本当だったとしたら？）

（私は新一に対してとんでもない事をしたって事？）

（ごめんなさい……新一）

（ごめんね……コナン君）

（私はちゃんと向き合わなきゃならなかったんだよね……）

(例えどんなに傷付いたとしても、ぶつかり合ってもう待てないって伝えなきゃいけなかったんだ)

(ごめんね……、でもなんだろう?)

(何か引っ掛かっている……何かを忘れてる様な……新一がいなくなったあの日、何かを見ている気がする……重要な手懸かりを……新  
一)

在って然るべき物（前書き）

早速お気に入り登録＆評価して頂いて本当に有り難う御座います

m (——) m

漸く自分の気持ちに気付いたコナンです……コナン鈍すぎ？



在って然るべき物

コナンが部屋へ閉じ籠ってから十日後、一つの節目を迎えていた

何時の如く、突然ロサンゼルスから帰国して来た優作と有希子、  
工藤邸に設けられている家族用のリビングで向き合っていた

「これが、お前の戸籍だ」

「慧一・コナン・工藤・アメリカ国籍だ、高等部進学はこれで大丈夫だろう」

「Thank You……父さん」

コナンが嬉しそうに受け取った物……それは、アメリカ合衆国の  
出生証明書とパスポート及び外国人登録証明書

義務教育期間の終了に伴って、無戸籍状態であるコナンの就学が  
出来なくなった事で、優作は哀とコナンの戸籍を作成していた

「新一……、LAに来ないか？」

「ね？そうしょ？新ちゃん？」

阿笠博士から、事の経緯を聞いている優作と有希子は、この三年間帰国する度に渡米を促していた

「俺と有希子は未だ日本国籍だが、永住権を既に取得しているし、老後はLAで過ごすそうと思っている。そうなればお前の渡米も時間の問題ではあるな」

「・・・良い機会だとは思っけどよ」

（蘭とは終わったし、この所奴等とは平行線の儘で進展がない……  
一旦、LAに渡米して、静養するのも良くはあるけどよ……）

俯き思案に暮れるコナンは何故か、未だに迷っていた

「これ以上新ちゃんが傷付くのは嫌よ？LAにいらっしやい？」

「まあ落ち着け、有希子」

「だって優作？」

何とかコナンを連れて帰ろうと懸命に説得する有希子

優作もまた内心は有希子同様、コナンを案じつつも逸る気持ちを抑えて、選択権をコナンに委ねた

「卒業迄は少し時間があるんだ、そう急ぐ事はないさ」

「でも」

愛妻の肩を抱いて宥めながら、優作はコナンに決断を促す

「良く考えて決断しなさい」

「わあった……、Thank You父さん母さん」

決断を迫られ目を伏せるコナンの脳裏には、この三年間、常に傍らでコナンを支えて来た哀の姿があった

（蘭とはもう終わってはいるが、灰原もいるし……、って何であいつが？）

「新ちゃん、どうしたの？」

突然、顔を真っ赤にして慌てるコナンを見て察しが付いた優作は、然り気無く背中を押した

「ほく成る程な、どうやら気になる娘がいる様だな」

「そんなんじゃねえよ？」

「その顔じゃ白状したも同然よ、新ちゃん」

「差し詰めお相手は哀君かな」

「あらくやつぱり哀ちゃんなの」

完全にからかいモードへと突入した二人に、一頻りからかわれて漸く自覚したコナン

蘭へ別れを告げたあの日から、三年の歳月が流れ様としていた

「うつせ？」

(何時の間にか……あいつに捕まっちまったな)

哀を想うこの時のコナンの表情は、嘗てない位の優しい微笑みを浮かべている事に、コナンは気付いていなかった

「やれやれ？」

「そんな顔されたんじゃ、からかう気も起きないわ？」

「は？」

自分がどんな表情をしているか、全く自覚がないコナンの顔面はもう真っ赤だ

「早く告白して一緒に連れて来い？」

「ちっちと告白しないと、鷲に油揚げ浚われるわよ」

「んな真似させつかよ？」

まさか両親に自覚させられるとは思ってもいなかったコナン……

独占欲だけは人一倍強かった

（他の男に渡して堪るか？）

（相変わらず独占欲強いんだから？）

満面の笑みを浮かべたと思えば嫉妬で怒りを露にする、表情豊かな我が子の姿に、優作と有希子は笑みを浮かべた

（世話の焼ける奴だ？）

（もう大丈夫ね）

「なあ父さん、家はどうすんだ？」

突如 正気に戻ったコナンは、脱線していた渡米に伴う問題へと無理矢理に話を戻した

「そうだな、築年数二十五年を経過して老朽化も進んで来ている、何れは取り壊す事になるだろうな」

「そっか……」

「新ちゃんが育った家だから寂しいけどな」

「形ある物は何れは形を失う物だ、仕方ないさ」

「じゃあねえよな」

思い出の詰まった工藤邸

一抹の寂しさを感じてコナン達は暫しの間想いを馳せた

「まあ、この家の処遇はお前次第だ」

「新ちゃんはどうしたいの？」

有希子が心配そうに声を掛けると、コナンは表情を曇らせても一つの問題を告げた

「正直な所、今は推理したくねえんだ。嘗ての工藤新一を求められて嫌気が差してる……」

「高校生探偵工藤新一は最早存在しない、にも拘わらず目暮警部は江戸川コナンではなく過去の亡霊工藤新一の幻影を求めろんだ」

「……目暮警部が待っているのは今の俺江戸川コナンじゃねえんだ」

「九年前に死んだ工藤新一の亡霊を待ってる」

幾分、疲れた表情で現状を憂うコナンを見た優作は、日本警察の現状を察して深い溜め息を吐いた

「そうか？」

「優作……、やっぱり静養させた方が良くんじゃない？」

心身共に疲れきっていると判断した有希子は、優作に判断を求めて振り返った



「ああ……そうだな」

「一度日本を離れて静養した方が良いかもしれない。九年間組織と渡り合った事もあって疲れてるんだろう」

「目暮警部には私が話して置く。元々、未成年に捜査協力させる事態が間違っているのだからな」

「そうね、新ちゃんは未だ高校生だったのに、授業中に呼び出して迄捜査協力させるのはどうかと思うわ」

「学業に支障がない範囲なら未だましも、出席日数が危くなる程呼び出して貰っては困る」

「父さん……母さん」

てつきり、甘えるな、と諭されるとばかり思っていたコナンは、配慮を欠いた目暮に対して眉を顰める優作に驚いていた

「お前も呼び出しさえなければ、現場には行かなかつたんだろう？」

「そりゃあ、授業中だったしな」

「今はどうなの？」

「保護者であるおっちゃんの手前、頻繁ではねえけど……」

コナンが言葉を濁すと、優作は言葉にならなかった先を察した

「成る程な……、毛利さんが留守で手を借りられない時に呼び出すのか？」

「ああ……」

「解った、日本警察は私が話を付ける。お前は暫く静養しろ、良いな？」

「わあつた……Thank You」

九年もの長い間、極度の緊張状態を強いられたコナンの精神は、限界に達していた

如何に優れた探偵と言えども、コナンはプロではなく、一般人に過ぎない

一向に進展しない組織との攻防に加えて、都内で勃発する難事件、更には中途半端な関係を強いられた蘭の存在

これらの諸問題が不運にも重なりコナンの精神を疲労させ、最早爆発寸前迄来ていた……

「ところで哀君は？」

「学校行ってるけど、灰原がどうかしたのか？」

不意に哀の話題に変えた優作にコナンが怪訝な声を上げると、優作は哀のパスポートを取り出した

「彼女の戸籍も作って置いたんだ、阿笠博士の養女になると決まっていたらどう？」

「良い機会だから、阿笠玲美の戸籍を作ったって訳」

「そっか、あいつも喜ぶだろうな」

「哀ちゃん、喜んでたんでしょ？」

「ああ、阿笠博士は親代わりだからな。喜んでたぜ、帰ったら来るんじゃないの？」

久し振りに親子の会話が弾んでいると、穏やかな空気を切り裂く様に着信音が鳴り響いた

「……」

無言の儘携帯を取り出し待受を確認すると、相手は目暮警部だった

「……はい、コナンです」

浮かないコナンの表情で相手が解った優作は、鋭い眼差しを向けた

「……はい、解りました」

電話を切り深い溜め息を吐くと、コナンはゆっくりと腰を上げた



## 危惧

「行くのか？」

浮かない表情の儘、目暮からの呼び出しに応じ様とするコナンに、  
優作は一言だけ言葉を紡いだ

「ああ……」

「無理しないでお断りしたら？」

優作も有希子も精神的疲労が著しいコナンが心配で引き止めるが、  
行かない訳には行かなかった

「そうしてえけどな、あいつ等が目撃しちまってるみてえだから……」

「あら、哀ちゃん達が発見者なの？」

「ああ、下校途中に遺体を見付けたりしいんだ」

「それなら仕方がないな？」

「コナンの言葉を受けて立ち上がった優作は、支度を整えるべくリビングを後にする」

「あら……、優作も行くの？」

「今の新一は崖っぷちだからな」

「なら私も行くわ？」

「そう笑顔で告げながらリビングを後にする両親の気遣いにコナンは思わず笑みを溢した」

(Thank You……)

「支度を整えて事件現場に向かい車から一足先に降りたコナンは、真っ先に哀・元太・歩美・光彦の姿を見付けた」

「おい、おめえら」

「あ、コナン君!!」

「コナン!!」

「出歩いて大丈夫なんですか？」

「おめえ顔色わりいぞ？」

十日間も学校を休んだコナンの姿を見るなり、一斉に駆け寄ると歩美が真っ先にコナンの体を気遣う

「コナン君、無理しちゃ駄目だよ？」

「Thank You、でも大分良いんだ」

と、コナンは務めて明るく振る舞うものの、顔色は決して良いとは言えなかった

(少しは顔色良くなってんだけど、体は怠そう……)

(無理してますね、コナン君)



(大丈夫じゃねえだろ?)

何処か鬨りのあるコナンの笑顔元太達は本調子でない事を直ぐに悟った

「突然呼び出してごめんなさい、江戸川君」

十日間、コナンに付き添った哀は傍らに佇むと本調子でないにも拘わらず、呼び出して仕舞った事を我が事のように謝罪して来た

「別に良いって、おめえのお陰で随分楽になってんだぜ？」

「なら良いけど、顔色が悪すぎるわ」

何時もの笑顔で話す二人の対面では、元太達が呼び出した目暮に怒っていた

「随分と止めたんだけどよ？」

「警部さんってば聞いてくれないの!?!」

「来れる様ならって言ってましたが、コナン君が断れない事を知って呼んでますからね」

仲間想いの元太・光彦・歩美

「コナンを殊の外案じる元太達は、目暮を睨み付けて怒りを露にしていた

「歩美、絶対に許さないんだから!!」

「全くです?」

「そつだよな!!」

「はい・うん!!」

「ありがとな……」

三人の温かい想いに、コナンは哀と顔を見合わせて笑みを溢し、強力な助っ人を指差した

「けど大丈夫、今日は目暮警部が頭が上がらない助っ人がいつからよ」

「「「え？嘘？」」」

見事に八毛った三人の視線の先には、悠然と近付いて来る優作と有希子の姿があった

「ちよつと、貴方ね？」

「じゃあねえだろ、俺が本調子じゃねえんだ」

「そう、流石に思う所があったのね」

「……日本警察に抗議するってよ」

「あら、面白そうね」

真剣なコナンに対して幾分面白がっている哀、コナンはそれとは言わずに小さな溜め息を吐いた

「バーク、お陰で厄介な問題が浮上してんだよ？」

「厄介な事って？」

意味深なコナンの言葉に表情を険しくする哀の隣では元太達が驚いていた

「やあ」

「皆、大きくなったわね」

「「「こんにちは？」」」

「「ご無沙汰してます？」」

「わざわざ済みません……」

「いや……構わないよ、呼び出したのは目暮警部だからね」

何時もの悠然とした笑みを湛える優作だが、流石に今回は目暮に  
対して静かなる怒りを覚えていた

「コナンの到着に気付き目暮が掛けた言葉は、  
>コナンくではなく  
>工藤くだった

「おゝ工藤君、待っとつたぞ」

「・・・遅くなって済みません」

複雑な心境で無理矢理笑顔を作るコナン、優作と元太達は其々に  
声を上げた

「この子は新一ではありませんよ、目暮警部」

「優作君じゃないか!!」

「ご無沙汰してます」

「もう警部さんだったら、コナン君は新一お兄さんじゃないってば!  
!」

「まったく何回間違えるんだよ!!」

「間違えると言つよりは、コナン君に新一さんを重ねてると言った所ですね」

「そっだね」

「はっきり言つて人権無視ね」

「全くです!!」

「そっだそっだ!!」

元太達に口々に責められた目暮は、上辺だけの謝罪を繰り返すに留まった

「いや、済まん済まん」

優作や元太達の抗議も、大して気にも留めない目暮は優作とコナンを現場へと案内した

「まったく、全然解ってねえぞ!!」

「ええ」

「まあ、優作さんに任せましょ？」

「哀ちゃん？」

仲間想いの腹立たしげな元太達の声聞いた高木警部補は、心底  
済まなそうに声を掛けて来た

「ごめんよ……皆、僕や美和子さんも言ってるんだけどね」

「高木刑事」

「全く効果ねえよな!!」

「そうなんだよ……、この儘ではコナン君を失う事態になり兼ねない。それだけは何としても避けたいんだ……」

「工藤新一君に続きコナン君迄も失う事は、日本警察の大損失なんだよ」

沈痛な面持ちで言葉を紡ぐ高木と元太達は、年齢差を越えて真剣に話し合っていた

「でもコナン君はもう限界だよ？」

「江戸川君の精神は崖っぷちに来てるわ。何が起こるか解らない状況だから、今の彼に推理をさせたくなかったのよ」

腕を組んで言い放った哀の言葉を真剣な表情で聞いた高木は、背後を振り向き最後の切り札である優作を見つめた

「もう、目暮警部の親友でもある工藤優作氏に任せるしかない」

「……優作さん、日本警察に抗議するそうよ」

「え、ほんとかい？」

「ええ、彼が言ってたから間違いないと思うわ。それだけ江戸川君の精神状態は深刻なのよ」



「もしコナン君の精神が破綻し、上層部が動けば目暮警部はただでは済まなくなる……」

「目暮警部が気付くしかないわね、警部さんは今工藤新一の亡霊を見てるんだもの……」

複雑な表情を浮かべた高木は、新米刑事当時からの上司を案じて目暮の背中を見つめていた

「じゃあ、何か思い出した事があつたら教えてくれよ」

「うん、高木刑事に教えるね」

「間違つても目暮警部には教えねえぞ」

「元太君、それはちょっと？」

幼少時からの協力者である、元太達の根深い怒りと不信感を買って仕舞った目暮

高木はただ静観せざるを得なかった

(日暮警部……)

## 逆鱗（前書き）

お気に入り登録&沢山のアクセス本当に有り難う御座いますm（  
）m

タイトルの逆鱗は怒らせると一番怖いであろうあの人を怒らせちゃ  
いました……

まあ、誰にでも逆鱗ですか？

## 逆鱗

当の目暮は高木の危惧等気付く事なく、哀達が発見して仕舞った遺体を優作とコナンに見せていた

「被害者は四十年代後半と思われる身元不明の外国人の男性と三十年代後半と思われる外国人の女性で、見ての通り全身が黒尽くめの出で立ちでな」

殺害されていたのは……

何と、組織の狙撃手であるキャンティとコロンだった

(今度はキャンティとコロン……)

自然と険しい表情になるコナン

傍らの優作は悠然とした笑みを浮かべ、然り気無く目暮を誘導し始めた

「目暮警部、身元が判らなければ我々にはどうする事も出来ませんよ?」

「やはりそうか……」

がつくりと肩を落とす目暮は、優作とコナンに期待していただけに頂垂れていた

「優作君と工藤君なら、最近次々と発見されている黒尽くめの遺体の件で、何か知ってるかと思っていたんだが……」

「私はただの推理小説家ですし、コナン君は中学生に過ぎません。残念ですがお役には立てませんよ」

深く詮索されては困るコナンは、優作の言葉に口出しする事なく二人の遺体を眺めていた

（死因は頭部の一発……即死か）

（この十日間の間、かなりの数のメンバーが見付かっている……、一体奴等に何が起こってるんだ？）

コナンが思考を掘り下げて推理していると、目暮の一言がコナンの精神を撃ち碎いた

「わざわざ来て貰ったのに済まなかったな、工藤君」

「・・・（また……か）いえ、構いませんよ」

小刻みに震えるコナンを見て、優作は早々に帰宅する事にした

「コナン君ですよ、目暮警部」

普段より数段低い優作の声

優作が醸し出す殺気の片鱗を、流石に感じ取った目暮は畏縮して謝罪する他なかった

「あ……ああ、済まない？」

「顔色が悪いな……」

「コナンちゃん、帰りましょ？」

「コナンちゃんに何かあったら、亡くなったご両親に顔向け出来ないわ？」

コナンを守る様に両脇から支えて目暮と引き離す優作と有希子

目暮に有無を言わずに、コナンと共に停めてある車へと向かった

「哀ちゃんも来てくれるかしら？」

「解りました、じゃあね」

「うん、また明日ね」

「おう！ー！」

「灰原さん、さようなら」

早々に車に乗り込み現場を離れたコナンは、車が発進した途端に後部座席に倒れ込んで意識を失った

「工藤君！ー！」

「新ちゃん？」

ついに限界を越えて倒れたコナン

真っ青な顔色で昏倒し呼び掛けに応じる事が出来ないコナンを、  
哀は素早く容態を診始めた

(熱が高過ぎるし、脈拍も早過ぎる)

「もう限界だわ、病院へ向かって下さい」

「解った」

哀の言葉を受けて素早くハンドルを切った優作は、設備が整った  
米花総合病院へと車を走らせた

意識を喪失した儘米花総合病院へ運ばれたコナンは、精密検査が  
行われた後緊急処置が施された。度重なる精神的疲労から、高熱を  
出し点滴を受けて深い眠りに就いているコナン



コナンの容態は予想より深刻な事態になっていた、組織の問題に始まり工藤新一に固執する目暮や中途半端な状態を強いられた蘭との関係等……

様々な問題に見舞われたコナンの精神は、九年間で積み積もった疲労からついに限界を越えた

検査が終わり個室で眠り続けるコナンを見下ろしていた優作は、拳を握り締め殺気を迸らせながら踵を返した

「有希子、新一を頼んだぞ」

「ええ……（優作……）」

無言の儘で扉を見つめる有希子は、不安気な眼差しを向けていた

「有希子さん……」

息子の想い人である哀にすぎる様な眼差しを向けられた有希子は、哀の気持ちをくみ取り力なく横に首を振る

「ああなって仕舞った以上……、最早誰も優作を止められないわ。」

決して怒らせてはならない人を目暮警部は怒らせて仕舞ったんですもの」

「優作がその気になったら最後、世界中を敵に回すと言っても過言ではないわ、世界的推理小説家工藤優作はそれだけの影響力を持っているのだから……」

「そうですね……」

扉から視線を戻した有希子は、高熱で苦しむコナンを見つめてつぶつりと呟いた

「恐らく新ちゃんも気付いてるわね……」

「まさか……、そんな筈は……」

緩やかに首を振った有希子は、沈痛な面持ちで言葉を絞り出す

「ううん、これ迄にもチャンスは幾度となくあったわ、新ちゃんは薄々気付いていた……だからこそ九年も掛かって仕舞ったのよ」

「じゃあ……工藤君は……」

驚きと困惑が混じった複雑な表情を湛える哀

有希子は小さく頷いて呟いた

「ええ、新ちゃんは感付いてる。あの方の正体と組織の真実、そしてあの方に守られていると言う事に」

コナンの個室を後にした優作は、抑えていた殺気を迸らせていた

(よくも新一をここ迄……)

(新一が懇意にしていたから……)

(新一が想いを寄せていたから、多目に見て来た)

(漸くここ迄、漕ぎ着けて来て、後少しで解放してやれると言う時に……)

(相応の報いは受けて貰おう……)

(目暮十三……毛利蘭……)

激怒した優作は、車に乗り込むなり携帯を手を取った

「もしもし、ご無沙汰しています。工藤優作ですが、これから少々お時間を頂けませんか？」

「はい……では後程、失礼します」

携帯を閉じた優作は、もう一台ポケットから漆黒の携帯を取り出し、ある人物へと電話を掛けた

「私だ、警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係の目暮十三と毛利蘭に脅しを掛ける……殺す必要はない」

## 抗議（前書き）

お気に入り登録がもう二桁に？

登録して下された皆様本当

に有り難う御座いますm（――）

m？

今話の抗議編は台詞が多めになってます。ラストの方の会話は少々立場が変化してます

## 抗議

コナンが意識を喪失している間……

優作は日本警察の象徴とも言うべき、警視庁最上階の一室にいた

「突然伺いまして申し訳ありません。お忙しい中、時間を割いて頂きまして、有り難う御座います」

「いえ、それは構いませんが……」

恐ろしく慇懃な礼儀正しさと、優作が醸し出す触れる者を切り裂く様なオーラ

来客用のソファアに腰を下ろす警視庁のトップ白馬警視総監は、対面の優作が迸らせる殺気に全身の筋肉が畏縮して行くのを感じた

(凄い殺気だ……、一体何が?)

流石に一警部の動向等知る由もない白馬警視総監は辛うじて本題を促した

「わざわざお越し頂いた用件を伺いしましょう」

額にうつすらと冷や汗を滲ませ完全に気圧される白馬警視總監に、  
優作は悠然足る態度で言い放った

「今日は私の息子の事でお伺いさせて頂きました」

「息子と言つと、工藤新一君ですか？」

怪訝な表情で問い返す白馬に対し優作は重々しく頷くと、もう一人の義息子コナンの名を告げた

「新一も関係していますが、今回お伺いしたのはコナン君の事です」

「江戸川コナン君ですか？ 確か、先日江戸川夫妻が事故で亡くなられた為、養子縁組を為されると聞き及んでおりますが……」

「ええ、息子に瓜二つのコナン君とは以前から妻と交流がありましたね……。それが縁で、事故で江戸川夫妻が亡くなられたのを機に養子縁組をしたんです……。些か問題が起きているんですよ」

「問題？」

事の次第を知らない白馬は先が読めずに、怪訝な表情を浮かべながら優作の意図を計り兼ねていた

(一体何があったと言っただ?)

「こちらの警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係に所属する目暮十三警部に、コナン君が度々呼び出されています」

ピクリと白馬の表情が強張り、眉が跳ね上がった

事件解決の為に長年の捜査協力を黙認して来た事を知っている優作は、他力本願で解決しようとする日本警察に対して怒りを覚えていた

双方共に互いを警戒する中で、優作は警視庁の長たる白馬警視総監に容赦なく斬り掛かる

「今のコナン君は様々な諸問題が重なり、精神的に不安定な状況が続いています。推理をしたくないと言う程、追い詰められて仕舞っている状況なんです」



「それにも拘わらず目暮警部は、不安定なコナン君を呼び出して、会う度に工藤君と呼んでいます」

「……要するに江戸川コナン君を工藤新一君と呼んでいると言う事ですか？」

「そうですね、幾ら注意を促しても変わりません。先程も発見者である元太君光彦君歩美君哀君達の制止を振り切って呼び出した上、工藤君と呼んでいました。例え仮にコナン君と新一が同一人物だとしても、コナン君を新一として呼ぶ事は、様々な事を経験し試練を乗り越えて成長して来た、江戸川コナンと言う存在を否定する事になるんですよ」

「……今、コナン君は？」

懸命に平静さを装ってはいるが、膝の上の拳は震え端正な表情は引き攣り、白馬の額からは冷や汗が流れ落ちていた

「この十日間は体調が優れずに、学校を休んで臥せていましたね、先程自宅へ戻る車内で昏倒して米花総合病院に入院しました」

「……！！（最悪だ……）」

完全にポーカーフェイスは崩れ落ち、頭を抱える白馬警視總監に  
対し優作の言葉は止まる所を知らない、それ程に迄、優作の怒りは  
深かった

「他ならぬ目暮警部だからこそ、息子共々協力をさせて貰って来ま  
した。それを良い事に授業中にも拘わらず、ましてや体調が優れな  
いコナンを呼び出して捜査協力を工藤新一である事を強いるとは、  
了見違いも甚だしい!!」

「申し訳ありません!!」

ソファーから立ち上がるなり、深々と頭を下げる白馬警視總監に  
対し、優作は至って悠然と構えており鋭い眼光を放っていた

「息子達は自分で要請に応じはしましたが、何分二人とも学生です  
から、自制が効きません。ですから呼び出すのは放課後の数時間の  
みにして頂きたい」

「解りました、此度の部下の不手際誠に申し訳ありませんでした。  
目暮十三警部は元より、警視庁内隈無く徹底した指導改善を早急に  
実施致します」

警視總監の平身低頭たる姿に、漸く怒りを和らげた優作は深い溜

め息を吐いた

「宜しく願います、まあ、コナン君が倒れたのはそれだけではないんですがね？」

「何かあられたんですか？」

優作が表情を和らげた事で、漸く一息吐いた白馬は詳しい事情を聞く事となった……

「元々息子達はある事件に巻き込まれています。その為に精神的疲労を抱え込んでいましたが、それに加えて今迄お世話になっていた毛利探偵のお嬢さんが、息子に瓜二つのコナン君を避けているんです。顔を見るのが辛い、でも手離したくない。ですが第二次性徴期を迎えたコナン君は、蘭君を慕うが故に過酷な状況で追い詰められて仕舞ったんですよ」

「そうでしたか……、ただのお姉さんでしたら問題はなかったんですよ。でもコナン君は本気で慕っていた……それ故に追い詰められ目暮警部が止めを刺して仕舞った……と言った所ですか」

「ええ、その通りです。今漸く解決に向かいつつあります。コナン君を新一だと連呼されるのは命に関わる、何がなんでも止めて頂かねば困るんですよ」

「……知らなかったとは言えども、一般人を命の危険に晒した事は紛れもない事実、目暮十三警部は厳しい処罰を与えます」

「私としてもここ迄するつもりはありませんでした、しかしながら二度も息子の命を失う事だけは、断じて避けなければならないんです。例えそれが許されない事だとしても……」

「……全ては罪もない国民の命を守る為です。貴殿方のその後に関しては我々が守り通します」

「有り難う御座います」

世界的推理小説家である工藤優作による、日本警察に対しての正式な抗議は警視庁中に知れ渡る事となり、本庁に戻った目暮十三は警視総監室にて嚴重注意を受けた後、上層部の処分の決定迄の間、自宅待機命令が言い渡された

## 迷路（前書き）

「真実へのCountdown」「虚像の追跡者 - Pursuer  
-」共々お気に入り登録&沢山のアクセスをして頂いて、本当に有  
り難う御座いますm（）m

今話の「迷路」で組織の目的の一部が明らかになりますが……

真逆の設定です？

## 迷路

通常ならば、日本中に知れ渡り日本警察は糾弾の嵐と言った所だが、抗議を行った優作本人が内部処理を依頼した為、マスコミ各社及び世間に漏れる事はなく、極秘の内に処理された

今回の一連の騒ぎは当然この人の耳にも入った訳で、即ち名探偵ならぬ名刑事の雄叫びが轟いた

「なんやて

!!」

「阿呆、静かにせんか!!」

大阪府警本部最上階

本部長室で雄叫びを上げたのは、ご存知服部平次警部この人

「それ、ほんまなんか!!」

父親の机に手を付いて詰め寄る平次に平蔵は淡々と答えた

「ああ、昨日コナン君が入院はった後、工藤優作はんが本庁に抗議はったんや」

「それで警部はん、処分決定の間自宅謹慎になつたんか？」

「そうや、えらい激怒してはるさかい相応の処分になるやろ」

「なんとかならへんのか？」

「無理やな、坊主の命が掛かつとる停職一ヶ月と言つた所やろ？」

「まあしゃあないな？」

頭を搔いて小さな溜め息を吐く平次は懐から一通の書類を出した

「坊主の見舞いに行くさかい休暇取りたいんやけどええか？」

「……まあええやろ？」

「序でに本庁と目暮警部の様子を見て来い」

「わあつた」

平次の休暇届に判子を押しながら仕事を言い付ける平蔵に対し、平次は文句を言わずに受け取った

「ほな、仕事戻りますよつて」

敬礼し一刑事と上司の関係に戻り部屋を退出する平次に対して、余計な一言が飛んだのは言う迄もない

「確り捜査せえへんと休暇没になるで」

「わあつとるわ？」

扉の隙間から顔だけ出して返事をする平次は年相応の若者の顔だった

「くくく……、未々ガキやな」

「……もう少しや」



平蔵がぼつりと漏らした一言が平次の耳に届く事はなかった……

翌日

「工藤！！」

米花総合病院へ駆け付けた平次は弱々しく横たわるコナンに目を見張った

(……無理しおってからに)

「よゝ、服部」

「まったく心配させおって？」

ベッドの縁に腰を下ろし溜め息を吐く平次の姿に、コナンは済まなそうに呟いた

「わりいな……」

「まあ、わざとやないんやし、かめへんって？」

「熱は下がったんか？ えらい高かったんやろ？」

「ああ、大分楽になったぜ」

「ならええけど……、何があったんや？」

横目でコナンを見下ろす平次は現役の警部だけあって鋭い眼差しを向けた

（そんな目で尋問すんなっての？）

平次の眼差しにもものともしないコナンはその胸の内を吐露する

「別に大したこたねえさ……ただ俺の推理通りだったってだけさ」

「ほっか……」

「なあ、服部、正義ってなんだ？」

「……工藤」

「俺……解んなくなっちゃった」

シーツを握り締めて、今では年上となった親友にやりきれない思  
いを吐き出すコナン

嘗ては平次自身も悩み苦しんだ果てに通った道を今コナンが通っ  
ている

少しばかり戸惑っている親友に対し平次は、嘗て自分が幼馴染み  
に言われた言葉を告げた

「そないに、難しゅう考えんでもええんちゃうか？」

「え？」

平次の言葉に俯いていた顔を上げたコナンは怪訝な表情を見せた

「相手は国家や、あいつ等の悪事は国と法が守る。正攻法での立件

はどう足掻いても不可能と来れば、最早方法は一つしかあらへんや  
る」

「お前はお前の正義を貫けばええんや、例えその唯一の方法が犯罪  
やとしてもな」

「……服部」

肯定されるとは思ってもいなかったコナンは、驚いた眼差しで平  
次を見つめた

「確かに方法は犯罪や、許される事やない。せやけどな、工藤……  
それは私利私欲やのうして、何の罪もない命を守る為にした事やで  
？」

「NOCは犯罪者やない、俺はそう思うとる。まあこの場合、NO  
Cとはちいとばかり違うけどな……… 大本は変わらへんやろ、工  
藤？」

犯罪であれど犯罪者ではない

そう告げる平次

コナンは目から鱗が落ちた様に何時もの笑みを浮かべた

「……そうだな、俺は何を迷ってたんだ。ただ信じれば良いだけじゃねえかよ。俺の父さんと母さんそして灰原は犯罪者じゃねえってな」

「ただ国家犯罪を暴く組織を受け継いだだけの事だ、まあ研究関係のおまけはある様だけだよ？」

「それだけ、並々ならぬ訳があるっちゆう事やるな」

「そうだな、でも一体何の目的でAPT X 4869を開発してプログラマーを集めてんだ？」

「それはトップシークレットや、ガードが固うて解らへん」

「おめえも知らねえか？」

「ああ」

お手上げの仕草に小さく毒づきはするものの、コナンは現地点で

判っている範囲で推理を掘り下げる

「ほんで、今どないなっとなるんや？」

「……秒読みって所だな」

「危険レベルのメンバーの遺体が相次いで見つかったんだ。本拠地の場所も判ってるし、後は時を待つだけだ」

「FBIは知つとんのか？」

「……恐らく、ジエイムズさんと赤井さんだけだな。後は知らねえと思う」

「ほな……連携は無理か」

「ああ、危険過ぎる。特にジョディ先生は感情的になるからな……  
万が一の時は暴走しかねない」

「あの姉ちゃんは厄介やな？」

ガシャガシャと頭を掻いて知恵を搾る平次に対して、冷静に推理するコナン

「何か……方法があれば良いんだけどよ？」

「あの姉ちゃんも、まさかあの方以下幹部達がNOCとは思わへんやろな」

「そりゃそうだろ、組織の創立者自体がNOCだってんだからな？」

「驚くやろな」

「てめえ面白がってんだろ？」

大阪人の気質なのか事ある毎に面白がる平次を半眼で睨み上げるコナン

多少熱はあるものの、普段通りの笑顔を漸く見せたコナンに優作と有希子そして哀は、ほっと胸を撫で下ろしていた

(良かった……新ちゃん)

（漸く迷宮を抜けた様だな）

（ええ……ありがと新ちゃん）

（……ごめんなさい、工藤君）

（そして……有り難う）

（果たして真実を知ったお前は耐えられるか？）



**盡く間（前書き）**

お気に入り登録&評価

本当に有り難う御座いますm（          ）m

更新遅くなって済みません……

## 蠢く闇

都内某所でジンが受けた指令は、殺す訳でもなく脅すだけでいいと言っ奇妙なものだった

「脅すだけ……ですか？」

「そつだ、殺す必要はない」

「ターゲット本人でなくてもいい、最も大切な人物を痛め付けてくれればいい」

些か奇妙な指令だと思いはしたが、あの方の命令は絶対である為おくびにも出さず肯定の返事を返した

「解りました」

「頼んだよ……ジン」

「Yes ,Boss」

昨夜の命令を思い返ししながら、ターゲットを睨むジンにウォツカが疑問を投げ掛ける

「脅せって一体どう言う事なんですかね、兄貴」

「さあな……、俺達はその方のご命令に従う迄だ」

「それはそうですが……」

そう言っつてジンは、スコープを覗きながらターゲット新出智明へ向けて引き金を引いた

ドゥー！！

一発の弾丸が放たれ、新出の車の前輪のタイヤを撃ち抜く

「うわっ！！パンクか？」

突然衝撃を受けた新出の車は、バランスを失いタイヤが悲鳴を上げ始める

路面と接触し火花を散らすタイヤ、新出は懸命にハンドルを操作するものの、右側前方にある電柱へ激突して漸く停止した

ドオン！！

「っ……、ついてないな」

激突の衝撃で頭をぶつけたのか、新出は頭を押さえて深い溜め息を吐いた

偶然にも通り掛かった人々が車の周囲に集まり始めると、ジントウオツカは音もなく姿を消した

「ずらかるぞ……ウオツカ」

「へい、兄貴」

四方や狙撃されたとは夢にも思わず、新出自身が自損事故として届け出た事で、警視庁の交通課に所属する由美はただの交通事故として処理した

この同時刻の目暮は自宅謹慎中……その為みどりターゲットと

なつた

普段通りに買い物に出掛けたみどりは、自宅近くの歩道を歩いていると……

「危ない!!」

「え……あ!!」

突然の声に上を見上げた途端にみどりの頭上目掛けて落下して来る植木鉢が視界に入った

ガシャン!!

一瞬の静寂の後、現場周辺は騒然となっていた……

「ちょっと奥さん？大丈夫？」

「大丈夫か!!」

「え……ええ、ああびっくりした？」

「危ないわね」

「ほんと？」

二人を襲った偶然を装った事故……入院中のコナンは未だ気が付いてはおらず、彼の地の最深部では彼による懸命の説得が続いていた

「……優作、未だ続けるのかい？今ならただの事故で済む、未だ引き返せるがな」

「ああ、続ける」

相手にその胸中を読ませない、その双眸は怒りの焰が燻り続けていた

そんな優作の態度に小さな溜め息を吐いた彼は友人として説得を試みる

「……君らしくないね？ 今回の件で憤る君の気持ちは理解出来る、だが彼は決して喜ぶ事はない、却って怒り悲しむと私は思うがな」

「……………解っている、盗一」

「新一はホームズを心酔し犯罪を許さない、真つ直ぐな子だからな……………きつと自分の所為だと責めて、私を許さないだろう」

「優作……………最愛の我が子をあそこ迄傷付けられて怒り狂うのは、親として至極当然の事だ。だがな、闇に染まり犯罪者と成り果てた君の姿は見たくない、その怒りは権力にしがみつき命を弄ぶ奴等に向ければいい。違うかい……………優作」

「新一君同様に、たった一つの真実を追い求め犯罪を許さない君を、私は良く知っている」

「これ以上の脅迫行為は私怨……………ただの犯罪だ」

静まり返り沈黙が支配する室内盗一の説得を受けて自分の闇と向き合う優作

数分間の沈黙の後、盗一が試みた優作の説得は終わりを告げた

「……………そうだな、盗一。私はどうかしてたよ？」

冷静さを取り戻し笑みが戻った優作

冷静さを失い愚行に走った愚かな自分を恥じた優作は、普段通りの悠然とした笑みを浮かべた

「それでこそ君だよ、闇の男爵」

最悪の事態を免れる事が出来てほっと安堵した盗一は、奇妙な命令を取り下げるべく携帯を手に取った

「はい、ジンです」

「ジン、脅しはもう良い」

「解りました」

電話を切り優作に視線を向けると、ばつが悪そうに苦笑する優作の姿に盗一もまた笑みを溢した

「一体どうなるかと思ったよ？」



「ははは……、済まん済まん？」

「切れた君程、恐ろしい者はない？」

優雅で気品を漂わせる笑顔を常に保つ盗一を見つめていた優作は、ふと表情を翳らせ視線を落とす

「君には本当に済まない……」

沈痛な面持ちで、突然謝罪する優作の口から紡ぎ出された言葉は静寂を破り室内に響き渡った

「それは言わない約束だろうか？」

「そうだったな？」

目を閉じて何かを思い出す様に思考の海へと潜る優作は、組んだ手に深く頂垂れて深い溜め息を吐いた

「権力者達による違法臓器移植の実態を暴く為に集まった仲間達が何時の間にか歪んで仕舞った……」

「ああ……、何の罪もない若者達の臓器を奪い健康を手に入れる輩は、何時の時代も途絶える事はなく多くの若者達の命が犠牲になって来た」

「不甲斐ない自分を責めるかの様に吐き捨てる優作と盗一」

「それも、漸く終わりを告げる。国家犯罪を暴く為に生まれた組織にジンが加わった事に依って、大きく変貌を遂げて仕舞った？」

「ジンはどうする？」

「手筈が整った今となっては消すしかないだろう、組織を凶悪化させた張本人であり無断で数多くの命を奪って来た男だ」

「更生するとは思えない、処分は已むを得ないだろうな？」

「ああ……、明朝の決行と同時にジンを始めとする狂犬達を処分しろ。全データは消去、更生の余地があるメンバーは放置して構わない」

「解った、通信衛星への侵入を最優先にするが構わないかな？」

「ああ、ナポレオンやスカイが協力し合って暁と共に突入して来る。タイミングを見計らって決行してくれ」

「解った。いよいよだな、スピリタス」

「その名前で呼ばれるのも最後だな、ブルームーン……明朝の通信衛星の侵入準備に取り掛かれ」

「OK、Boss」

漸く時が満ち闇が蠢き始めた今、甘い酒に酔って来た権力者達の逃げ場は、最早存在しなかった

## 意地悪

水面下で刻々と準備が進む一方、コナンを危険から遠ざけるべく  
巧妙に仕組まれた見舞い客が続々と病室を訪れる

その最たるが平次だ

親友が入院したとなれば真つ先に駆け付けるであろうと推理して  
息子を唆した平蔵

居候先である毛利探偵事務所を出る事にしたコナンの意向に従い、  
僅かばかりの荷物の運び出しと挨拶に訪れた有希子は然り気無くコ  
ナンの入院を知らせた

「入院!!」

「ええ、コナンちゃん車で倒れちゃって入院しちゃったのよ」

驚いて目を丸くする小五郎

「嘘……コナン君が入院だなんて……私の所為でコナン君が……」

自分を責めて涙を浮かべる蘭

そんな一人娘を小五郎は慌てて宥め始めた

「蘭、おめえの所為じゃねえ？」

「ううん、私の所為よ！！ 私が悪いの……コナン君を避けてたからコナン君は入院しちゃったのよ！！」

「ごめんね……コナン君、ごめんね」

顔を両手で覆い泣き崩れる蘭に対し、呆れ果てた有希子はきつぱりとした口調で言い放った

「悲劇のヒロインに浸ってる所を悪いんだけど、コナンちゃんが入院したのは蘭ちゃんに無視されたからだけじゃないわよ」

「え……？」

「有希ちゃん……」

少々棘のある言葉を言い放った有希子を咎める様に振り返った小五郎だったが、当の有希子はものともせず淡々と返って退ける

「三年前コナンちゃんがここを出ようとした一番の理由はなんだと思っ？」

突然の有希子の問いに対して、蘭も小五郎も口を揃えて失恋を匂わす言葉を紡いだ

「え……それはその……」

「そりゃあ〜あれだろ？」

「コナンちゃんが蘭ちゃんに失恋したからだって言っの？」

はっきりと言わない蘭と小五郎に代わって有希子はきっぱりと言っ退ける

「違っつてのわ、有希ちゃん」

「ええ、違っわ」

きっぱりと否定した有希子……小五郎は怪訝な顔で問い返した

「じゃあ、理由は何だったんだ？」

「確かにコナンちゃんは蘭ちゃんを好きだったわ、結婚したい……とそう思う位にね」

「……」

有希子に過去形で告げられたコナンの想い、蘭は少なからず衝撃を受けた

「ごめんなさい……」

膝の上で拳を握る蘭

有希子は構わず言葉を紡いだ

「謝らないでいいのよ、ただ単に十歳年下のコナンちゃんが対象外だったって言うだけなもの」

「でも、蘭ちゃんはコナンちゃんを手離したくはなかった、側にいて欲しかった、でも新ちゃんと瓜二つのコナンちゃんを見ている事が辛かった……だから避けたのよね」

「……はい」

まるで尋問されているかの様な有希子の的を射た言葉に、俯いてただ頷くしか出来ない蘭は有希子が紡いだ言葉に漸く頭を上げた

「その時、蘭ちゃんは一度でもコナンちゃんの事を考えてくれたのかしら？ 第二次性徴期と言う難しい時期を迎えたコナンちゃんの事を少しでも想ってくれた？」

「あ……（そう言えば私、コナン君の事を考えた事なかった）」

目を見開いて茫然と有希子の問いに答える蘭

「想ってくれなかったでしょ？」

「はい……、済みません」



有希子は確認するかの様に問うと小さな溜め息を吐いて微笑んだ

「コナンちゃんね、とっくに蘭ちゃんへの思いにはピリオドを打っていたのよ。まあ、多少は引き摺っていたけどね」

「ちょっと待ってくれよ、有希ちゃん。なら何で坊主は……あ！  
！そう言う事が……！」

「え？」

「そ、コナンちゃんも男の子だから限界だったのよ。だから距離を置こうとしていたって訳？」

「何時迄もガキじゃねえか？」

有希子と小五郎の会話に付いて行けない蘭は首を傾げて交互に見つめる

「お父さん？」

「……解らねえんらしい？」

訳が解らない自分の娘の幼さに呆れた小五郎は蘭の頭を撫でながら頂垂れる様に呟いた

「コナンちゃんは頭良いから余計にね」

「間近にいたんじゃない？」

二人の視線を一身に受ける蘭は終始訳が解らず首を傾げるのだった

「あ〜????」

「まあ、そう言う訳だから」

「わあった、当面は有希ちゃん家に住むのか？」

「多分そうなるわね、隣に哀ちゃんもいるし、向こうに連れて帰るかはコナンちゃん次第ね？」

「ロサンゼルスに連れて帰るのか？」

「ん〜、哀ちゃんが一緒ならそうなるわね」

「ってえ事は、坊主の相手は阿笠博士ん所のガキか」

「そうなのよ、コナンちゃんってば漸く自覚したのよ？」

「か〜、まどろっこしい奴だ？」

「コナンちゃんの恋愛は一目惚れじゃなくて、ワインが熟成する様に想いを深めて行く……そんな愛だもの」

「コナンらしいな？」

（やっぱり哀ちゃんなんだ……、ちょっぴり悔しいな〜）

完全に蚊帳の外にされた蘭は、一人寂しそうにコナンと過ごした日々を思い出していた

（そう言えば、何時も哀ちゃんと一緒だったっけ）

「悔しいんでしょ、蘭ちゃん」

突然話題を振られた蘭が驚いて顔を上げると、そこには不敵に笑う有希子がいた……

「ねえ、蘭ちゃん、仮に新ちゃんとコナンちゃんが同一人物だとしたらどうする？」

「え……」

「新ちゃんが江戸川コナンになって蘭ちゃんの側にいて守って来たとしたら……どうする？」

「どっつて……」

有希子の質問に戸惑い答えに詰まった蘭

「新ちゃんなら恋愛対象だけど、コナンちゃんなら対象外って事は蘭ちゃんの想いは子供の恋愛だったって言う事よね？ 新ちゃんが大変な事件に巻き込まれて、小さな体で精一杯蘭ちゃんを守り通して、蘭ちゃんの幸せを願って新しい恋を祝福したとしたらどうする？」

笑顔で詰め寄る有希子

返答出来ない蘭

小五郎は蘭を静かに見守った

(蘭……)

(新一とコナン君が同一人物だったら?)

(もし……もしもそうだとしたら私は新一を子供扱いして一番残酷な方法で新一を傷付けてしまったと言う事になる……)

(私は待たされて等いない……)

(私が新一を裏切った……)

## 千客万来

「ほ、漸く自覚したんか」

一通り現在の状況をコナンから聞き出した平次は、親友の小さな変化を見逃さなかった

他人の恋愛事情には鋭い平次は顔を真っ赤に染め上げたコナンを、これ幸いとからかい始めた

「うつせえ？」

「で、もう告ったんか？」

ベッドの縁に腰掛け、漸く訪れた親友の新しい恋路にコナンの頭を小突いて進捗状況を問い詰める平次は、やはり嬉しそうだ

楽しそうに笑ってコナンをからかう平次に、林檎の様に真っ赤になりながらコナンも懸命に遣り返していた

「ま？未だに決まってるんだろ？」

「そう言つおめえはプロポーズしたのかよ？」

「俺の事はええやろ？」

「早くしねえと鳶に油揚げかつ浚われるぜ」

「放つとけや？」

「俺はお前程、モタモタしとらんわ？」

「バ一口、俺は気付いたばっかだつつうの？」

「……それもそやな、まあ確り気張れや工藤」

「早よ告らんとちつこい姉ちゃん盗られてまうで？」

「バ一口、んな事させつかよ……」

熱が冷めやらぬ火照った顔を、窓からの冷たい空気で冷ますコナ  
ンの姿に平次はほっと胸を撫で下ろしていた

(多少は引き摺るやるけど……もう大丈夫やな、工藤)

賑やかな会話が途切れて暫しの静寂が訪れた頃、扉の外からひそひそ話が漏れて来た

「「ほらね、やっぱり哀ちゃんだったよ」「

「「鈍い奴だぜ」「

「「ほんとですね」「

「「ち？違つわよ？」「

声の主は、コナンの入院を聞き付け駆け付けた、元太光彦歩美と哀そして阿笠博士だった

必死に隠れているつもりなのか？ 扉の隙間からは歩美の制服のスカートが見えておりばればれだ

これに気付かないコナンと平次ではなく、会話が途切れた途端に



見付かった

「何しとんねん？」

「おめーらー!!」

当然の如く顔を真っ赤にして怒鳴るコナンを手荒く祝福する三人は、満面の笑みを浮かべて喜んだ

「やっぱり哀ちゃんだったんだ!!」

「鈍すぎるぞ、コナン!!」

「そうですよ!!」

「放つとけつうの？」

コナンは元より、哀も真っ赤に頬を染め上げ阿笠博士の隣で小さくなっている

「良かったの、哀君」

「私は別に……」

涙ぐんで喜ぶ阿笠博士に対し、顔を真っ赤にして否定する哀だったが、当のコナンが押し切られる形で肯定して仕舞い哀の逃げ場はなくなっていた

「早よ、言わんかい」

「そつだよ、コナン君」

「男ならバシツと決めろってんだ」

「灰原さんも待ってますよ」

「う……わあつたよ？後で言つて？」

「」「やったあ！」「」

小さな友人達に囃し立てられて観念したのか、コナンと哀はぽつりと呟いた

「おめえらの前で言えるかっての……」

「お願いだから二人の時にして……」

「あたりめえだ？」

嘗ては対極に位置していた二人

> 犯罪組織の科学者と高校生探偵<

> 加害者と被害者<

互いに相容れない出逢う筈がなかった二人、偶然に偶然が重なり出逢うべくして出逢った二人は、共に手を携えて運命に立ち向かい

…… 未来を勝ち取るうとしていた

・コンコン・

(今日は随分と多いな……)

賑やかな病室の扉をノックする音が響き、新たな来客に首を傾げながらコナンは入室を許可した

「どうぞ」

「突然来て申し訳ない、コナン君」

引き戸を開けて入って来たのは、白馬警視總監と小田切刑事部長・松本管理官そして目暮警部だった

铮々たる顔触れに驚いたコナンと平次は、目を大きく見開いた

「「は……白馬警視總監!!」」

驚いて声を張り上げたコナンと慌てて直立不動で敬礼した平次が発した大物の名前に全員が驚きを隠せなかった

「「ええ!!」」

(日本警察のトップが直々に謝罪に来るなんて……)

日本警察の大物と言う訪問客を受けて阿笠博士は慌てて元太達に病室を出る様に促した

「みんな？廊下に出ようかの？」

「それがいいわね……」

無言で頷きそつと病室を出ようとすると、小田切・松本・目暮は阿笠博士と哀達に対して心底済まなそうに謝罪して来た

「済みません……、阿笠さん」

「皆済まんな」

「いえ、構いません」

そつと引き戸が閉じられると、平次が驚きを隠せない儘声を掛けた

「白馬警視總監・小田切刑事部長・松本管理官・日暮警部」

つい先程迄賑やかだった室内は、一転して水が打った様に静まり返り張り詰めた緊張感が支配した

「平次君じゃないか」

同期である平蔵の息子に目を止めた白馬警視總監は、極自然体で声を掛けた

「ご無沙汰してます、白馬警視總監？」

「ああ、そんなに畏まらなくていい。今日は非番かね？」

「はっ？ 今日には休暇ですねん？」

「坊主が倒れたて聞いて、慌てて親父に許可もろったんですわ」

「そうか、お父さんは息災かね？」

「親父は殺しても死なしまへんで」

「相変わらずの様で安心したよ」

「はい、親父も気にしとりましたわ」

「そうか」

一通り平次と挨拶を交わすと、一同は神妙な顔付きでコナンに向き直った

「コナン君」

真つ直ぐにコナンを見据えると……深々と頭を下げた

「この度は本当に申し訳なかった」

「……白馬警視總監」

「捜査に国民を、しかも未成年である工藤新一君や君に協力を要請する事を黙認して来た私の失態だ」

「本当に申し訳なかった」

深々と頭を下げる、日本警察の大物達にコナンは静かな声で頭を上げる様に促した

「白馬警視總監小田切刑事部長、皆様……どうか頭を上げて下さい」

コナンに促され頭を上げると、そこには穏やかな笑みを浮かべるコナンがいた

「目暮警部だけの所為ではありません、偶々私が疲れていただけの事……私の未熟さ故に耐えられなかっただけの事です」

「いや、君は未だ未成年でそれが普通なんだ。例えば君が成人した名探偵だったとしても、体調が悪いコナン君を呼び出した僕に配慮が足りなかったんだ。その上あまりに似ている君達を混同して仕舞い、辛い思いをさせて仕舞った事を申し訳なく思っている」

「申し訳なかった、コナン君」

「だが、決して君の実力を認めていない訳ではないんだ」



「解つてくは、田舎警部……」

## There friends

三十分後

白馬警視總監一行は、扉の外に待機していた高木美和子・涉両警部と共に本庁へ戻って行った

「あっさり許して良かったんか？」

目暮達に未だ怒っているのか、納得出来ない様子の平次は腕を組んでコナンへ問い掛けた

「ああ、もう怒ってねえよ」

「それにしちゃ浮かない顔しとるやんけ」

この九年間、影からコナンを支え幾度となく抗議して来た平次にとって、今回の有無を言わさない謝罪内容に到底納得いく訳もなかった

それもその筈、大阪府警の警部である平次は、警察官と言う立場から事ある度に抗議し続けて来た……と同時に、成長するに連れて

傷付き悲し気な笑みを浮かべる様になった親友を案じて相談に乗り支えて来たのだから無理はない

「……蟠りが消えた訳じゃねえが、何時迄も怒ってちやガキみてえだしな」

「まあそれが大人の対応やな、白馬警視總監直々に出向かれたんや、ごねて追いつ返す訳にもいかへんし、どのみち日本警察の大損失には代わりあらへん」

「当分の間は、協力する気ないんやろ？」

「……ああ」

窓の外を見つめた儘コナンは、沈痛な面持ちで目を伏せると深い溜め息を吐いた

「今は、組織だけで手一杯だ」

「……ほうか」

数分間、重苦しい沈黙が流れた病室にコナンの声が響き渡った

「な、服部、俺って何者なんだ？」

「工藤……」

「俺は工藤新一なのか？」

「それとも江戸川コナンなのか？」

「確かに俺は工藤新一として生を受けた、だが九年前に幼児化して江戸川コナンとなってからは……工藤新一時代より遥かに楽しかったんだ」

「毎日下らねえ会話をして、キャンプや海に行って、探検して暗号解いて、サッカーしたり野球したりゲームしたり、テスト勉強に付き合わされた事も一度や二度じゃねえ」

「殺人事件に巻き込まれる度に危険な目に遭ってるってのによ、あいつ等は全然懲りなくて決まって自分達から首を突っ込むんだ」

「……工藤新一の時にはこんな事なかった、俺は流行りのゲームやテレビは興味がなくて、何時も父さんの書斎でホームズとか世界中

の推理小説を読んだ。自然とホームズの話題や血まなぐさい事件の話ばかりする俺の周囲には誰もいなくなって、学校のダチとはサッカーの話題位しか話が合わず、大抵は推理小説を読むか寝てるかのどっちかだった」

「そんな俺の隣には、何時も蘭がいた」

「ホームズの話や文句を言いながらも聞いてくれたのは蘭だけで、何時の間にか惚れてた」

「俺には蘭しかいなかったんだよ」

「ははは……笑えるだろ？」

「日本警察の救世主と言われた、工藤新一には腹を割って話せるダチはいねえんだ……」

(工藤……)

自分の掌を見ながら、切な気な表情でぼつりと本音を溢す親友に對して、平次は声を掛けられなかった

工藤新一と言う決して逃れられない影に今のコナンは己を保つのに精一杯だった

(……そないに大事なダチなんか、俺本気で妬いとるわ?)

十歳年下の元太達にちよっぴり嫉妬した平次は一際深い溜め息を吐いて最良と言える道を示す

「ほなら江戸川コナンの儘でええやないんか？」

「……良いと思うか？ 服部」

「江戸川コナンは本来なら存在しない人間だぜ？」

すがる様な眼差しで見上げるコナンの真横に腰を下ろした平次は、頭を撫でながら力強く告げた

「俺はええと思うで？」

「道は二つある」

「工藤新一に戻り九年のブランクを埋めて、正体を明かす明かさな  
いに拘わらず、あいつ等と少なからず距離を置くか」

「江戸川コナンとして工藤新一の影を背負いながら、あいつ等と生  
きて行くか……この場合は正体を明かしても明かさなくても大して  
変わらへんやろな」

「どっちを選択するにしてもや、工藤新一は江戸川コナンの影を、  
江戸川コナンは工藤新一の影を背負う事になる……後はお前次第や、  
工藤」

「まあ、俺と会ったんもちっこうなってからやし、お前の知能指数  
と推理力洞察力等、全てが高くて意気投合し、何れ養子なる事を知  
つとつたつて筋書きなら、俺がお前の事を工藤工藤って呼んでたん  
も説明が付くやろ」

「確かに江戸川コナンは本来ならば存在せえへん、せやけどな工藤、  
この九年間江戸川コナンは確かに存在したんや、俺は江戸川コナン  
と言う人間は別人やと思うとる」

「どちらを選択しても、お前がお前である事には変わりはないんや  
……お前が”迷宮なしの名探偵” ”日本警察の救世主”である事  
は、今も昔も変わりはない」

「せやる?」

”平成のSherlock Holmes”

親友服部平次の言葉の一つ一つに込められた想い

コナンは目頭が熱くなりながらも懸命に堪えて小さく呟いた

「Thank You……服部」

堪えきれず一筋の滴が溢れ落ち腕で覆って啜り泣くコナンの肩を、  
平次はただ無言で抱いていた

(九年もよう耐えたな、工藤)

(犯罪組織に命を狙われると言う死と隣り合わせの日々の中で、お前は自分に関わる人達の命を守り通した)

(普通なら当に発狂しとる所や)

(十七歳と言う多感な時期に全てを失い、苛酷な真実を知って尚も



お前の魂の輝きは失われていない)

”) 平成のSherlock Holmes”は伊達やないわ?)

(せやけどこいつ、一体幾つの迷宮に迷うとんのや?)

何人たりとも立ち入れぬ空間

平次はターニングポイントを迎えて立ち止まっていた親友が再び歩み始める瞬間を見届けたのだった

「ありがとな……」

「かめへんって、幾らでも相談に乗ったるさかい気にせんでええ」

静寂に包まれていた病室は、泣き止んで照れ臭そうにお礼を言うコナンと、満面の笑みを浮かべる平次の笑い声に包まれていた

コナンと平次が再び他愛もない会話を再開して暫く経った頃、新たな見舞い客が訪れ様としていた……



## 予想外の見舞い客（前書き）

お気に入り登録&評価&アクセス本当に有り難う御座いますm（  
|（m？

## 予想外の見舞い客

「Hi, cool guy」

「ジョディ先生・キャメルさん・赤井さん」

「よー、FBIの姉ちゃんやないか」

新たな見舞い客はFBI捜査官のお馴染みの面々で、幾分慌てた様子で病室に入ってきた

「良かった、無事で？」

「は？無事？」

訳が解らず見事にハモった平次とコナンは首を傾げて顔を見合わせた

「突然ごめんよ、コナン君」

「坊や、元気そうだな（涙の痕跡……知って仕舞った様だな）」

「うん……どうしたの？」

病室に入るなり脱力した面々にコナンは首を傾げて問い掛けた

「どうもどうもないわよ？」

「ジヨディ先生??？」

「なんやなんや？何が遭ったんや？」

腰に手を当てる身振り手振りで吐き捨てるジヨディに困惑するコナンが益々解らずに首を傾げると、赤井が苦笑しながら事の経緯を説明し始めた

「先程坊やが入院したと聞いてな、もしや奴等が何か仕掛けて来たのかと思って慌てて来たんだ」

「時期が時期だけに、奴等は何をするか解らないからね？」

「まったく、心配したのよ？」

「どうやらコナンが入院した事で組織が何か仕掛けて怪我を負った  
と思ひ駆け付けてくれたらしい」

「成る程な、確かにタイミングが悪すぎや」

「ごめんね、心配掛けて？」

多忙なFBI捜査官達に心配掛けて仕舞ったコナンは慌てて謝罪  
すると共に笑顔を向けた

「忙しいのに来てくれて有り難う」

「良いのよ」

「コナン君には世話になってるからね」

「まあ、無事で良かった」

ほっと安心して笑みを浮かべるジョディ達はコナンの赤くなった  
目元を見逃さなかった

(目が赤いわね……泣いていたのかしら?)

(何か遭ったのは間違いない様だが……)

少し訝しみながら、心配そうな眼差しを向けるジョディとキャメルを他所に、赤井は射る様な、探る様な眼差しをコナンへと向けた

「どうやら迷いを吹っ切れた様だな、坊や」

「うん……、何時からかな……。自分が解らなくなってたんだけどね……」

暫し思案する様に目を伏せたコナンは、ゆっくりと赤井を見据えると、意を決して問い掛ける

「赤井さんは知ってたんだよね？」

儂げに微笑んで眼差しを向けるコナン

何も知らないジョディとキャメルは、赤井とコナンを交互に見据

えながら怪訝な声を上げた

「え……何の事なの？ 秀？」

「コナン君？」

二人の問い掛けに対し、何方も答えない儘、赤井は短く返答した

「ああ……、確証を得られたのは最近なんだがな……」

「……そう」

辛そうに目を伏せて再び沈黙したコナンの傍らには、平次が心配  
そうな眼差しで寄り添っていた

「工藤……」

「……大丈夫だ、服部。 覚悟は出来てっからよ……」

「無理しなや、俺がおるさかい」



「Thank You……」

心配で堪らない

そう言った眼差しで寄り添う平次に、ジヨディとキャメルは、  
「何事が遭った」……と確信し気を引き締めた上で、深く傷付いてい  
るコナンと赤井へ再度問い掛けた

「一体何が遭ったの？ コナン君」

「赤井さん？」

数秒間沈黙するコナンと赤井は確認するの様に視線を合わせると、  
二人は小さく頷き合うい意味深な言葉を紡ぐ

「今は未だ言えないな……」

「ごめんね……、ジヨディ先生キャメルさん」

儂げに微笑むコナンの姿に何も言えなくなった二人は、小さく溜  
め息を吐いて諦めた様に承諾の言葉を発した

「仕方ないわね？」

「まあ、明日には解るだろうから、もう少し待ってくれないか」

「解ったわ、秀」

「解りました」

こうと決めたら、梃子でも動かないし口も割らない二人を、良く知っているジヨディとキャメルは早々に諦めた

先程、赤井が口を滑らせた”明日” と言う言葉を訝しんだコナンは、まさかとは思いながら口を開こうとした所で平次が遮った

「あ「明日って何かあるんか？」

「服部君は何も知らされてないのね」

「何の事や？」

ジョディの言葉に怪訝な顔を向ける平次と、察しが付いたコナンは鋭い眼差しを向けた

「まさか……、ジョディ先生」

「ええ明日、本拠地に突入する事になってるのよ」

「明日!?!」

まさか明日とは夢にも思わず、コナンはシーツを握り締めて詰め寄った

「どつりでSATが騒がしい筈や?」

「気付けよ、てめえ……」

「じゃあないやろ、どうせ親父の箝口令なんやからの」

お手上げの仕草でコナンの抗議をばつさりと切り捨てる平次だったが、見舞い客の多さの訳に気が付いたコナンは、拳を握り締めて抗議の声を上げたのだった

「あ……んの、くそ親父!!」

「そう言う事がよ!」

優作に対して、怒りを露にするコナン

「コナン君?」

「何か遭ったのね?」

「やたら来ると思えば、俺は病み上がりだぞ!!」

「くくく?」

怒りを爆発させたコナンの凄まじさに、ジョディとキャメルは苦笑し、赤井は懸命に笑いを堪えていた

「そう言や……、今日はやたら見舞い客が多かったんやけど、優作はんか有希子はんの仕業やな?」

「大方、病み上がりのお前を疲れさせて、明日は起き上がれない様にするつもりやろな」

呆れ果て起こる気にもなれず、平次は横目で怒り狂うコナンを見下ろした

「絶対に行つてやる!!」

「熱下がった言うても、未だ微熱あるんやで？ 幾らなんでも無理や、何なら俺がお前の代わりに行つてもええで？」

仕組みられた見舞いと知って大人しくする親友でない事を良く解っている平次は、一応説得するもののコナンの決意は固かった

「これは俺の事件だ!! 俺が解く!! おめえは手を出すな!!」

「協力してくれる事には感謝してる。だが、当事者でないおめえを危険に晒す訳にはいかねえ。それに……これは俺がけりを着けねえといけねえんだよ」

「工藤……、けど俺はお前が心配なんや」

何時も影から協力する平次の想いはコナンも良く解っていた……  
だからと言って唯一無二の親友を危険に晒す事等、到底出来る筈も  
なかった

「Thank You……服部、けどおめえだけは失いたくねえん  
だ」

嵐の前の静けさ（前書き）

m お気に入り登録&何時も読んで頂いて有り難う御座いますm（  
m

コナンが少々甘えん坊になって仕舞いました？

## 嵐の前の静けさ

シンと静まり返った病室

滅多に明かさないコナンの想いに誰もが胸を締め付けられた

「……工藤」

「コナン君……」

(親友……か)

暫しの沈黙の後、親友の想いに破願させた平次は一言だけ呟く

「おおきに……、工藤。けどな俺もお前を失いたくないんやで？」

二人の絆の深さを目の当たりにしたFBIと有希子は、予想外の見舞い客に臍を噛みながら、コナンと平次の深い絆に小さな溜め息を溢した

(ほんと、良いお友達に巡り会えたわね新……ううん、慧ちゃん)



タイミングを見計らい有希子が扉に手を掛けた三十分程前……米花町の毛利探偵事務所では、コナンの荷物を受け取った有希子が、ビル前の路上で小五郎と向き合っていた

「コナンちゃんがお世話になりました」

「良いつて、有希ちゃん？」

有希子の言葉に囚われた蘭を見かねた小五郎は、一言言いたそうに溜め息を吐いた

「あら、事実でしょ？」

何時もの明るい笑顔で、ウインクを飛ばす有希子に対し、無駄だとは思いつつも小五郎は苦言を呈した

「だからと言って、あれはねえだろ。まあ、事実ではあるかな？」

「母親として、息子を傷付けた、蘭ちゃんの行動は許せない……、それに、嘘は一言も言ってないわよ」

厳しくとも事実を言い放つ有希子に小五郎は否定せず同意の意を示した

「わあつてるよ、有希ちゃん」

「恋愛は待つだけじゃ駄目だ……惚れた相手を手に入れたいならば自ら行動を起こさなきゃなんねえ、本気で惚れたなら尚の事だ？」

「そつよ、英理ちゃんの為も、小五郎君も素直になりなさいね」

「有希ちゃん？」

予想外の言葉に、顔を真っ赤に染め上げた小五郎は遠ざかる車を見つめて、ぼつりと呟いた

「つたく、わかってらあ？」

小五郎が踵を返してビル内へと入って行った頃、車内の有希子は何時もの明るい笑みを浮かべて、悪びれもなく言い放った

「これ位の意地悪は許されるわよね」

細やかな意地悪かどうかは疑問が残る所だが、車は工藤邸へ立ち寄った後米花総合病院へと向かい、コナン達の会話を聞いて仕舞うのである

「……わあつたよ、服部？」

数秒間の睨み合いの末、平次の熱意にコナンが折れる形になり、本拠地突入に参加する事になった

「けど仕事は大丈夫なのか？」

「ああ、三日程休暇くれたんや」

「ほゝ粹な親父さんだな」

「そうね、心配で堪らないでしょう」

「そうですね」

FBIとしても危険な目には晒したくはなかったが、二人の決意

の固さに説得を諦めて本題へと入って行った

「じゃあ、二人とも覚悟は出来てるのね？」

「「ああ」」

「突入は明朝の夜明けと同時だ」

「場所は杯戸港だから、直ぐ解ると思うよ」

「「解った」」

大きく頷き気持ちを引き締めたコナンと平次は、作戦等を打ち合わせて若干の修正を加えた後に、未だに詳細が解らない研究分野へと切り込んだ

「そう言や、AHTX4869ちゅう薬の目的とか解ってへんのか？」

「バー口、AHTX4869じゃねえっつうの。 APTX4869だ、APTX4869」

「細かい所、気にするやつちゃ？」

「てめえが間違えるからだろうがよ？」

息の合った二人の会話

気配を殺して聞いていた有希子はタイミングを見計らって扉を開けると、口を開き掛けた赤井を止めた

「ああ、大体は判っている」

「一体、どんな目的があるんや？」

「それは「そこ迄にして下さる？」 赤井さん」

「工藤さん、解りました？」

扉を開けて入って来た有希子に全員の視線が集まり、有無を言わずそれ以上の発言を阻止する

「母さん!」

「眞実は自分自身の目で確かめなさい、慧」

「母さん?」

少し悲し気な眼差しを向ける有希子の姿に、コナンはそれ以上の質問は出来なかった

「……解ったよ」

「ったく、心配ばかりさせて?」

「行くのね?」

「ああ、けりを着けてえんだ」

「解ったわ、外出許可を取ってあげるから今日はもう休みなさい」

「こうと決めたら決して譲らない息子だと言っ事を良く知っている有希子は諦めて就寝を促した

「そやな、俺も本庁行かなならへんし？」

「じゃあ、我々はこれで失礼します」

「お忙しい所を有り難う御座いました」

「いえ、奴等が何か仕掛けて来たと思っただんですが無事で良かったわ」

「では失礼します」

「わざわざ有り難う、明日ね」

「ええ」

「ほな、早朝迎えに来るさかいな」

「おう」

平次達が丁寧にお辞儀をして病室を後にすると、コナンは複雑な眼差しを有希子へと向ける

「母さん……」

「明日……、全てが終わるわ」

「今は休みなさい」

「……信じて良いんだよな？」

コナンの口から思わず溢れた言葉……：……すぐる様な眼差しに、有希子は慈愛に満ちた笑みを向けた

「当たり前じゃない」

熱を持った額にコツンと自分の額をくっ付けて熱を計った有希子は母親以外の何者でもなかった

「未だ少し熱があるわね。今晚は良く寝て、明日に備えて備えて」



そう言っつて濡らしたタオルを額に乗せて丸椅子に座ると、ちよっぴり不安になっつているコナンを眠りに誘う

最後になるかもしれない優しい母の掌の温もりに安心したコナンは深い眠りに就いた

コナンが眠っつて暫く経つた頃、着替えと阿笠博士の夕食の為に一旦自宅に戻つていた哀がそつと戻つて来た

「あら哀ちゃん、ごめんなさいね」

「いえ……」

「慧ちゃん、やっと眠つたのよ」

「色々ありましたから……」

コナンの枕元へ佇み寝顔を見下ろす哀に、有希子は渡しそびれていた物を手渡した

「哀ちゃん、これを渡して置くわね」

「！！ これは戸籍謄本？」

「阿笠玲美……」

「お母様と明美さんの名前から一音ずつ頂いたの、お母様達の分迄生きて幸せになってね」

「有り難う御座います……本当に」

戸籍謄本とパスポートを受け取った哀の双眸から涙が溢れ落ちた

隠された真実(前書き)

真実へのCountdown共々、お気に入り登録有り難う御座いますm( )m

蘭ちゃんの長台詞です

## 隠された真実

有希子が帰った後……

茫然と自室に閉じ籠った蘭は、有希子が言い放った言葉に囚われていた

脳裏に有希子のあの言葉が蘇り、例え話がまるで、打ち明け話をされたかの様に響き渡る

- 仮に新ちゃんとコナンちゃんが同一人物だとしたらどうする？ -

- 新ちゃんが江戸川コナンになって蘭ちゃんの側にいて守って来たとしたら……どうする？ -

- 新ちゃんなら恋愛対象だけど、コナンちゃんなら対象外って事は蘭ちゃんの想いは子供の恋愛だったって言う事よね？ 新ちゃんが大変な事件に巻き込まれて、小さな体で精一杯蘭ちゃんを守り通して、蘭ちゃんの幸せを願って新しい恋を祝福したとしたらどうする？ -

有希子は例え話をしたのであって、打ち明け話をした訳ではない

それは蘭も良く解っていた

だが、蘭には有希子の例え話が事実にも思えてならなかった

それもその筈、有希子の例え話があまりにも現実と符合する為である

（もし……もし本当だったとしたら？ コナン君が新一だとしたら？）

（命を狙われてて正体を隠す為に小さくなっていたとしたら？）

（大人びた言動も、あの推理力・洞察力・観察眼も、服部君が会う度にコナン君を工藤と呼ぶのも……）

全ての辻褄が合う

この時の蘭の脳裏には、コナンとの思い出の数々が走馬灯の様に駆け巡っていた

事件に遭遇する度に事件現場を彷徨いて、誰もが気が付かない事

に気が付き的確なアドバイスをして来たコナン

元々コナンの正体を何度も疑って来た蘭は直ぐに訝しみ始めた

(やっぱり……コナン君は新一?)

(コナン君は何時も私を守ってくれた……、高木警部が撃たれて記憶をなくした時もホームに突き落とされた私を助けてくれたよね)

(難しい事とかいろんな事知ってて、自分が危険なのに何時も自分の事は後回しで命懸けで助けてくれて、私が泣いていたら慰めてくれたよね)

(そんなコナン君が新一みたいで格好良くて……なのに……なのにどうしてコナン君を好きにならなかったんだろう)

(ごめんね……コナン君)

ぼろぼろと溢れ出る涙を拭う事もせず、ただ泣き続け自分を責める蘭

そんな一人娘を小五郎は黙って見守り続けた

(……本当はコナンに期待したが流石に年の差が有りすぎるか?)

(ま、こればかりはしゃあねえ?)

男手一つで育て上げた蘭を手離したくない小五郎、蘭がコナンを  
選ぶ事を期待していたのだが……それは泡沫の夢だった

そんな父親の叶わぬ願いを他所に、蘭は有希子の言葉を振り返る

(でも……本当にコナン君が新一だったらどうしよう、ずっと側に  
いてくれたのに、私が待たずに裏切った事になるんだよね?)

(確かに瓜二つだけど……)

(あ、でも……確かあの時だけは新一とコナン君が同時に存在した  
んだっけ、それ以外はどちらかがいなかった)

(コナン君と新一が同時に存在した文化祭のトリックさえが判れば、  
コナン君と新一は同一人物の可能性が高くなるわね)

(思い出すのよ、あの日のコナン君の一挙手一投足を思い出さなきゃ……)

九年前の記憶を必死に掘り起こす蘭、楽しかった事も辛かった事、様々な記憶が今も尚鮮明に脳裏に浮かぶ

(あの日は退院した日で、コナン君は風邪を引いてずっとマスクをして外さなかったのよね……)

(そうそう、文化祭から帰って来て直ぐに寝ちゃってご飯食べなかったんだっけ、朝御飯も寝坊して食べなかった……)

一つずつ手懸かりを思い出して疑念を深めて行く蘭は最大の疑問に突き当たった

(あれ？ ちょっと待ってあの時のコナン君、一度もマスクを取ってない？)

小さな欠片が嵌まり、欠けていた欠片が次々と埋まり始める

(嘘……私、あの時のコナン君の顔を見ていない)



（今思えば、あの時のコナン君は普段のコナン君と様子が違ってた、絶対にマスクを外さなかったんだっけ）

（まさか……本当に……「新一？」）

頭を抱えて、懸命に思い出す蘭

「もつと手懸かりを思い出さなきゃ……、何かある筈よ……何か、新一が関わった事件にヒントがある筈よ」

沢山の事件に巻き込まれて来た蘭とコナン、数多くの事件の中でも新一絡みの事件は極僅かしかない

（一番印象に残ってるのは、文化祭の事件……そうだ、大阪に行った時にコナン君が私を庇ってさされた事件があったんだ。その時にコナン君、服部君のお守りの中の鎖で助かったんだっけ……あれ？）

（あの鎖に付いた指紋を取った事あったよね……、東奥穂村から手紙が来て服部君と一緒に行って、新一の名誉を失墜させて社会的に抹殺する為にそっくり整形して罪を犯した人がいたじゃない。あの時、犯人が新一じゃないって証明する為にあの鎖の指紋を使ったのよ）

(あの鎖に付いているのはコナン君の指紋の筈……見付けた)

(動かぬ証拠を見付けたわ)

(後は物証、指紋を照合すれば……でもどうやればいいの?)

この時の蘭の脳裏には、あの時新一が述べたあの言葉が蘇っていた

お守りの鎖に付いた、コナンの指紋を使って平次が新一の無実を証明した時に、バルコニーから入って来た新一が述べた言葉

-それは人間が生まれながらにして天より授かった終生不変の - エンブレム - 。万人不同である為犯罪捜査に於いて最も信頼度の高い証拠と成り得る痕跡：指紋なんたる -

この言葉を思い出した蘭は、直ぐ様二階の事務所に飛び込むなり、元刑事である父親を問い詰めた

「お父さん!!」

「どわ? な? 何だ?」

驚いて椅子から転けそうになる小五郎に構わず、蘭は襟元を締め上げると有無を言わず迫った

「指紋照合の仕方を教えて!!」

「は……はい? (こ……怖え?)」

蘭の気迫に圧倒された小五郎は深い溜め息を吐くと、指紋照合に必要な物を蘭に持って来させたのだった……

「何なんだ、つたく?」

「パソコンとスキャナー一式、照合したい指紋が付着している物と指紋を付着させるプラスチックの様な透明な板、後はパフの様な物を持って来い?」

「解った?」

「え〜と、ベビーパウダーと下敷きと〜」

直ぐに用意を整えている愛娘の後ろ姿を見ながら、小五郎は一際

大きな溜め息を吐いたのだった

（はあ、さっきのあれだな？）

「やれやれ？」

## 真摯な想い

あつと言つ間に小五郎の机には様々な物が集まり、蘭は食い入る様に小五郎が操作するパソコンに見嵌まった

「ったく、有希ちゃんの話は例え話だろうが？」

「だって、証拠を見付けたんだもん！！」

「証拠だと？」

怪訝な顔を向けた小五郎に蘭は大きく頷いて肯定した

「うん、コナン君が大阪で刺された事覚えてる？」

「大阪で坊主が刺されたって確か沼淵とか言う男に刺された時の、あれか？」

「うんそう、コナン君が刺されたけど服部君のお守りの中に入っていた鎖に嵌まって助かったでしょ？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「その鎖に触ったのはコナン君なのに、東奥穂村に行った時に服部君は鎖に付いた指紋を、新一の指紋として指紋照合を頼んで別人だと証明したのよ」

「ちょっと待て！！　じゃあ何か？　コナンは探偵坊主だったのか  
！！」

「うん、文化祭の時はどっちもいたけどコナン君はマスクを絶対に外さなかったもの」

「ああ、キャンプに行つて撃たれた時か」

「そうそう、あの時のコナン君はご飯も食べずに学校に行つちゃつて、普段のコナン君とは何処か違ってたし、あの時は哀ちゃんがいなかったから……」

「阿笠博士ん所のがキが身代わりになつてたつて訳か？」

「うん」

「確かにどっちも辻褃は合うが……まあ、やるだけやってみるか？」

「有り難う、お父さん!!」

「その代わり、一致したら……」

「うん、解ってる。例え許してくれなくても、ちゃんと新一に……  
コナン君に謝ってけじめを着けるよ」

「お前がそう覚悟を決めてるならしゃあねえな？」

頭をがりがり掻きながら小五郎が指紋認証ソフトを立ち上げて、  
採取した江戸川コナンと工藤新一の指紋を読み取り照合した結果は  
……

パソコンの画面上でコナンと新一の指紋が完全に一致していた

「新一……」

「マジかよ……、じゃあ一体……何でまたあんな体になったってんだ？」

「有希ちゃんが言ってた事が本当だとすると、何者かに何だかの毒を飲まされたつてののか？」

「時々戻ってたのは、その毒物の解毒剤なんか飲んでたつて事よね？」

「恐らくな？」

「東奥穂村で苦しんでいたのは、時間切れで体がコナンに戻ろうとしていたつて所だろ、その所為で探偵坊主の体を高熱と激痛と激しい動悸が全身を襲っていたんだ」

「高校生の体が小学一年生の体に縮むんだ……まさに探偵坊主は、命懸けで帰って来ていたんだ。解毒剤なんかで工藤新一に戻り、時間切れで再び江戸川コナンに縮んだんだろう」

「私が帰ってこいって言ったから……怒って泣いてばかりいたから新一は私を安心させる為だけに、命懸けで帰って来てくれたのよ」

「私の所為で新一はあんなに苦しんだよね……私が新一を苦しめてたんだ……ごめんね……新一」



ついに辿り着いた衝撃的事実に蘭も小五郎も、暫し茫然とパソコン画面を見据えていた

「まあどうりで大阪の探偵坊主が工藤って呼ぶ訳だ？」

「服部君は新一だと知ってたのよね。 どうして私には言ってくれなかったのかな……」

ぼつりと悲しそうに呟いた蘭に小五郎は溜め息を吐いて言い放った

「あのな、おめえが一番危険なんだぞ？ 言える訳がねえだろうが？」

「お父さん、でも私なら平気よ……」

「馬鹿野郎！！ あの探偵坊主が九年も掛かった相手だぞ？ 危険で生半可な相手じゃねえって事だ！！ お前の空手もプロには通用しねえんだよ……」

「あ……」

「蘭、あいつはおめえを始めとする俺達を守る為に欺き通したんだ。

その気持ちをくみ取ってやれ」

「お父さん……」

「そりゃあ、父親としてはおめえを泣かせたあいつに腹が立つさ、  
だがな、同じ男としては理解出来る」

「うん、ごめんね……新一」

小五郎に一喝された蘭は肩を震わせて啜り泣き始め、新一を待て  
なかった自分を責め続けたのだった

「ごめんね……新一」

「今日はもう面会時間を過ぎてるな、気持ちが落ち着いてから見舞  
いに行くか？」

「うん……」

ソファーに力なく座り頂垂れる蘭の隣に腰を下ろした小五郎は、  
謝罪の言葉を口にしながら啜り泣く蘭を何時迄も宥めていた

同時刻

米花総合病院を後にした平次は一際大きな溜め息を吐くと、先程病室での出来事を振り返っていた

（地位も名誉も名声もダチも惚れた女も体も名前も家も親も……あいつは命以外の全てを失うて、俺やガキ共と出会って、楽しいやなんて……）

（あいつはどんだけ孤独な十七年を送って来たんや……その上……実の親が全ての元凶やなんて……あまりにも残酷過ぎるで……）

（この上何があるって言うんや？）

（もつええやないか……な、工藤）

（お前はようやったやないか）

（これ以上、何をせならんや）

（どんだけ傷付けばええんや）

(……俺はお前に何も出来へん)

(ただ……こうして話を聞いてやる位しか出来へん……堪忍な……  
工藤)

(俺で良かったら幾らでも聞いたるよって……堪忍な)

夕闇に包まれ様としている冬の空を見上げる真実を映す双眸

夕陽に照らされて静かに煌めいていた

「なあ工藤、お前がちっこうなって……俺が嬉しいと言ったら怒るか？」

「お前がちっこうなったさかい、俺等は出会ったんやで？ けどな工藤、出来る事ならもう一度だけお前と肩を並べて推理したい」

「もう何れ位しとらんのやろな、解毒剤がもう効かんで言うったさかい、もう無理なんやろな」

寂しそうに呟いた平次の願い

コナンには決して言えないであろう切なる願いを、米花総合病院へ戻って来た所で偶然にも聞いて仕舞っていた哀は涙を溢した

(私ってば、貴方達のキューピット役になったのね)

(比類なき、東西の名探偵の出会いに……)

相棒から……

「じゃあ玲美ちゃん、外出頼んで来るから新ちゃんを宜しくね」

「はい、有希子さん」

扉の隙間から手を振る有希子に対し、照れ臭そうに笑顔を向ける  
哀事玲美は小さく会釈して見送った

静かな病室にコナンの寝息だけが響く中、哀は先程偶然目撃した  
平次の姿を思い出していた

「どっしたら良いのかしらね……工藤君」

ぼつりと呟き、小さな溜め息を吐く哀

所詮は推理馬鹿と一蹴するにはあまりにも切なすぎる願いだっ

「服部君の願いを叶えてあげたいけど……、私達が元の体に戻るに  
はあまりにも時間が経ちすぎたわ。二つの解毒剤と特定免疫消去  
剤は漸く完成し、後は決断するのみ……」

「ねえ工藤君、どうしたらいいの？」

膝の上で拳をきつく握り今にも泣き出しそうに俯くえる哀の頬に、  
コナンの手の温もりが包み込んだ

「え……」「バーク、何泣いてんだよ」

一体何時から起きていたのか、心配そうな眼差しを向けるコナン  
は、そっと哀の目尻に光る滴を拭う

「な？泣いてないわよ？」

素直になれず慌てて否定する哀

「……俺の前で迄無理すんな」

ゆっくりと起き上がったコナンが哀の頭をくしゃりと撫でると、  
哀の双眸から堪えていた滴が溢れ落ちた

「私……どうしたらいいの？」

他人の前では強がって滅多に泣かない哀が思わず涙を溢した為、  
コナンは一緒に帰った筈の元太達と何事かあったのではと判断した

「灰原……」

「あいつ等に何か言われたのか？」

優しく心配そうに哀の顔を覗き込むコナン

哀は少々誤解しているコナンに涙を拭きながら柔らかく否定した

「そんなんじゃないわ」

「じゃあ、どうしたってんだよ？」

元太達と喧嘩した訳ではないと判り、一先ずほっとしたコナン、  
益々首を傾げて哀を問い掛けた

数秒の沈黙後、哀は口を開く



「……さつき病院の前で服部君の姿を見掛けたんだけど……」

「服部……？」

この瞬間、コナンは思わず平次に敵意を剥き出しにしたが、哀が見掛けたと告げた為、取り敢えず冷静さを取り戻し哀の話を書く事にした

(見掛けたってんなら話しちゃいねえか……だが、場合によっちゃただじゃおかねえぞ……服部)

嫉妬心を丸出しにしたコナンに哀は思わず笑みを溢す

(少しは好かれてると自惚れて良いのかしら？ 探偵さん)

「ああ、入れ違いに帰ったからな……未だいたのか？」

まるで哀に近付くなと言わんばかりのコナンに嬉しさを感じつつ少々呆れもした哀は、夕陽に照らし出されて見えた光景をぽつりと呟いた

「泣いていたみたい……」

「え……?」

思いも寄らぬ哀の言葉

コナンは我が耳を疑った

「……服部が泣いてたっつてのか?」

「ええ……、夕陽に照らし出されて目尻が煌めいていたから……」

「……そうか（済まねえ……服部）」

平次が泣いた理由は自分にあると悟ったコナンはシーツをきつく握り締めた

「……何故彼が泣いていたのかは解らない……、でもその後呟いた言葉があまりにも切なくて……、貴方が小さくなって会えて嬉しいって……出来る事なら……」

「もう一度、貴方と肩を並べて推理したいって……」

「！！（服部……）」

「もう二度と無理だろうって……あんな切なそうな顔で呟いてるのを聞いて……あまりにも切なくて……でも私達が元の体に戻るにはあまりにも時が経ちすぎて……」

「貴方が何れだけあの子達を大切に思っているか、一緒に楽しんでいると言う事も知ってるわ……、私が新たに研究して来た免疫消去剤に戸惑っている事も……」

「ねえ……工藤君、どうしたらいいの？ この薬……渡していいの……それとも渡さない方がいいのかしら？」

平次の切ない願い……

哀の戸惑い……

どちらの想いも痛い程良く解るコナンは静かに目を閉じた

（服部……、俺だってそうさ）

数秒間、思考の海へ潜り心を落ち着かせたコナンは、自分の気持ちを確認すると徐に口を開いた

「そりゃ〜あいつ等は大切だぜ、それは間違いねえ……だがな灰原、俺にとつて最も失いたくない、傷付けたくないダチは服部平次だ」

「そして……おめえなんだよ」

「……工藤君」

果たして自分は何者なのか？

これからどうすれば良いのか？

脱け出せない複雑に入りこんだ迷宮に迷い込んでいたコナンは、漸く迷いを吹っ切る事が出来たのだった

「……それに父さんと母さんも、口にこそ出さないが、一人息子の俺が工藤新一に戻る事を願っている」

「実の親の願いを無下に出来る程、俺は親不孝じゃねえよ」

たった一つの真実を映す双眸に輝きが戻っている事に気付いた哀

少し目を見開いて驚くと同時に工藤新一に戻る事にほっとしていた

「……後悔しないの？」

「寂しくないと言ったら嘘になる。だが、元太達なら解ってくれる」

「……そうね、あの子達ってば、何時の間にか大きくなったわね」

「ああ、もう中三だぜ？」

「ほんと早いわね？」

微笑み合い小さな友人達に想いを馳せた

「じゃあ、何時飲むの？」

「出来たのか!!」

待ちに待ったAPT X 4 8 6 9の解毒剤と特定免疫消去剤の完成を受けて、身を乗り出して哀に詰め寄ると哀はピルケースを取り出した

「ええ、待たせてごめんなさいね」

「APT X 4 8 6 9の解毒剤と、度重なるAPT X 4 8 6 9の解毒剤の試作品の服用によって、抗体が出来て仕舞った貴方の体の特定の免疫を消去する特定免疫消去剤」

「漸く完成したわ」

「Thank You……灰原」

この瞬間、感極まったコナンは思わず哀を抱き締めていた

「ちよっ？工藤君？」

勿論、顔が真っ赤になった哀は驚いてコナンを背中を叩いて離す様に促すもの……

「ありがとな……ほんと」

コナンの震える声に叩いていた手が止まった

「……工藤君、私は……」

「おめえがA P T X 4 8 6 9を開発していなければ俺は九年前に死んでいた……、服部と言う親友に出会えて元太達と同じ時間を過ごせたのはおめえのお陰だ」

「貴重な時間をありがとな……」

「違う……私は……」

涙を溜めて否定する哀を漸く離れたコナンは真っ直ぐに見据えて言葉を紡いだ

「確かに、おめえが作ったA P T X 4 8 6 9の所為で大勢の人々が亡くなった事は動かぬ事実だ。だがな灰原、どんな物も使用者がいなければ危険な物とは認識されず闇へと葬られる運命だ。罪は開発者の意思を無視して毒薬として投与したジンにある」

開発者に罪はないと言うの言葉に反論しようとした哀だったが、コナンは射る様な眼差しで制して更に言葉を紡いでいった

「ましてや当時、義務教育期間の未成年の初犯は執行猶予が精々、それならば難病に苦しむ人達を救う為の薬剤を開発する方が、よっぽど償いになるんじゃないか？」

「工藤君……」

法の下でしか罪を償えない……、そう思っていた哀は、コナンの言葉にやるべき使命を見出だした

（確かに、無駄に服役するよりは多くの命を救う薬を開発する方が罪の償いになるんじゃないかしら……）

哀の眼差しが変わった事に気が付いたコナンは、決してゼロではない危険な可能性を告げる

「もし仮におめえが警察へ出頭し法の下に服役し罪を償った時に、残党がAPT X 4869を悪用したらどうすんだ？」

「あ……」



コナンが告げた、十二分に起こりうる可能性に哀は俯いていた顔を上げた

「投与された人達を救えるのは、開発責任者であるおめえだけだ。永久に封印出来るのもおめえだけなんだよ、灰原」

「それにダイナマイトが良い例だろ？ おめえが幸せになる事が、一番の償いになるんだよ」

コナンの懸命な説得に哀は堪えきれず一滴の涙を溢して尋ねた

「……良いの？ 幸せになっても」

「バー口、当たり前えの事言うなっつうの？」

「おめえが幸せになんねえと俺も幸せになれねえんだよ？」

顔を真っ赤にして告げるコナン

「気障なんだから……」

自分の胸の中で、啜り泣く哀を優しく抱き締めたコナンは……、  
その一言を告げた

「……好きだ」

「私も……好きよ」

重なった二人を見ていたのは、赤く染め上げている夕陽だけだった

埋もれた記憶（前書き）

「真実へのCountdown」 「虚像の追跡者 - Pursuer  
-」 共々

お気に入り登録&沢山のアクセス本当に有り難う御座いますm（  
ー）m

今回はちょっと短めです

## 埋もれた記憶

翌日未明

未だ寝静まる、物音一つしない米花総合病院を後にしたコナンは、平次が運転する車に乗り込むと待っていた哀と共に決戦の地へ向かった

「やっぱり行くのか？」

「ええ、けりを着けたいの……」

哀の決意に満ちた眼差し

深い溜め息を吐いたコナンは、心配そうに哀に告げた

「出来る事なら連れて行きたくねえけど、しゃあねえな。俺の側を離れんじゃねえぞ」

「ええ、解ってるわ」

コナンの言葉に笑顔で頷く哀

哀の笑顔に顔を真っ赤に染め上げると照れ臭そうに横を向いた

「わ？解つてりゃいいんだよ？」

車が米花町を離れ決戦の地へと近づくに連れて、次第に二人から笑顔が消えコナンは小さく震える哀の手をきつく握り締めていた

普段は多弁な平次も一言も喋る事なく運転に集中し車内は沈黙に包まれた儘、彼の地に到着した

「ここが本拠地やで……」

誘導に従い、目立たない場所に車を停めた平次の眼前には暗闇に佇む本拠地があった

「……」

本拠地に到着するなり、驚いて目を見開くコナン

その様子に哀と平次は怪訝な顔で覗き込んだ

「どうしたの、工藤君」

「なんや、この場所に見覚えあるんか？」

何かを思い出す様に頭を掻きむしるコナンは、明らかに尋常ではない

「……解らねえ、解らねえけど」

「工藤君……貴方、ここに来た事あるんじゃないの？」

「なんやて……！」

哀の推測に目を見開くコナンはぼつりと呟いた

「……かもしねえ、解らねえ」

「どのみち、何かあるっちゅう訳やな？」

「その様ね？」

三人で見上げる本拠地

コナンの脳裏には言い知れない漆黒の闇と不安が渦巻いていた

(何かある……、何かを忘れてる)

(大切な事を、俺は忘れてんじゃねえか?)

懸命に記憶を掘り起こそうとするコナンだが、深く埋もれた記憶は簡単に目覚め様とはせず、ただ頭痛がするだけだった

「コナン君哀ちゃん服部君」

「ジヨディ先生」

「よー、FBIの姉ちゃん」

コナンが頭を押さえている所に、誘導した捜査官から聞いたのか

「ジヨデイが駆け寄って来て、頭を押さえているコナンを怪訝な表情で見つめた」

「あら……、コナン君どうかしたの？」

「いやな、どうも坊主がここ知つとる様なんや」

「なんですってー!!」

「……多分、物心つく前に来た事があるのかも……」

「無理に思い出さない方がいいわ、工藤君」

「せやな、中に入ったら思い出すやる」

「そうだな」

一旦、思い出すのを止めたコナンにジヨデイの怪訝な眼差しが向けられ、コナンは首を傾げた

「ジヨデイ先生？」



「……工藤ってどう言う事？ 昨日も有希子さんをお母さんって呼んでいたわよね？」

「ああ、言っただけだったわけ？ ついこの間、俺工藤夫妻の養子になったんだよ」

ジョディの言葉で、養子話を話していなかった事に気付いたコナンは思い出した様に事情を説明した

「そうだったの？」

「新しい名前も付けてくれてね、今の俺の名前は慧一・コナン・工藤でアメリカ国籍なんだ」

「えー！ コナン君、アメリカ国籍なの？」

「うん、ロサンゼルス生まれだよ」

コナンが新しい名前を告げて、円く収まるかと思われたが……

「それでコナンと言う名前なんだね」

「キャメルさん」

「どつりで日本人にしては変な名前だと思っただわ？」

（ははは……変な名前で悪かったな？）

率直なジヨディの言葉にコナンは苦笑するしかなく、平次と哀は笑い転げていた

「くくくく？」

「笑っなっつもの？」

「堪忍や？」

「あら、事実でしょ？」

「ふん……、放っつけ」

突入前にすっかり和んで仕舞ったコナン達は、東の間の穏やかな  
一時を過ごしていた……

## 決戦（前書き）

お気に入り登録が増えてて吃驚！！本当に有り難う御座いますm（  
——）m

本拠地突入ですが、前作と違ってコナン達の内面を書ければな〜と思っております？

## 決戦

張り詰めた緊張感

各々が決死の覚悟で挑もうとしていた

その鋭い眼差しは漆黒の巣窟へ向けられ

静かに暁を待つ

愛しい人々に別れを告げて

数十年に及ぶ禍根を断つべく

決戦の火蓋が今

切って落とされた

「「突入！！」」

冬の夜明けと共に捜査官達は、一斉に本拠地内へと突入して行った  
直ぐ様凄まじい銃撃戦が勃発し夥しい数の銃弾が飛び交い

無数に配置されたコンテナは、本拠地の盾から捜査官の盾となり  
銃弾を弾き飛ばす

これ迄、適材適所に配置されて本拠地を隠して来たコンテナは、  
絶好の狙撃地点となっていた

上空には無数のヘリが飛び交い地上で死闘を繰り広げる捜査官達の  
援護をし、満を持して決戦に挑んだFBIと日本警察サイドだっ  
たが、負傷者が始めている……

「ウワッ!!」

一人の捜査官が肩を撃ち抜かれ後方へ倒れ込んだ

「リチャード!!」

仲間の捜査官が応戦しながらも銃弾に倒れた仲間へと声を掛ける

「く……、大丈夫だ。大した事はない」

左肩を押さえた捜査官はその場で素早く応急処置を施し戦線に復帰した

「大丈夫か？」

「無理はするなよ」

「そうそう、お前は新婚だしな」

「ミレーヌが泣くぞ？」

先輩捜査官達が口々に若い捜査官を気遣い、自ら前面に立った

「（先輩……）何、こんな掠り傷ですから大丈夫ですよ」

先輩捜査官達の温かい気遣いに力を得た若い捜査官は再び銃口を向けた

果てしなく続くかと思われた、本拠地前の戦闘は負傷者を出しながらも警視庁のヘリの援護もありFBIと日本警察の勝利に終わった

屋上のスナイパーはライフルを弾き飛ばされ拳銃で自決を計り、本拠地内外で応戦していたメンバーも皆、全員自決した

「ボス、本拠地外周と地上施設にメンバーの姿はありません」

「全員、自決してます」

「よし、捜査は後回しにして地下施設の武装解除に向かうんだ」

「了解!!」

屋上と地上の武装解除に成功し本拠地地下施設へと向かう捜査官達の最後尾の班には、コナンと哀平次の姿があった

「工藤、お前銃は使えるんか？」

ふと思い出した様に問い掛ける平次にコナンは呆れた表情で睨み返す



「おめえな……、今更何を言っただよ」

「済まん済まん、見た事あらへんさかいな」

「ああ、おめえとは銃を撃つ事はなかったな」

普段と変わらない笑顔の平次にコナンは不敵な笑みを返した

「あら、自信ありそうね。名探偵さん」

「なんやと？」

哀の言葉に反応した平次は面白くなさそうな表情でコナンを見返すが、コナンは平次に構わす奥へと進んで行った

「貴方達ったら緊張感の欠片もないわね？」

「そう？ これでも結構緊張してるんだけどね」

「何処が……」

完璧なポーカーフエイスを貼り付けるコナンに、哀を除く全員が同じ言葉を発していた

暫く何事もなく侵入していると前方から数名のメンバーが発砲して来た

「いたぞ、FBIだ!!!」

メンバー達は数発発砲し、FBI側も直ぐに応戦体勢を整えたが、コナンが一瞬早く発砲した

ドンドンドン!!!

「グワツ」「ウワツ」「グツ」

コナンが放った弾丸は、的確にメンバーの銃を後方へ弾き飛ばし、事態は呆気なく収束した

無駄に発砲した弾等一切なく、予想外のコナンの射撃の腕前に、平次は愚かジョディすら啞然と立ち竦した

シンと静まり返った地下通路、全員の見線がコナンへ注がれる中  
哀は面白そうに口を開く

「はい、お上手お上手」

パチパチと拍手する哀は嬉しそうに笑顔を浮かべていた

(この腕前なら簡単には殺られないわよね、工藤君)

「おめえな？」

「あら、誉めてるんじゃない」

「へーへー？」

普段と変わらないコナン

誰も気付いていない様だったが、平次だけはコナンが哀に全神経を集中している事に気付いていた

(ほんまべた惚れやな?)

……だが、コナンの射撃の腕前が予想外に高いレベルだった為か、平次が少々面白くないのは言う迄もない

「お前、一体何処で覚えたんや!!」

「ああ、ハワイで親父に教わったんだ」

(ブルジョアめ……)

「あんだよ?」

「放つとけや……」

(ふん、西の探偵さんはどうやら下手なのね)

不貞腐れた平次にコナンと哀が思わず苦笑していると、ジヨディや他の捜査官達の声が飛んで来た

「ちょっとコナン君、凄いじゃない」

「そう？ 普通でしょ？」

「いや、中々の腕前だったよ」

「FBIに来ないかい？」

「歓迎するぜ、名探偵」

「有り難う御座います、検討しますね」

以前なら、僕は探偵ですくと断るコナンが前向きに返事を返した為、哀は意外そうな視線を向けた

「あら、探偵になるんじゃないの？」

「何れはな、二度と同じ鉄を踏まない為に回り道するのも良いかと思っただけさ」

「そうね、それも良いわね」

「その時は哀ちゃんもいらっしやい、コナン君といられるわよ。」

「ジョディ先生？」

ジョディのからかいに顔を真っ赤に染め上げたコナンと哀の姿に、平次が笑い転げたのは言う迄もない

「そらええわ？」

「うっせえ？」

真っ赤な顔で平次をどつき捲るコナン、何時迄もじゃれあう二人を顔馴染みのジョディが促した

「ほら行くわよ、コナン君服部君」

「あ、うん？」

「ほな行こか」

準備が整い再び侵入を開始したジヨディ達に追い付くと、平次は然り気無くコナンと哀の前を歩き盾になった

(……服部、おめえって奴は)

進んで盾となる平次を辛そうに見つめるコナンを振り返った平次は、何時もの笑顔できっぱりと言いつつ放った

「俺は民間人を守る立場にある人間や、例え俺が死んでもお前の所為やあらへん、これが俺の仕事や」

「バー口……、てめえは探偵だろ」

親友の想いが痛い程解るコナン

不敵に笑う平次の隣を哀と共に歩き出した

## 二人のあの方

一方

本拠地最深部に位置するとある一室では、あの方の指示により、通信衛星を電波ジャックしていた

「ゾンビ共の様子はどうだい？」

「全て暴露されて大混乱してます」

大画面のテレビに映し出される悍ましい実態の数々

今映し出されているのは、歴代内閣総理大臣の顔写真と違法臓器場移植の実態だった

「……権力に固執した挙げ句に、その権力を振るう健康な体を手に入れる為、何の罪もない若者達の臓器を丸ごと移植し殺害して来た者の末路は無様なモノだな」

実に今年で齡九十歳を越える、この政治家は政財界の闇に暗躍し権力を望む儘にして来た男だった



闘病と偽り、数年置きに行われる臓器の移植交換手術で不運にも犠牲となつた若者は二桁に上る

悍ましい実態を睨み返す男の、普段浮かべている気品漂つ笑みは成りを潜め鋭い眼光を放っている

（我が子を殺された真実を知つた遺族に八つ裂きにされるがいい……）

（次々と暴露される悪事の数々、おまけで曝された贈収賄が可愛く見えるから不思議なものだ……。それだけ多くの若者の臓器を喰らうて来たと言う事か）

（数十年の時を掛けて漸くこの日を迎える事が出来たが、払われた犠牲はあまりにも大きかった……）

画面を見据えた儘顧みていると、想定内の報告が為されて来た

「ブルームーン様、衛生電波ジャックの解除の動きが出始めました」

「そうか……、擦じ伏せておくれ」

「ここは任せたよ、マラスキーノ。私は狂犬共の始末に取り掛からねばならない」

「畏まりました」

あの方の命令を遂行するべく、優雅な笑顔と気品を漂わせた儘、男は部屋を後にした

微かに聞こえる銃声を耳にしながら男は、自分が日常的にいた、一際重厚な扉を開けた

「」「どいぞ」

軽くノックをして入室すると、そこには本来の主がいた

「今のは少々威厳が足りないんじゃないかい？」

「君だったからね、状況は？」

「衛星は順調だ」

「その様だな……大騒ぎだ」

机にあるパソコンには、混乱を極める政財界光景が映し出され、  
あの方は行く末を見据えていた

「漸くここ迄……」

「ああ……、後はあの娘だけだ」

歯を食い縛り拳を握って怒りを露にしながら何も無い壁を見つめた  
滅多に感情を露にしないあの方を見て、ブルームーンは痛ましげ  
な眼差しを向けた

(……君達は良く堪えているよ、普通ならば怒り狂って対象となる  
人間を嬲り殺しにしている所だ)

まるで我が事のように心を痛めるブルームーンに気付いたあの方は、  
一番の理解者へ悲し気な笑みを向けた

(君の満面の笑みは何時見られるのだろうか……、そして私も……)

あの方につられる様に悲し気な微笑みを浮かべたブルームーンは、  
唯一の救いである一人の研究者の名前を告げた

「……シェリーは知っているのか？」

「いや……、未だ知らせていない。マッドサイエンティストの父親  
の所為で犠牲になっている者がいるとは、あまりにも残酷過ぎる」

温かさを知らずに育った傷付き易い若い研究者 - シェリー -

あまりにも不運な生い立ち故に、マッドサイエンティストの娘と  
憎む事は出来なかった

「そうだな……、だが助けられるのはもうシェリーだけだぞ？」

「それは解っている、解ってはいるが少々気掛かりな事があってな  
？」

「何かあるのか？」

沈黙の後に小さな溜め息を吐いて机に肘を頂垂れるあの方の姿を怪訝に思ったブルームーンは、訝しみながらも手懸かりを求めて問い掛ける

「私に出来る事なら手伝うよ?」

「有り難う……」

闇に身を置く同胞の温かい気遣いに思わず笑みを溢したあの方は、数秒間目を閉じて思案した後、これ迄固く閉ざしていた口を開いた

「……新一が記憶をなくしていた」

「記憶を?」

鋭い眼差しで肯定し、隠された真実と謎に包まれた儘になっている疑問を明らかにした

「何があったのかは解らないが、あれ以降、新一は銀髪の人物に対して猜疑心と敵意を持つ様になったんだ」

「姿が見えなくなった新一達を捜し当てて私が駆け付けた時、新一

は茫然と立ち竦み正気を失っていた」

「な！！ 正気をなくした？」

あの新一が正気をなくしていたと知り驚きを隠せないブルームーン

あの方は更に言葉を紡いだ

「ああ……」

「私の目に飛び込んで来たのは、ベッドに横たえられて眠り続けるあの娘の姿と、その傍らで茫然と立ち竦む変わり果てた新一の姿。使用されたと思われる実験器具は、パソコンの前に置かれた一通の手紙と一枚のフロッピーディスクと共にその儘の状態で保存されていた。」

「私は、事情を聞く為に実験を行ったと思われる宮野夫妻を捜して奥の部屋に足を踏み入れたが、そこには自殺した宮野夫妻の姿があった」

怒りと後悔に表情を歪ませながら打ち明けるあの方の言葉に、ブルームーンの脳裏にはまるで見て来たかの様に凄惨な光景が鮮明に描き出された……

「私が目を離したばかりに……」

「あの娘は……眠り続けている」

頭を掻きむしり自分を責める姿

あの方には研究させている内容が人道に外れている事も良く解っていた

だがそれでも止める事は出来なかった……愛する娘の為に諦める事は出来なかった

「その手紙には何を書いてあったんだ？」

「……あの娘を実験体にした事と新一の心を深く傷付けて仕舞った事への謝罪、行われた実験の経緯が事細かに記されていた」

「遺されたフロッピーディスクと手紙を元に研究させているが、一向に進展がない……」

「……それがAPTX4869と言っ訳か」

「そうだ、- APTX4869 - はあの娘を目覚めさせる為に必要な薬剤なんだ」

「妹を守れなかった新一は自分を賣めて記憶をなくして仕舞ったが、この儘で終わる子じゃない」

「あの部屋で一体何が行われたのか？」

「その真相を知るのは、新一と……恐らく元凶であるあの男だけだ」

殺気の籠った鋭い眼光を放つ、二人のあの方

工藤優作と黒羽盗一

静かにその時を待っていた



背水の - G i n -

「ジン!!」

「兄貴、キャンティの奴が走って来やすぜ」

「ああ……」

本拠地の最深部最奥へと通じる通路で待ち構えるジンと相棒のウオツカは、キャンティのけたたましい声を怪訝に思いながら視線を向けた

「大変だよ、ジン!!」

「どうしたんだ、キャンティ」

無言の儘キャンティを睨む兄貴分のジンに代わって、ウオツカが  
問い掛けた

「どうもごうもないよ、ウオツカ!!」

「スコッチやらジュネバ・ウェルシュ達が軒並み殺られたよ!！」

「何だと、本当か!! キャンティ!!！」

ウォッカが反射的に確認を取るとキャンティは直ぐ様肯定して返す

「ああ、本当さ!！」

殺気の籠った眼光を放ちながら、FBIと日本警察が突入して来たとは言え、手練れ達が簡単に殺害された事を訝しんだ

(FBIじゃねえな……、奴等なら俺等を捕まえようとする筈だ)

「ふん……、大方どさくさに紛れて馬鹿共が殺ったんだろうが……」

「どっしやす、兄貴」

「この儘じゃあたい達も殺られちまうよ、ジン」

メンバーの暗殺と言う嘗てない事態に動揺するキャンティを一瞥する事なく、ジンは煙草を投げ捨てて言い放った

「……あの女はどうしている」

「コードネームを持つ奴等を軒並み暗殺するなんぞ、下っ派の奴等に出来る芸当じゃねえ」

「ベルモット位の奴じゃなきゃ出来ねえ芸当だ」

この瞬間、ウォッカとキャンティが顔を見合わせて確認を取り合  
うと、この数日間、誰もベルモットの姿を見ていなかった

「あたいは見てないよ」

「俺もだ、この数日見かけねえ」

「……ふん、秘密主義の女だ。大方勝手に動いてるんだろっよ」

あの方の真相を知らない為か、はたまた盗一を信じているのか

あの方の命令だとは夢にも思わず、メンバーの暗殺をベルモットの裏切りだと判断したジンに対して、ウォッカは唯一あの方に疑惑

を抱いた

いやただ不安に思ったただけだろうが、ウオツカは浮かんだ疑問を  
投げ掛ける

「ですが兄貴、まさかあの方の命令だなんて事は……」

「何、馬鹿な事を言ってんだい。何であの方があたい達を殺すんだ  
い、ウオツカ」

「キャンティの言う通り、それだけは有り得ねえ。仮にあの方が俺  
達を殺せば、あの方は間違いなくFBIに逮捕されるだろうからな」

「そつだよ、ウオツカ」

「それもそつですね」

ウオツカが同意の意見を出した事で、真相に通じる道筋を自ら断  
ち切ったジンは己の浅はかさを呪う事になる……

(この暗殺があの方のご命令？ それだけは絶対に有り得ねえ……  
絶対にな)

「今はベルモットの始末は後回しだ、FBIをぶち殺すぞ」

「へい兄貴」

「あいよ!」

持ち場に駆け戻るキャンティの背中を見送りながら、ウォツカは先程浮かんだ疑問をどうしても消す事は出来なかった

(本当にベルモットの姉御の独断か？ もしあの方のご命令だとしたら俺達は……)

ウォツカの不安を他所に刻々と迫るFBI

最深部へ到達しようとしているFBIとの決戦の時は目の前に迫っていた

一方のベルモットは繰り広げられている銃撃戦を利用し、本拠地内にいる狂犬達を始末していた

「ドン！！」

飛び交う銃声の中の一発の銃声

FBI捜査官に変装して潜入しているベルモットは、微塵も悟らせずターゲットを仕留めていた

（シルバーブレットが別班で良かったわ……、でなければ変装は一発でばれていたわね）

（それにしてもボスは一体どう言うつもりで……、まるで組織を壊滅させようとしているとしか思えない。相変わらず考えが読めないわね…… 黒羽様は）

銃弾を放ちながら、巧みに戦線を離脱したベルモットは次のターゲットの元へ向かった

人気のない場所迄来ると、メールを作成し任務進捗状況を盗一へと送信した

（これで残るはジンを始めとする面々だけ……、シルバーブレットの為に任務を成功させなければね）

(例え……死ぬ事になっても)

携帯をポケットに仕舞ったベルモットは最奥のエリアへと向かって行くが、ある人物と遭遇する事になる

不意にメールの着信音が鳴り響き盗一は報告に目を通す

「……順調の様だよ」

「そうか、では最終段階に入ろう」

「OK……Boss」

組織閥の男爵の最高幹部として動き始めた盗一を悲し気な表情で見送る優作を支えているのは……

隠し扉から出て来た愛妻有希子だった

「優作……、後少しの辛抱よ」

「ああ、有希子」

「果たして新一が耐えられるか……」

革張りの椅子に座って俯く優作の背中側から、有希子は優しく抱き締めた

「大丈夫よ、新ちゃんは私達の息子だもの」

「ああ、だがこの儘何も知らせずとも思っ止まないのも事実だ」

「そうね……、でもそれは本当の幸せではないと思うわよ？」

「有希子」

「あの時の新ちゃんは幼すぎたけれど、今は違うわ」

終始明るい笑顔を向ける有希子

我が子を想い思案に暮れる優作の背中をそっと押した



「君には敵わないな？」

「ふふふ、母親ですもの」

「でも我が子を守る為なら何でもするわ」

一転して冷酷とも言える無表情の微笑みを湛えた有希子と同様に優作からも悠然とした笑みが消えた

「そうだな、だが新一は喜ばない。事と次第に依っては許してくれないだろうな……」

「新ちゃんは真っ直ぐな子だもの、幾らあの男が憎くても新ちゃんにだけは絶対に嫌われたくないもん」

殺気だった表情から一転して、自由奔放で明るい笑みを浮かべて有希子は優作をからかい始めた

「それは俺だってそうさ？」

「ん〜、でも優作は微妙じゃない？」

「有希子？」

世界屈指の推理小説家工藤優作も最愛の妻子の前では夫であり、  
一人の父親でしかない

どんなに豊富な知識と優れた推理力・洞察力に長けていたとしても、我が子を傷付けられれば怒りもするし憎みもする、何処にでもいるただの人間だ

それと同時に一度敵に回せば、世界中何処にいても逃げ場はない

各国の警察や情報機関・出版業界等幅広い人脈を持つ工藤優作は、  
それ等を最大限に活用し着実に全メンバーを網の中へと追い詰めて  
いた……

## 自責（前書き）

「真実へのCountdown」「虚像の追跡者 - Pursuer  
-」共々お気に入り登録本当に有り難う御座いますm（）（）m

更には「虚像の追跡者 - Pursuer -」が500000アクセス  
突破しました！！

重々有り難う御座いましたm（）（）m

昨夜は更新出来なくて済みません。ちょっと体調悪くてどうしても  
書けませんでした……のでこの時間に更新します

楽しみにして下さいた皆様済みませんm（）（）m

## 自責

夜明けと共に日本政財界に巣くう闇が白日の下に晒され、日本中は疎か世界中が一斉に報じ始めた

我が子を犠牲にされたと知った父母達は慟哭し怒りを爆発させ、その矛先は当然の事ながら警視庁へも向いたが、長年の極秘捜査を知ると然程追及はされなかった

この暴露劇の裏側で白馬警視總監が満を持して逮捕に踏み切り、日本の政治家達による殺人と言っ前代未聞の解散総選挙が実施され、日本政府は国民の厳しい追及を余儀なくされた

この騒動の発端である本拠地は銃撃戦が繰り広げられている為、世界中から数多くのマスメディアが押し寄せ、違法臓器移植殺人事件と同時にトップニュースで報じられた

警視庁の包囲網は徐々に狭まり負傷者と大勢の遺体が運び出されて騒然と化す本拠地を世界規模の犯罪組織の摘発かと憶測を呼んだものの、詳細は明らかにされなかった

本拠地突入作戦も佳境に入った頃合いを見計らい、優作は一通のメールを全メンバー宛に送信した

「最早組織はこれ迄、全員投降せよ」

数多くの犯罪を犯したとは言え迷う事なく自決して行くメンバー達

優作は見るに見兼ねて投降命令を出した

一人でも多くの命を救う為に……

「これで何れ位の命が助かるか……国家犯罪を暴く為に生まれた組織閻の男爵がGinの加入に依って大きく道を踏み外して仕舞った」

机に肘を付き頂垂れて深い溜め息を吐いて己の不甲斐なさを責め続ける優作

有希子はただ寄り添っていた

「……優作」

有希子は革張りの椅子の手置きに軽く腰掛け、優作を包み込む様に抱き締めると額にそっと口付けを贈り意気阻喪する夫を支えた

何時も明るく振る舞い黙って付いて来てくれる愛妻の気遣いに、優作もまた唇に口付けを贈った

「少しでも命を救う為に、これ迄慎重に慎重を重ねて来はしたが、暴走した組織は最早止められなかった」

「組織を守る為ならば、家族諸共皆殺しにした上に自宅を爆破して徹底した証拠隠滅を図った」

「ジンは偶然取引現場に居合わせた何の罪もない人々を悉く殺害し、その上組織を裏切ろうとした者は例え誰であろうと殺害して来た。その為、組織の犯罪を立証する証拠品は何もないと来ている？」

「今は亡き初代のボス大黒蓮太郎の命令を忠実に実行し蘇生させる為、多額の資金と研究者を集め、私の意向を無視し組織の為と言う大義名分を掲げて離反者を無断で殺害したジンは危険過ぎる」

「そうね、下手をすれば暴走して日本中に爆弾を仕掛けかねないわ」

「ああ、それだけは阻止せねば。例え犯罪者に成り果てたとしてもな……」

「優作……」

生半可な決意では出来ない使命に身を投じた優作

二十年以上に及ぶ長きに渡り、初志貫徹するべく心を砕いて来た

一度犯罪者として身柄を拘束されれば全てを失うだろう

最悪の場合我が子を失う羽目になるのは言う迄もなく、最悪の結末を迎える事になったとしても、優作は見過ごす事が出来なかった

「大黒さんって人を生き返らせ様としてるんでしょ？」

「ああ……、大黒さんは最初こそ正義感に溢れていたが、癌を患い次第に死ぬ事が怖くなって行くと、不老不死と言う幻想を抱く様になった……それが全ての発端だ」

「先ずクローンで健康な体を再生し、APTX4869で成人体迄急成長させて記憶をプログラミングして脳内へと埋め込む……」

「夢物語に過ぎなかったこの研究がコンピュータの普及とシエリー

の存在により大きく前進して仕舞った。A P T X 4 8 6 9 を完成させて、解毒剤を作成しなければ、あの娘は……」

「優作……」

頭を掻きむしり自分を責め続け激しく慟哭する優作を、有希子は何故……と責める事は出来なかった

でも愛娘を助けたい有希子は、ある一つの可能性を思い付き言葉に表した

「ねえ、優作」

「ん？」

有希子の問い掛けに頭を上げた優作は傍らの愛妻へと視線を戻す

「優ちゃんに投与されたA P T X 4 8 6 9 は未完成だったのよね？」

「ああ、未完成どころか出来損ないの名探偵にも及ばない代物だな。その為に優子は眠りに就いた」



有希子の意図が解らない儘で、優作は尋ねられた事に答えると……

「なら出来損ないの名探偵を改良すれば優ちゃんの解毒剤は出来るんじゃない？」

有希子には難しい話は解らない

だが、素人の観点から気付いた事実を夫に告げた

目を見開き驚愕する優作

有希子は動かなくなった優作の目の前で手をひらひらさせた

「優作？」

（優作つてば、頭が一杯一杯で思い付かなかったのね？）

暫くの間茫然としていた優作は漸く言葉を紡ぎ出した

「そうか……それならAPTX4869を完成させる必要は何処に

もない……何て事だ」

ぐしゃりと頭を掻きむしる優作に有希子が悔しげに吐き捨てた

「ジンが明美ちゃんを殺さなければ幼児化すると言う副作用が優作の耳に入り、解毒剤の作成に結び付いたかも知れないわね」

「ああ、新一が幼児化して仕舞い、出来損ないの名探偵の解毒剤に意識が向いていた」

「くそっ!!」

机を叩き悔しがる優作

有希子もまた思い付かなかった自分を責めていた

(「ごめんね……優ちゃん」)

次の瞬間

優作はパソコンを操作し始め、出来損ないの名探偵のdataを

呼び出しフロッピーディスクへとコピーした

「これがあれば優子は助かるかも知れない」

「ええ……」

「優子に投与されたこのデータと共に玲美君に渡そう」

机の上に置かれた、宮野厚司の一通の手紙と二枚のフロッピーディスク

二十二年経った今、漸く歯車が動き出す

漆黒の黒髪巻き毛の美しい女性工藤優子

優子を目覚めさせる事が出来る唯一の人物である哀は、コナンと共にある場所へと差し掛かっていた

何の変哲もない通路

その先にある一枚の扉の前で、コナンは痛む頭を抱え込んだ

「う……」

「工藤君？」

「おい、工藤？」

封印されていた記憶の扉が今、漸く開こうとしていた……

## 封じられた記憶

突然頭を抱え込んだコナン

哀や平次は勿論の事、この場に居合わせたFBI捜査官達全員が、まるで記憶喪失者が記憶を取り戻したかのような仕草をするコナンに驚いていた

(まさか……工藤君)

「どつ言つ事なんや?」

頭を抱えて頭痛に耐えるコナンに心配そうに寄り添う哀と平次も戸惑いを隠せないでいた

「まるで記憶喪失者が失っていた記憶を取り戻したかの様だわ」

「ああ……、工藤の奴」

「ひょっとしたらガキん頃に記憶をなくしてたんちゃうか?」

「ええ、恐らく何か耐えがたい事が幼い彼の身に起こった」

「それも組織関係の事がな」

「ええ……」

哀や平次の目の前で頭を抱えて苦しむコナン

そのコナンの脳裏には幼き日に封じた記憶が解き放たれていた

……—!——

(誰だ？ 蘭に似た俺を呼ぶあの娘は一体誰だ？)

(三歳位の女の子……蘭じゃない)

微かに開いた記憶の扉の向こうには、コナンが知りたがっていた  
組織の目的があった

激しい頭痛に堪えながらも、脳裏に描き出される光景はコナン  
が立つこの場所に他ならなかった

「う………（俺はあの娘と一緒に、この場所に来た事がある？）」

（目の前のあの部屋へ入った？）

「おい工藤、無理するなや？」

「コナン君、大丈夫？」

困惑するFBI

「ジョディさん、一体………」

「私にも解らないわ、ただコナン君には何か秘密があるらしいけど………」

「コナン君は一体何者なんでしょう………」

平次もジョディ達もコナンを心配しながらも、コナンが何故ここを知っているのか？

「コナンが一体何者なのか？」

「ただ見守る事しか出来なかった」

「工藤、確りせえ！！」

周囲の問い掛けが次第に霞んで行き、コナンの脳裏に二十二年前のあの日の光景が甦る

ふらりと導かれる様にコナンは、目の前に見える一枚の扉へと向かい、取っ手に手を掛けた

「おい工藤、危ないやないか？」

「ちよっ？コナン君？」

「危ないよ？」

危険だと止める声が聞こえないのか、コナンは取っ手を回して室内へと入った



(この部屋だ……間違いない)

(この部屋に俺はあの娘と来たんだ……そして……)

使われていないらしい研究室は、パソコンや実験器具がその儘の状態に残され少し埃被っていた

「玲美君、もし新一の身に異変が起こった場合、優一と言う名前を呼んでくれないか」

哀の脳裏に響く優作の声

意を決してその名前を告げた

(あの名前を呼ぶのは今しかないわね……)

半ば茫然と室内を見回すコナンに、これ迄無言でいた哀が優一を呼んだ

「優一」

哀がコナンの事を優一と呼んだその時、これ迄問い掛けに一度も反応しなかったコナンが振り返った

「……優……」

「優一？」

怪訝な顔で哀を見下ろす平次に構わず再度優一を呼んだ

「優一」

「……俺は……俺は……」

コナンが再び頭を抱えて記憶の扉を開こうとした丁度その時に、異変に気付いたジンがコナン達がいる部屋に近付いて来た

「仕舞った、ジンだ!!」

通路の外にいた捜査官の声が響き渡り室内は緊迫した空気に包まれる

「何ですって!!」

「チツ……厄介な奴が来よった」

部屋へ入って来たジンとウォツカに対し全員が銃を取り出し警戒する中で、コナンだけがジンを凝視し続けた

哀はジンに対する恐怖に怯えてコナンにしがみつき、平次やFBIは二人を守る様に立ち塞がる

「よ〜シェリー、会いたかったぜ」

(……銀髪、銀の悪魔!!)

目を大きく見開き憎悪を剥き出しにするコナンは迷う事なくジンに銃口を向けた

「……そのガキは工藤新一か」

「幼児化していたとは驚きましたね、兄貴」

「ああ……、のこのこ出向いて来るとはな」

「馬鹿な野郎だぜ」

ゆっくりとコナンへと銃口を向けるジン

咄嗟にコナンを庇い平次が前に出て、その前をジヨディ達が固めた

「……俺は工藤新一じゃねえ」

「ふん……、苦し紛れの戯れ言か」

本気にしないジンに対してコナンは二十二年振りに真名を名乗った

「工藤優一だ」

「何……?」

「工藤?」

戸惑う平次

引き金を引こうとしたジンの指が一瞬止まった瞬間に、コナンが引き金を引いた

ドンドンドンドンドンドン!! -

まさかコナンが撃つとは思わなかった、哀・平次そしてFBIは茫然とコナンを見つめた

「兄貴!!」

「……工藤」

腕や肩・脚・脇腹等……

巧みに急所を外しジンの動きを封じたコナンは、困惑する平次達を他所に更に引き金に添える指に力を込める

「忘れたとは言わせねえぞ、ジン」

「二十二年前、お前がこの部屋で優子を人体実験に使った事をな！」

「なんやて!!」

「何て事……」

憎悪を露にしてジンを睨み付けるコナン

コナンが告げた事実には驚き胸を痛める哀・平次・ジヨデイ達……

撃たれた脇腹を押さえながら、ウォツカに支えられて立ち上がる  
ジン

「……あの時のガキか」

憎々しげに吐き捨てるジンへのコナンの怒りは止まる所を知らない

「あの時の俺はあまりにも幼すぎた……だが今は違う!!」

「てめえだけは許さねえ!!」

幼いコナンが封印した記憶

それは双子の妹を実験体にされたと言う、あまりにも残酷な事実  
だった

この部屋より数十m離れた場所にあるあの方の部屋にはけたたま  
しい着信音が鳴り響いていた

「「大変だ、優作!!」」

「何かあったのか、盗一」

(まさか……)

珍しく幾分焦っている盗一に、優作は得体が知れない予感を感じた

「「あの部屋にジンが向かった」」

「何だと!!」」

「今は新一君がいる筈だ!!」

「解った!!」

通話を終えた優作は不安な表情を浮かべる有希子を振り返った

「優作……、新ちゃんは？」

息子の危険を知り、不安を募らせる有希子

「あの部屋でジンと対峙している」

「!! そんな……」

泣き出しそうになる有希子

優作は一通のメールを送った

「研究室ZにてFBIと対峙するジンとウォッカを殺害し、同行している江戸川コナンと灰原哀を守れ」



このメールを受け取ったベルモットは最後のターゲットを仕留める為に、コナンの元へと向かう

「OK……BOSS」

## 四天王（前書き）

「真実へのCountdown」「虚像の追跡者 - Pursuer

- 「お気に入り登録&評価共に本当に有り難う御座いますm（  
m？）

タイトルの四天王には文句なしの大物さん達です

## 四天王

粗方のメンバーは死亡または拘束され無人と化した通路を駆け抜け研究室へと急ぐベルモットは、懐のトカレフに弾丸を装填し握り締めた

「……………殺させないわよ、ジン」

(シルバートレットは殺させない……………絶対に!!)

ニューヨークでの出会いがベルモットを変えた……………

当時の光景が脳裏に描き出される度に、ベルモットの心をほんのりと温かくする

何時の間にか人の心を取り戻したベルモットだが、あの方の真実は未だに知らされてはいなかった

研究室Zへ通じる大きな四辻に差し掛かった頃、四方の通路からあの方直属の幹部達が駆け付けて来ていた

(あれは……………ボスがどうして!!)

他の幹部達に先駆け駆け付けた盗一に、ベルモットは牽制しながらゆっくりと近付いて行った

「おや、ベルモット」

「……ボスが何故こちらに？」

何も知らされていないベルモットに対し、盗一は優雅な微笑みを浮かべて事実を伝えた

「丁度良い機会だね」

「ベルモット、私はボスではない」

「え……（黒羽様がボスではない？）」

予想外の告白に対し驚き困惑するベルモットだが、ジンが研究室へ向かっている今、一刻を争う事態に盗一は手短かに事情を説明した

「私は、公私共に多忙なあの方の留守居を務めていたんだよ」

「……最高幹部と言う事ですか？」

「我々はその方直属の幹部でね、表向き死んだ事になっていて私があの方の留守居をしていたと言う訳なんだ。あの方が常に不在だとあの男に知れたら暴走しかねないからね」

まさかあの方が別にいるとは思っても寄らなかったベルモットだが、留守居の盗一が敵ではないと判り普段と変わらない笑みを浮かべた

「そう言う事でしたの、まさか黒羽様がNOCだとは思いませんでしたわ」

「まあ、NOCとは少々違うがね。詳しい事情は走りながら話すが、最高幹部達を紹介しておこう」

そう言う盗一の視線の先には、絶妙のタイミングで姿を表す最高幹部達がいた

組織の最高幹部達の正体が予想外の人物であった事にベルモットは驚きを隠せなかった

(あれは!!)

「大阪府警本部本部長・服部平蔵、コードネーム・スカイ」

「米連邦捜査局長官 ジェイムズ ブラック、コードネーム・ナポレオン」

「そしてこの場には来ていないが、日本警視庁白馬警視総監も幹部の一人で、コードネーム・グダインスキ」

「ほんでもって、留守居を務める黒羽盗一、コードネーム・ブルームーンや」

盗一の言葉を受け継いで告げた平蔵とジェイムズがゆつくりと姿を表した

「……服部平蔵、ジェイムズ ブラック」

まさかの大物二人に驚きを隠せないベルモットだったが、最高幹部に相応しい器の持ち主である為、素直に礼を取った

「まさか日米警察機構の大物が組織の幹部だなんて予想外でしたわ」

「まあ組織に入ったんは若い頃やさかいな」

「兎も角、研究室へ急ごう」

危うく四方山話になり掛けた所で盗一は一同を促し研究室へ向かう事にした

「そうだな、赤井君とジンが擦れ違いになったかも知れない」

「急ごう」

次の瞬間、全員が走り始めた

盗一が走りながら打ち明けたのはベルモットに取って衝撃的な事実だった

「元々組織は国家犯罪を暴く為に生まれた組織だね」

「国家犯罪!!」

衝撃的な告白に驚くベルモット

「そつや、日本政財界に暗躍する違法臓器移植連続殺人事件を摘発する為に生まれたんや。闘病と称して該当する若者を事故に見せ掛けて拉致し臓器を根刮ぎ入れ換える……当然その若者達は死んだ。せやけど日本警察は国家権力には滅法弱い」

「そこで正義感が強い有志が集い非合法な方法で証拠を集める一方で、活動資金として犯罪に手を染めざるを得なかった……それが、世界的犯罪組織の始まりだった」

「やがて初代が病に倒れ死を恐れる様になり、臓器移植の代わりに不老不死薬の開発にのめり込む様になった」

「ジンが加わったのもこの頃でね、組織は凶悪犯罪に手を染め始めて仕舞い、最早後戻りは出来なかった」

平蔵・ジェイムズ・盗一が代わる代わる告げる組織の成り立ち

それは国家権力に揉み消されて正攻法では裁けない国家犯罪を、大衆へ知らしめて罪のない多くの若者達を救う為に生まれたと言う事実だった



「流石にあの方でも止められなかったと言う訳ですね？」

ベルモットの言葉に沈痛な面持ちで頷くジエイムズは、当時を回顧しながらもう一つの悲劇を告げた

「そうだ、ジンが加入した事により組織は大きく歪んで仕舞った。だが……あの方は犯罪組織化した組織を潰せない訳があった」

「訳ですか？」

「……ジンはあの方の子供を二人共実験台にしたんだよ」

「……！」

「あの方の正体は伏せられていた為、ジンは下っ派の子供だと思い当時三歳だった女の子を実験台にして、男の子はショックのあまりに記憶をなくして仕舞ったんだ」

あまりにも残酷な事実だったが、ベルモットの脳裏には良く知っている家族が浮かび上がる

(これだけの人物達を束ねられるあの方はまさか……、実験台にされたと言つ子供達はまさか!!)

違っていて欲しい……

そう願って止まないベルモットは声にする事なく耳を傾けた

「犯罪を犯す事への罪悪感はある」

「だが、あの方は愛する我が子を見捨てる事等到底出来なかった。宮野明美を自由にさせていたのも、シェリーを殺させなかったのも、不運にも実験台にされて仕舞った……あの方の子供達を救う為だ」

「地雷を踏んだとも知らないジンはFBI捜査官赤井秀一を引き込んで監視下にあった宮野明美を無断で唆して殺害した挙げ句の果てに、宮野志保を裏切らせて仕舞った」

「あの方の子供達の周囲は警察関係者がそれとなく守っているが……」

ドンドンドンドンドン……

突然銃声が鳴り響き会話は途切れた

闇に埋もれた真実・前編・(前書き)

長くなりそうなので二つに分けました？

闇に埋もれた真実 - 前編 -

突然轟いた数発の銃声に驚いたベルモット達は、一同顔を見合わせ研究室へと駆け付けた

「銃声……」

「どっちらジンが来とる様やの」

直ぐ様、ベルモットが盗一達より先に研究室Zへ駆け付けると……

「てめえだけは許さねえ!!」

全身数カ所を撃たれて膝を付くジンへ銃口を向けたコナンがいた

(シルバーブレット!!)

コナンがジンに対し怒りを露にし撃ち抜いた事に驚きはしたが、ベルモットは務めて平静さを装った

「ベルモット!!」

姿を見せたベルモットを睨み付け殆ど反射的に銃口を向けるジヨ  
デイ

「ベルモットの姉御!!」

(ベルモット……)

ウオツカは助けを乞う眼差しをベルモットへ向けるが、ベルモットの口からは予想外の言葉が飛び出した

「あら……ジン、私が殺す迄もなさそうね」

「な……何を？」

「ふふふ……」

意味深な含み笑いベルモットに、ウオツカはつい先程、不安から出た自分の仮説を思い出した

(まさか……な)

「……てめえ、裏切りやがったな」

「兄貴……」

ウオツカに支えられながらドスの利いた声で睨み付けるジンに対し、悠然と現れた盗一が答えた

「いや、ベルモットは裏切ってはいない」

「ボス!!」

自分を殺しに来たベルモットと、ベルモットの裏切りを否定した盗一にジンは頭をフル回転させた

(……)

「……この男がボスなの」

「この男があの方が……」

盗一の存在に騒然となる研究室

優雅に佇む盗一のその背後から平蔵とジェイムズが守る様に姿を表した

「非常に残念だが……黒羽盗一はあの方ではないんだ、ジョディ君」

「ジェイムズ!! ボス!!」

「親父!!」

盗一・ジェイムズ・平蔵が揃った所でジンの双眸は一段と険しくなり、先程一蹴したウォツカの仮説を思い出した

(ふん……そう言う事が、ウォツカの推理が正しかったと言う訳か)

「どう言う事なの、ジェイムズ」

目の前で繰り広げられる状況に付いて行けず困惑するジョディ



何も知らないFBI捜査官達は、困惑した顔で自分達のボスを見つめた

「私と服部平蔵そして黒羽盗一は組織の最高幹部の一人でね、彼は公私共に多忙なあの方の留守居を長年務めていたんだ。それをジン達はあの方だと勘違いしていたんだよ」

「そうだったんですか……」

「要するにジンはあの方の正体すら知らなかったと言う訳ですね？」

確認を取る様にジェイムズに確認するジョディの眼差しは鋭く睨んでいた

「その通りだよ、ジョディ君？」

ジョディの鋭い視線に困り果てるジェイムズにジョディは容赦なく噛み付いた

「でもジェイムズが最高幹部の一人とは一体どう言う事なのよ!!」

「まあ落ち着きたまえ、ジョディ君？」

娘程も違うジヨデイに詰め寄られ懸命に宥めるジエイムズを見兼ねて、盗一が隠された存在意義を告げた

「ジヨデイ捜査官、組織閥の男爵は、国家犯罪を暴く為に生まれたんだよ」

「何ですって!!」

「国家犯罪!!」

調査で薄々察知していたコナン・哀・平次を除く全員が驚愕し、我が耳を疑わざるを得なかった

それはジンとウォツカも同様だった

俄に信じられないと言った顔を見合わせるジンとウォツカはベルモットとコナンから銃口を向けられた儘盗一を注視していた

「それは本当なんですか!!」

「ああ、本当だよ」

「長年証拠を集めて来たんだが、如何せん相手が国家権力を担っている者達である為、簡単には行かなくてね。今日迄掛かって仕舞ったんだ」

「……そんな」

自分の両親を殺した犯罪組織が実は国家犯罪を暴く為に生まれたこの動かぬ事実にはジョディはシヨックを隠し切れず頂垂れた

「ジョディ君……」

茫然と立ち竦むジョディを慰めるジェイムズの脇をすり抜けた平蔵は休暇中の平次の元へとやって来た

「つたく、一番危険な山に首突っ込みおつて？」

「じゃあないやろ？」

「精神的に不安定なこいつを放って置けへんのや？」

指でコナンを差しながら、恰も付き合ってたと言わんばかりの平次の言葉にコナンは……

「てめえ……ぶち殺されてえか」

ドスの利いた声で平次の頭へと二丁目の銃口を向けた

「何すんねん？工藤？殺す気か？」

「阿呆？」

調子に乗った挙げ句、コナンに銃口を突き付けられた息子の失言に平蔵は呆れ果てていた

「どつやら死にてえ様だな？」

「済まん済まん？俺が来たかったんや？」

「最初っからそつ言やいいんだよ……」

「そう怒るなや、工藤。 お前が心配で来たんも本当なんやで?」

「……わあつてら?」

照れて頬を染めるコナン

背後には確りと哀をガードしており、銃口を向けられているジン  
やウオツカからは死角になっていた

(クソツ……目が霞んで来やがった)

「兄貴?」

全身から流れ出る血潮で動けない兄貴分のジンを守るウオツカ

騒然と化していた研究室内は、再び張り詰めた緊張感が漂っていた

闇に埋もれた真実 - 後編 -

重苦しい沈黙が支配する研究室

その静寂を破ったのは意外にもジンに怯える哀だった

「……優子さんって貴方の妹さん？ 二十二年前に、この研究室で  
一体何があったって言うの？」

哀の至極尤もな疑問

言いたくない、知らせたくないコナンは表情を翳らせ躊躇いつつ、  
二十二年前に封印した出来事を話し始めた

「……優子は俺の双子の妹だ」

(妹、工藤に妹がおったんか)

突然明らかになった妹の存在に驚く平次だったが、何時もの様に  
騒ぐ事なくコナンの話に耳を傾けた

「今から二十二年前俺達が三歳の頃、俺と優子は父さんに連れられて本拠地に来たんだ。俺達は初めて来た場所の広さに興味津々で、父さんが所用で席を外した時に探検に出た」

「二人で色んな場所を見て回ったのはいいが案の定迷って仕舞い、心細くなった優子の泣き声を聞き付けた、この部屋にいた研究者の夫婦が声を掛けてくれたんだ……その夫婦が宮野厚司・エレーナ夫妻、おめえの両親だ」

「え……お父さんとお母さん？」

「……ああ」

(言いたくねえ……だが、後々予想外の所から中傷じみて知るより本当の事を言うか……けど……)

真実を知り傷付くであろう哀を想い沈黙して仕舞ったコナン

悲痛な表情の儘沈黙するコナンを見た哀は、ある仮説を思い立ち見る見る内に顔色を変えた

「まさか……、工藤君」

勘が鋭い哀が気付いた事を悟るコナンは言いたくはなかったが、目の前にいるジンからねじ曲げられて伝えられる事を恐れ真実を告げた

「結果的にはそうだ……」

「!!… そ……んな……」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

コナンの胸の中で啜り泣き始めた哀を、コナンは責める事なく慰めた

「おめえの所為じゃねえし、ましてや親父さん達も好きでしたんじやねえよ、そう気にすんな」

「……ごめんなさい、泣いて」

哀が泣き止むとコナンは数分間の沈黙の後、再び重い口を開いた



「あの日不運だったのは、ジンが研究の進捗状況を確認しに来た事だった」

「宮野夫妻は知り合いのメンバーに連絡を取って父さんを探してくれたんだが、それがジンの耳へ入って仕舞い死亡確率が極めて高かった実験体に優子を使ったんだ。勿論、宮野夫妻がそんな事を承諾する筈もなく、業を煮やしたジンは……」

再度口を噤んで仕舞ったコナンに哀は意を決して促した

「教えて、ジンは何をしたの？」

(灰原……)

「解った、業を煮やしたジンは、ウォッカにエレーナさんの頭に銃を突き付けさせたんだ……そして二者択一を迫った」

この場にいる全員が怒りを露にしジンとウォッカを睨み付け、その中でも哀の殺気は凄まじかった

「……最低、許さないわ、ジンー!」

発作的にジンへ銃口を向ける哀をコナンは穏やかな声で止める

「落ち着け……灰原」

「でも！！ でも……工藤君」

ジンに対して沸き上がる憎悪、怒り狂う哀の肩を優しく抱き締め  
たコナンは更に言葉を紡ぐ

「宮野夫妻はそんな事を望んじやいねえし、厚司さんは優子を犠牲  
にはしたがエレーナさんを守り通したんだ。だが、おめえと同年代  
の優子を人体実験にした罪悪感から実験の過程と詳細データを残し  
た後、その奥の部屋で夫妻は自殺したんだ」

「！！ 自殺……？ 事故じゃないの？」

「ああ、おめえに会わせる顔がない親の資格等ないって言ってな、  
父さんが駆け付ける直前に自殺したんだ」

「全てそこにいるジンの所為でな」

ジンへと集まる非難の視線

コナン自身も怒りを露にしながらも、懸命に平静を装いながらも話し続けた

「宮野夫妻が自殺した事で研究は頓挫して仕舞い、優子は眠った儘二十二年の歳月を過ごす羽目になり、俺は記憶を失い新一として生きた」

「あの方は研究を中止する事も出来た、だが優子を見捨てる事等到底出来る筈もなく、ましてや犯罪を犯すメンバーを増やす事も避けたい」

「……だからジンを生かして置いたのね？ 重犯罪犯として処分される様に様々な任務をこなさせた」

「ああ、信用されていると思っただけだ。ジンは、組織の為と言う大義名分の下に無断で裏切り者の処分をする様になった」

「じゃあ、お姉ちゃんを殺したのはジンの独断なの？」

「そうだ、あの方は優子を救うおめえの成長を待ち続け、漸くその時が訪れた時に明美さんを殺したんだ……あの方が暗殺指令を出したのは、国家犯罪に携わる人間達のみで、それ以外はジンの独断だ。」

二台の携帯を使い分けて演じてたんだよ」

「用心深く冷酷無比なあの方をな」

コナンが口を閉ざすと、ベルモットを始め盗一達が二人に銃口を向けた

周囲を取り囲まれ逃げ場をなくしたジンとウォツカ

ウォツカはジンを支えながら冷や汗を流しているが、ジンは体を支える振りをして一瞬の隙を窺っていた

(一瞬でも隙が出来れば、爆発のどさくさに紛れて体勢を立て直せるが……流石に隙がねえ)

「ふふふ……、ジンもこれ迄ね」

「ふん、殺れるもんなら殺ってみろ」

ベルモットは指に徐々に力を込め、ジンは懐の物に指を掛ける

一触即発の緊迫した空気を破ったのは、もう一発のシルバールレットであるFBI捜査官・赤井秀一だった

「その懐の得物なら既に解体済みだぞ、ジン」

「……赤井秀一」

「兄貴？どうします？」

爆弾を解体したと言う赤井秀一の言葉を受けて、激しく睨み付けるジンは試しにスイッチを押してみたものの反応はなかった

「チツ!!」

バキツ……と起爆装置を握り潰し一段と凄みを出すジン

そのジンの脇を赤井は悠然と通り過ぎた

「秀!!」

「「赤井さん!!」」

「その様子だと爆弾は解体してくれた様だな」

「少々骨が折れましたがね」

宿敵赤井秀一へ凄まじい殺気を放つジン

悠然と近づく赤井は微塵も動じていない

「国家犯罪を暴く為に創立された組織を自分の私欲の為に、病に侵された初代を唆して凶悪化させた罪は重い、覚悟するんだな」

赤井に引導を渡されたジンとウォツカは頼みの綱を断ち切られ死を覚悟した

(どつやらここ迄か……)

(兄貴と一緒になら……まあいいか)

互いを見据えて不敵な笑みを浮かべ、自決用の短銃を握り締める

例え言葉を交わさずとも、二人の間には確かな信頼関係があった

……

ジンとウォツカが短銃を握り締めると、室内は緊迫し二人を注視した

だが、ジンの一挙一動に注視するFBI捜査官達は銃口を突き付けていたが、ある人物が姿を消している事に気が付いてはいなかった

「おい、乳のデカイ姉ちゃんはどうしたんや？」

ベルモットがいない事に気が付いた平次が周囲をキョロキョロするが、既に姿を消した後だった

「何時の間に……！」

「貴方達はベルモットを捜して……！」

「了解……！」

複数の捜査官達が研究室を飛び出しジンへの警戒が緩んだ瞬間、四発の銃声が同時に轟いた

＝ドンドン……！＝

「な……！」

「ジン……！ ウオツカ……！」

「……自決したか」

ゆっくりと倒れて行くジンとウオツカの死に顔は笑みを湛えていた

279

「笑ってるわ……、ジン」

「ああ……、腰巾着のウオツカが唯一信頼出来る人間だったんだろ  
うぜ」

「そつね……」



## 最後の扉（前書き）

お気に入り登録&評価&アクセス本当に有り難う御座いますm（  
）m

事態はあまり進展してません

其々の想いを胸に秘めてコナン達は最後の決戦の場へと向かいます

## 最後の扉

ベルモットに止めと言わんばかりに心臓を撃ち抜かれたジンとウオツカはFBI捜査官達の手で搬送され、残るメンバーはベルモットの目となつた

「何時の間に逃げたんや？」

「赤井さんに注意が行つた時さ、一瞬で変装して悠々と出て行つたぜ？」

「なんや、気付いとつたんか!!」

「気付かんお前が阿呆なんや？」

「なんやと、くそ親父!!」

平蔵の鋭い指摘に食つて掛かる成長のない平次に、コナンと哀は呆れ果て一方的な親子喧嘩に周囲は苦笑するばかりだった

「つたく、ガキ？」

「ほんと同感ね？」

コナンを始めとする数名は……悔しがるジヨディの餌食になったのは言う迄もない

「気付いてたんなら教えてよ!！」

「気付いてると思ってたからな」

「悪かったわね、気付いてなくて!！」

宿敵のベルモットを取り逃がしたジヨディの怒りは止まる所を知らず赤井とコナンがターゲットとなるが、二人は気に止めず熱り立つジヨディをさらりと躲す

「大丈夫、直ぐに会えるから」

「そう怒るな？」

「……本当にしょっね」

気付かなかった自分に腹を立て八つ当たりして仕舞ったジヨディは赤井・コナン・哀・平次・ジエイムズ・キャメル・平蔵そして盗一と共に最奥のあの方の部屋へと向かった

あの方の部屋へと続く長い通路を盗一の先導で進むコナン

コナンの心中を察して全員が沈黙し、不気味な程の静寂が一同を包み込んだ

(父さん……母さん……優子)

(信じて良いんだよね?)

何時か追い抜いてやると追って来たあまりにも高い父優作の背中

コナンにとってシャーロック・ホームズを除けば、実在する人物の中で最高の探偵であり、師匠であり、そして、越えるべき高い壁だった

超が付く程、多忙にも拘わらず何時も温かく見守ってくれた優作

自分宛の怪盗1412号の暗号文を幼い新一に解かせる為に、先回りしてそれとなく手助けもした

新一に決して悟らせる事なく、ただ危険だと遠ざけるのではなく、やりたい事は何でもやらせてくれた父優作……

そんな父親を失うかも知れない

底知れぬ不安と恐怖に駆られるコナンの心は悲鳴を上げていた

微かに震えるコナンの両脇には平次と哀が寄り添っている

（工藤……）

最後の扉を開け様とする親友に寄り添って見守る事しか出来ない  
平次は悟られぬ様に拳を握った

（俺は何も出来へん……）

（これはお前が乗り越えなならん壁やからな……）

嘗て平次も通った道筋……

偶然知った父平蔵の裏の顔

父親が犯罪組織のメンバーだと知り、当初は腹の底から憤慨もした平次だったが、真実を知ると多忙な父親の手助けを始めた

使い走りとは言え多少の犯罪に手を染めた平次、コナンと違って潔白言う訳ではなかった

犯罪を犯す事に抵抗を感じたが罪もない多くの命を救う為に覚悟を決めた

(俺とお前とでは訳が違う……)

(あの方は持てる力の全てを使い真実お前を守り通しはった……。大したお人や、工藤優作はんは?)

あの方の息子であるコナン

誰もがその心中を察し、捜査官達がコナンを責める事はなかった

FBI捜査官達の痛ましい眼差しの先には俯き固く拳を握って歩くコナンの姿がある

そのコナンの隣では、優作が危惧した通り傷付き自分を責め続ける哀がいた

(……工藤君、工藤君には本当に申し訳ない事ばかりしてるわね……私みたいな犯罪者を、どうして貴方達家族は許してくれるの?)

コナンの双子の妹迄もが、人体実験体となっていた事実を知って仕舞った哀は、組織から解放された安堵感と眠り続ける優子への罪悪感と義務感に苛む

真実を知り自分を責める哀の気持ちを察したコナンは、哀の頭をくしゃりと撫でて俯いていた想い人を気遣った

「……工藤君」

「おめえは悪くねえと言ったる？」

「でも!」

自分を責めて許せない哀

傷付きやすく心優しい素直じゃない哀をコナンは何度でも許す

この九年間、哀が自分を責める度にコナンは何度でも許して来た

……

「おめえも宮野夫妻も被害者だ。常軌を逸した初代に絡め取られたに過ぎない。罪は私利私欲の為に悪用したジンにある」

「おめえはAPTX4869を永劫に封じればいい……開発責任者であるおめえが幸せな生涯を送る事で子供に真つ当な道を示せばいいんだ。その時、おめえの償いは終わる」

どんなにコナンが許したとしても、哀は自分を許せなかった

それだけAPTX4869を開発した事を悔やんでいたのだ

だからこそ、九年間この言葉を発して来た



「でも！！ 私があんな薬を作った所為で大勢の人が死んだのは動かぬ事実なのよ！！」

「おめえは毒を作っていた訳ではない、未だに開発途中の薬物故に毒薬としてジーンが無断使用しただけの事だ」

「そんなのは綺麗事よ！！」

自責の念に囚われて頭を振って否定する哀だが、コナンが発した言葉に冷静さを取り戻した

「……おめえが悪いってんなら、あの方の息子である俺も同罪だし服部もだろ？ 俺達は幹部の息子で、俺は黙認して来たんだからな」

「遺族にしてみれば立派な殺人だ」

「そうやで、俺は工藤とは違って大阪を動けへん親父の手足になっ  
とったんや、それなりの事はしとる……俺も犯罪者と変わらへん」

（あ……それもそうだわ）

（遺族からしてみれば幹部の子供は組織の人間も同然で、知ってい

るだけで犯罪者と変わりはない。何で警察に言わないのか……と、責められて然るべきなんだもの)

冷静になり失言を恥じ入る哀

「ごめんなさい……」

「貴方達の事を責めるつもりじゃなかったわ」

「ええつて、ほんまの事なんやし気にすんなつて」

「おめえは気にしすぎなんだよ？」

まんまと言い含められた感じは否めない哀だったが、若い探偵の想いをくみ取り笑みを浮かべた

(自分を責めても仕方ないわね……… ったく相変わらず気障なんだから?)

足音が途絶え、見上げた先には一際際立っている部屋の扉があった



## 再会（前書き）

お気に入り登録&評価

そして沢山アクセスして頂き

本当に有り難う御座いますm(\_\_\_\_\_)m?

二十二年振りの悲しい再会ですが……上手く心情描写出来ずにすみません？

## 再会

他の部屋と扉とは明らかに違う趣のある扉を見上げるコナンは、ノックを出来ずに佇んでいた……

(……父さん)

九年間、この日を待ち続けた

よもや自分の父親があの方だとは思っても寄らずに、黒尽くめの組織を追い続け漸く辿り着いた真実は、あまりにも残酷なモノだった

父親を失うかも知れないと言う恐怖故に心が畏縮しその手を動かせないコナンの肩を平次がぽんと叩き、哀は手をそつと握った

(服部……灰原)

穏やかな二人の笑顔に勇気づけられたコナンは意を決して扉を叩く

・コンコン・

背筋を伸ばし礼儀正しい様は、優作と有希子の躰の良さが窺い知れた

ノックの後、数秒の沈黙の後に、ベルモットの手により静かに開かた

十九世紀英国調に設われた室内

あの方である工藤優作は悠然とした雰囲気醸し出し口を開いた

「ついにここ迄辿り着いたか……平成のシャーロック・ホームズ工藤新一、いや工藤優一と言った方がいいか」

父としてではなく組織間の男爵のボスとして対峙する優作

重苦しい静寂を破り

優作は静かに語り始めた

「数十年間FBIに隠し通した我々の目的と存在意義を、僅か数年で調べ上げ私の元へと辿り着いた……正直な所、ここ迄追い詰められるとは思わなかったがな？」

「私だけの力では犯罪化した組織を壊滅させる事は出来なかった。国家犯罪を暴く証拠集めと連携し、犯罪化した組織の壊滅を同時に行う必要があった」

悠然と立ち上がりコナンを見つめながら歩み寄る優作は、組織閥の男爵のボス・スピリタス・ではなく父親以外の何者でもなかった

「お前のお陰だ」

九年前の米花ホテルで、コナンが宣言した通りに自分自身の手で犯罪組織を壊滅させた一人息子を、優作はくしゃりと頭を撫でて労った

「良く為し遂げたな、新一」

漸く、この時を迎えたコナン

優作に少々子供扱いされて照れ臭そうにはいるが、工藤優一の記憶は三歳で止まっている為、甘んじて受け入れた

「……父さん」

「お帰り……優一」

お帰り

二十二年振りに呼ぶ息子の真名を優しく告げる父優作を見上げて溢れる涙を懸命に堪えるコナンは、二十二年振りに返事を返したのだった

「ただいま……父さん」

満面の笑みを浮かべるコナンに平次と哀は顔を見合わせて微笑んだ

（良かった……工藤君）

（漸く帰ったんやな……工藤）

仲睦まじい親子の光景を見て、ジョディはほっと胸を撫で下ろすと同時に羨ましくもあった

「良かった、コナン君」



「ああ、どうやら落ち着いた様だ？」

「工藤君の精神年齢は大人ではあるが、感情は三歳と言う幼子の儘だったのかもしれない……」

「そうですね、今は特にナーバスになっていますから余計に堪えられんでしょう」

「真実を追い求める名探偵……、彼が追い求めて来たのは幼い自分自身だったのかもしれないな」

「そうですね……」

一同が温かい眼差しで見守る中、全ての蟠りが消えて優作に対し笑みを向けるコナンを、哀・ジヨディ・ベルモットは悲し気な笑みを向けていた

（でもちよっぴり羨ましいわね……）

（良かったわね……工藤君）

心配されていた親子の亀裂もなくコナンは優子の安否を尋ねた

「……父さん、優子は？」

「優子は隠し部屋にいる」

「隠し部屋？」

コナンを先導して真っ白な壁へと向かった優作は隠し釦を押して扉を開けた

「壁が動きおつた？」

「ジンへ知られない為に、この部屋は丸ごとエレベータになっていてね。医療器具及び浴室トイレ等……日常生活が送れる様になっているんだよ」

「「エレベータ……！」」

平次を始め全員が度肝を抜かれていると、有希子が自慢気に力説しながらにっこり微笑んでコナンの元へ歩み出た

「眠っている優ちゃんを守るお部屋だもの、それなりの設備にしてあるに決まってるじゃない」

「母さん……」

優子が眠っているこの部屋は、業務用エレベータを改良した物で、  
一見普通の病室に見える優れものだった

(ここに優子さんがいるのね……)

「さあ、優ちゃんに会ってあげて」

有希子に促されて隠し部屋に入ったコナンは、双子の妹の優子と  
二十二年振りの再会を果たした

「……優子」

ベッドへ横たわる優子の隣に佇みコナンは堪えきれず涙を溢す

「ごめんな……優子」

「守れなくて忘れててごめんな……優子」

優子を抱き締めて嗚咽を漏らすコナン

あまりにも切なく悲しい光景に母親である有希子も啜り泣き始め  
優作がそつと肩を抱いた

「優ちゃん……」

工藤家も宮野家も本来ならば、家族四人幸せな日々を送っている  
筈だった

それがたった一人の悪魔の仕業で不幸のどん底に突き落とされた

工藤家が本当の意味で幸福な日々を取り戻せるのかどうかは……  
偏に哀に掛かっていた

「玲美君……」

「……はい」

懸命に涙を堪えて顔を上げた哀は真剣な表情をした優作と向き合った

「これを……」

優作から渡された一通の茶封筒

怪訝な顔で見上げた哀に優作は一言告げた

「君のお父さんが遺された、生前優子へ投与した薬剤のデータだ」

「！！ お父さんが遺した……」

(これがあれば優子さんを目覚めさせられるかもしれないわ……)

然程、古くない事から定期的に移し変えられている事が見てとれた

感慨深げに茶封筒を見つめる哀に優作・有希子・コナンは一縷の望みを掛けて言葉を紡ぎ出した

「頼む……玲美君」

「最早、君しかいないんだ」

「お願い？玲美ちゃん？」

「出来る限りでいいの……」

「無理はしなくていいからよ」

「優子を目覚めさせられる薬剤の開発をやるだけやってみてくれねえか？」

悲痛な表情で哀に頼み込む優作・有希子・コナンは哀が最後の賭けだった

「解りました、今データをざっと見る限りAPT-X4869の研究初期段階の試作品を投与された様です」

「断言は出来ませんが不可能ではないと思います」



## 仲直り（前書き）

お気に入り登録&評価

本当に有り難う御座いますm（　　）m？

本拠地掃討作戦は前作で書いた事もあって、細かく書きませんでした

コナン達の心情描写が難しいです？



## 仲直り

不可能ではない

凜然たる態度で告げる、科学者宮野志保

哀が希望的な言葉を告げると、母親である有希子は満面の笑みを浮かべて、全身でその喜びを表したのだった

「有り難う、玲美ちゃん!!」

「ゆ？有希子さん？」

突如、有希子に抱き締められて慌てふためく哀は、顔を真っ赤にしながらも嬉しそうに為されるが儘にしていた

「有り難う、玲美ちゃん」

「でも無理だけはしないでね」

「はい……（お母さん……）」

母親の温もりを知らずに育った哀は、記憶にない母エレナの面影を有希子に重ね合わせて想いを馳せた

(お母さんって……、有希子さんみたいな感じなのかしらね)

「娘が二人になって嬉しいわ」

顔を真つ赤に染めた哀に頬擦する有希子に呆れ果てたコナンは、暴走する母有希子に自制を促した

「いい加減にしろよ、母さん？」

「良いじゃないの、兎ちゃん」

「うつせえ？」

ぷつと頬を膨らませて有希子にからかわれ悪態を付くコナンを他所に、有希子は夫優作を促した

「地上に戻りましょ、優作」

「もう終わったんでしょ？」

本拠地に到底似つかわしくもないにこにことした笑顔の有希子に促された優作は、笑みを溢しながら地上に戻るべく壁へ向かう

「ああ、電波ジャックも終わった」

「玲美君に渡した研究データ以外は全て消去してあるし戻るとするか？」

研究データ以外を消去した

そう述べた優作に目を剥いたのが他ならぬジヨディだった

「全データを消去したですって、何で消すのよー!!」

「おっと？」

優作に食って掛かったジヨディはまるで般若の如き形相をしており、流石の優作も身動きしていた

「何て事をするんですか、工藤さん!!」

「M s . S t i r l i n g .」

「ジョディ君？」

「ちよつ？ ジョディさん？」

慌ててジョディを止めに掛かった ジェイムズとキャメルだが、あの方である優作を始めとする幹部達の逮捕は出来ないジョディの怒りは収まる所を知らない

ジョディの凄まじい形相に押され矛先を上司であるジェイムズに向けた

「貴殿方は逮捕出来ないんですから、せめてデータ位は残して置いて下さいよ!!」

「M s . S t i r l i n g .」

「既にジエイムズへ渡してありますから？」

優作の言葉にぴたりと止まったジョディは急転直下、何事もなかったかの様に平静を取り戻した

「あら……そうでしたの、これは失礼しました」

「いえ？（つくづく女性は怖い？）」

「やられたわね、優作」

「有希子？」

「ジョディさん？」

「くくく？」

赤井と盗一・平蔵そして有希子コナン・平次は、滅多に見られない優作の姿に懸命に笑いを堪えていた

「後で教えようとしたんだがな？」

「なら早く教えてよ、ジエイムズ」

「はは……済まない？」

ジョディの隙を見て哀とベルモット平次を優子の部屋に引き入れると、優作は素早く地上へ向かう鉤を押したのだった

「おわ？」

「Bye FBIの子猫ちゃん」

「あー!! ベルモットー!!」

「同じ手を二度もくらうなよ……」

「悪かったわねー!!」

「追っつわよ、キャメルー!!」

「はい？」

あの方の部屋を飛び出し地上へ戻るFBI捜査官達の表情はとても晴々としていた

「絶対に捕まえてやるわ!!」

約一名を除いて……

ジョディ達FBIはベルモットを追って空港へ急行し、優子達の周囲には警視庁の馴染みの面々が集まり、車が手配される迄の間、優子の美貌に感嘆の溜め息が溢れていた

「凄い美人ですね、美和子さん」

「ほんと、流石女優藤峰有希子の娘だけあるわね」

「でしょ」

「目暮警部はご存じだったんですか？」

「ああ、優子君が昏睡状態になって工藤君が記憶喪失になった事は優作君から聞いたとつたんだが……まさか本当に小学一年生に幼児化していたとは思わなかったがな？」

「済みません？」

地上へ戻り事情を説明したコナンは目暮が失神し掛ける程、驚かせて仕舞いひたすら謝り倒していた

「いや、謝る必要はない」

「あれだけ世話になっておきながら、常識に囚われて気付きもしなかった儂が間抜けなんだ」

「目暮警部……」

「本当に済まなかった、工藤君」

「いえ、この数年間は色々な事が起こりすぎて精神的にナーバスになっていた所為もあるんですよ。どうかお気になさないで下さい」

「そう言って貰えると助かるよ……（ほんと優しい子だ、君は）」



憑き物が取れた様な迷いのない眼差しをしたコナンの姿に、目暮はほっと胸を撫で下ろして目を細めた

(もう大丈夫だな……、工藤君)

「どうしてこれ程に迄追い詰められていたのか、全く解りませんでした。漸くその訳が解りました。僕が自分自身を見失っていたからなんですよ」

「今回の件に付いて、白馬警視総監へは僕から要請します、有給を取られて休養なさって下さい」

「それがだな……」

「目暮警部、どうか？」

今回の騒ぎで手が足りなくなった警視庁は、目暮の処分を減給十%三ヶ月と言う処分に変更せざるを得なかった

その上多忙な目暮は、溜まるに溜まっている有給を中々消化出来ず、今回の優作の抗議を切っ掛けに強制休暇を取らせる手筈になっ

ていたのだった

「それなんだけどね、工藤君」

「高木警部補？」

苦笑する目暮に首を傾げたコナンは、困った様に話す高木警部補の言葉に耳を傾けた

「今朝の騒ぎで目暮警部の処分は減給十%の三ヶ月に変更されたんだよ」

「その上、取らせる予定の強制休暇がなくなって仕舞ったのよ」

「……そうでしたか？」

「おや……白馬に無理をさせるなどキツク言っておいたんですが、強制休暇なくなっただんですか？」

「そうなんだ？ 折角良い機会で休暇が取れそうだったんだがな、如何せん手が足りんのだ」

「それもそうですね、服部も駆り出されたし？」

「まあ、ほとぼりが冷めれば取れるだろう」

「定年前に取れるんですかね……」

「……多分な？」

因みに超が付く程多忙な警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係の面々が消化した有給は、高木渉・美和子夫妻の結婚式及び新婚旅行位だった……

Arthur Conan Doyleの悔恨(前書き)

お気に入り登録して頂き

本当に有り難う御座いますm( )m?

場面が頻繁に切り替わりますが、  
で切り替えてありますので  
混同はないかと思えます?

# Arthur Conan Doyleの悔恨

## 組織壊滅後

優子と共に米花総合病院へ戻ったコナンは、精神的に疲労困憊し深い眠りに就いていた

「疲れちゃったみたいね、優ちゃん」

「ああ……（優一……）」

少し幼さが残る寝顔を見下ろす優作はコナンの頭をそっと撫でてぼつりと呟いた

「……あの日、俺が優子と優一を連れて行かなければ預けていればこんな事にはならなかった」

「優作……」

「ほんの二時間の僅かな間に一番大切な我が子をここ迄苦しめた……俺の所為で……！」

「優作？」

「若い二人が大人しくしている訳がない事位容易に想像が付いた、にも拘らず、俺は危険極まりない場所で優子と優一の側を離れた」

二十二年前に自分が犯した失態

僅かな油断から起きた悪夢

優作が何れ程悔やもうとも

失われた時間が戻る事はない

「優作の所為じゃないわ？」

「元はと言えば優ちゃん達を連れて出なかった私が悪いんだもの？」

この二十二年の間、事ある毎に己を責め続ける優作を宥めて来た有希子に優作は緩やかに首を振り同時に想いを馳せた

「いや……、有希子は悪くない」

「初産で双子の母親である君には気分転換が必要だったんだ……、有希子が自分を責める理由は何処にも存在しない」

「……有り難う、優作」

女優を引退し、馴れない育児に追われていた自分を支えてくれた夫優作、有希子はそっと寄り添い優しく微笑んで自責の念に囚われている夫に語り掛けた

「でもね、優作」

「確かに親として未だ三歳だった優ちゃん達から、目を離すべきではなかったかもしれないわ」

「でも、そのお陰で優ちゃんは、元の体に戻る事を躊躇って仕舞う程、沢山のお友達が出来たのよ？」

「……有希子」

「服部君や玲美ちゃん、元太君・光彦君・歩美ちゃん・マリアちゃ

ん……、沢山の人達に巡り会った事に依って優ちゃんは心を成長させる事が出来たと思うの」

「工藤新一時代にはなかった事だもの……きっとこれで良かったのよ」

「君は強いな……、有希子」

「母親だもん」

四十五歳になっても変わらない美貌を誇る有希子は、新婚時代同様優作に甘える様に凭れ掛かった

「君には敵わないな？」

愛妻の唇に口付けを落とす優作

重な合った二人は、頬を染めて寝た振りを続けているコナンには気付いていなかった……

(まったく、一応病人が寝てるってのに騒ぎやがってここは病院だぞ、目え覚めちまつたじゃねえかよ)



（親のラブシーンなんか見たくねえっつもの！！）

幼児化した所為で大人の恋愛経験皆無のコナンには、少々刺激が強かった様だ

寝た振りを決め込んだコナンは再び眠りに落ちて行った

この同時刻

米花二丁目の阿笠邸の地下室では、データを元に哀がAPT X 4 8 6 9の解毒剤の改良を進めていた

（優子さんに投与された薬剤は、APT X 4 8 6 9の初期段階の不完全な物、極めて致死率が高いその薬剤は優子さんの体内に入り、何等かの作用を引き起こした……）

（私も工藤君も優子さんも未成年の成長期……、ただの偶然かしら？）

（APT X 4 8 6 9で私と工藤君は幼児化し、優子さんは昏睡状態に陥った）

(優子さんは未だ三歳の時に投与された……、まさか体が胎児に戻れないから眠りに就いた?)

(優子さんが恐怖のあまりに閉じ籠っている状態ならば、催眠療法で目覚めさせる事が出来るかも知れない)

(優子さんの体は私と同じ位よ、彼女が目覚めさえすれば、工藤君に飲ませる解毒剤を改良すれば、元の体に戻せるかも知れない)

(データを見る限りでは、昏睡に陥ると思われる組成式は見られない、ならば優子さんが目覚める可能性は十二分にあるわ)

万に一つの可能性に賭けた哀は、その夜、工藤邸に帰宅した優作と有希子に一つの可能性として告げた

## その夜

工藤邸のリビングでは、不意に来訪した哀と優作と有希子が向き合っていた

「え……? 解毒剤がなくても、優ちゃん目覚めるの?」

「玲美君、どう言う事が説明してくれるかい？」

困惑する有希子と優作に対し、哀は現在の状況から導き出された可能性を告げた

「はい、先程データを全て精査しましたが、優子さんが昏睡に陥る原因と思われる成分や組成式は、一切見受けられませんでした」

「優子さんが投与されたのは三歳、対して工藤君が投与されたのは十七歳の第二次性徴期の真っ直中です」

「私と工藤君は幼児化しましたが、三歳だった優子さんは、幼児化する事はなく胎児にも戻れなかった、その代わりに巨大な恐怖から昏睡状態になったのではないかと思われます」

「優子さんの体に異常がなければ……催眠療法で目覚める可能性も十二分にあります」

哀の説明に優作と有希子は顔を見合わせて希望を見出した

「優作？」

「ああ……、玲美君の言う通りだ、三歳の優子が胎児に戻る筈もない。あの男を怖がり心を閉ざしたと言う可能性は十二分にある」

「じゃあ、優ちゃん起きるの？」

「その可能性はあるだろう」

夫優作の肯定的な意見に有希子は満面の笑みを湛えた

「あくまでも可能性の一つで断定は出来ません、しかし優子さんが目覚める可能性も否定出来ないのです、精密検査をお願いします」

「解った、病院側には明日にでも話を通して置こう」

「宜しくお願いします」

「私はデータを元に、APTX4869の解毒剤の改良に取り掛かります」

「ああ、宜しく頼むよ」

「お願いね、玲美ちゃん」

「はい」

一礼して工藤邸を後にした哀は徹夜で改良に取り掛かった

翌朝

優作と有希子が担当医へ検査の旨を伝えた後、病室へ顔を出した

有希子が引き戸に手を掛け開け様とすると、コナンの声が聞こえて来た

眠り続ける双子の妹に他愛もない話をするコナン

顔を見合わせた優作と有希子は、双子故の二人の絆に賭けてみる事にしたのだった

私立探偵・毛利蘭

三日後

米花総合病院へ戻ったコナンは優子と同室になった

哀の要請を受けて実施された優子の精密検査結果は異常はなく、ただ眠っている状態だと言つ事が証明された

「じゃあ、優子は催眠療法が何かで起きるかも知れねえってのか？」

「ええ、その可能性が高くなったわ」

「恐らく恐怖のあまりに閉じ籠ったんだと思うの」

あらゆる可能性を見出す哀の推測にコナンは貴重な記憶を思い出した

（そう言や、怖がりだったな……）

「……成る程な、怖がりの優子なら十二分に有り得る話だ」

「優子さん、怖がりなの？」

「ああ、家があんなの広さだからなの？」

「夜なんか、一人でトイレに行けなくて俺が起こされてたからよ」

少し寂しげに笑うコナンの姿に哀は死んだ明美を思い出した

（お姉ちゃん……）

（私には色々な思い出が残ってるけど、幼すぎた貴方には優子さんとの思い出は数える程しかない……）

（絶対に目覚めさせて見せる）

密かに決意を新たにしたら哀は、明美との思い出を振り切り科学者へと戻った

「そう言う訳だから、貴方は優子さんに何でも良いから話し掛けて頂戴」

「わあった、サンキューな」

「……せめての罪滅ぼしよ」

「逃げた父が許せなくもないけど、遠からずジンに殺されてでしよ  
うし結果は変わらなかったかもしれないから……」

「……そうかも知れねえな」

「おめえは何も悪くねえんだから、そう自分を責めるな」

くしゃりと優しい笑顔で哀の頭を撫でるコナンの眼差しは恋人以  
外の何者でもなかった

「うん……」

小さく頷く哀も甘える様にコナンの胸元へ頭を寄せた

「貴方と幸せになっても良いのよね？」



「当たり前えだろ？ おめえがいねえと俺は不幸になるぞ？」

「あら……、私もよ」

啄む様な口づけを交わした哀はコナンの病室を後にした

「じゃあ、また来るわね」

「おう、無理はすんなよ？」

「ええ……大丈夫よ」

哀が帰った後、ベッドを降りたコナンは万に一つの可能性に賭けて優子に語り掛け始めた……

コナンが語り掛け始めた翌日、気持ちの整理を付けた蘭と小五郎が見舞いに訪れた

・コンコン・

「どうぞ」

ノックの後、コナンが入室を促すと、少し痩せた蘭と小五郎が入って来た

「よ、具合はどうだ？」

「蘭姉ちゃん・おじさん、もう大分いいんだ」

コナンが笑顔で二人を出迎えると、蘭と小五郎は元気そうなコナンの姿に笑みを溢した

「良かった？」

(どうやら吹っ切れた様だな?)

「はい、お土産の新刊」

蘭が手渡したのは新名香保里の松田左文字シリーズの最新作だった

「やい！ー！ 有り難う、蘭姉ちゃん！ー！」

満面の笑みで喜ぶコナンの姿に蘭の表情が綻んだ

(変わらないね……、新一)

早速ぱらぱらと新刊を捲るコナンに蘭は挑戦状を叩き付けた

「直ぐに来なくてごめんね……、新一」

「え……」

一瞬して静まり返った病室に、コナンの乾いた笑い声が響いた

「ははは……、何言ってるの？」

「僕は新一兄ちゃんじゃないよ？」

引き攣った笑顔で懸命に誤魔化すコナン

静寂が支配する病室で毛利蘭の推理ショーが静かに幕を開けた

「もう、誤魔化さなくていいよ。全部解ってるから」

「わ？解ってるって何を？」

自信に満ちた笑みを湛えた蘭の背後では、にやついた表情をする完全に面白がった小五郎がいた

（やべ〜、蘭の奴自信満々じゃねえかよ？）

「九年前、トロピカルランドで事件に巻き込まれた新一は、何だかの毒物を飲まされて仕舞い副作用で幼児化した。工藤新一が生きていると知れると周囲に危険が及ぶ為正体を隠す事にした新一は、探偵をしているお父さんの所へ来た。それは恐らく相手の情報を集める為であり、その手段が眠りの小五郎……即ちお父さんを名探偵に仕立て上げて情報を集めていた……そうでしょ？」

（すげえ……蘭の推理、完璧じゃねえかよ？ 父さんの話だともう危険はねえけど、どうすつか？）

これ迄にない危機感を感じて冷や汗を流すコナンを蘭は更に追い詰めていった

「疑わしい点は四点」

「一つ目は、工藤新一の失踪日と江戸川コナンが現れた日が、同日同時刻だと言う事」

「二つ目は、文化祭の日のコナン君は絶対にマスクを外さなかったし、お風呂にも入らなかった事を踏まえると哀ちゃんの変装……、即ち阿笠博士と哀ちゃんは協力者、勿論新一のご両親や服部君もね」

(「じりゃ……、もう潮時だな?」)

(「一分の隙もない、見事な推理だ?」)

「三つ目は、服部君のお守りの鎖に付着した江戸川コナンの指紋で工藤新一の無実を証明したと言う事実」

(「……名推理だぜ、蘭」)

「四つ目は、新一や服部君と同等の推理力・洞察力・観察眼を持ち、尚且つ性格や好み・容姿等……全てが工藤新一と同一であると言う事実」

「更に服部君がコナン君を工藤と呼ぶのを止めない事実に加えて、動かぬ証拠……」「もう良い？」

「指紋が一致したとか言うんだろ？」

蘭の名推理に腹を括ったコナンは、九年振りに仮面を捨て去り、毛利蘭の幼馴染みに戻った

（くくく？ 探偵坊主の野郎め、ついに工藤新一だと認めたか）

平成のシャーロック・ホームズであり日本警察の救世主工藤新一だと、認めさせた愛娘に誇らしげな眼差しを向ける小五郎だったが……

「じゃあ、認めるのね？」

コナンの口からは予想外の言葉が放たれた

「俺は工藤新一じゃねえ……」

「え……（これでも認めてくれないの？）」

(この野郎、悪足掻きしやがって?)

蘭が泣きそつな顔をした瞬間、コナンは真の名を告げた

「俺は……工藤優一だ」

## 懺悔（前書き）

お気に入り登録&沢山のアクセス本当に有り難う御座いますm（  
ー）

この「懺悔」はコナンの事情説明の為長台詞です……



## 懺悔

病室内は水が打った様に静まり返り、蘭はコナンの言う事が理解出来ずに困惑し、驚愕した小五郎は言葉を失っていた

(思い出したのか……)

「工藤……優……」?

「新一じゃないの?」

泣き出しそうな顔をする蘭に、コナンは優しい笑みを浮かべて真実を告げた

「名推理だったぜ、蘭」

「けどな、工藤新一と言う人間は元々存在しない人間なんだ」

「え……、どう言う事?」

心を落ち着ける様に深呼吸したコナンは、真実を語り始めた

「蘭……俺は三歳の時に記憶喪失になったんだ」

「えー！ 記憶喪失？」

「ああ……、そうだ」

「……ある事件に巻き込まれてよ、父さんと母さんの名前以外……全部忘れちゃったんだ」

「う……そ」

まさか新一が記憶喪失だったとは夢にも思わなかった蘭は、真実を知ってただ驚き言葉を失っていた

「二十二年前、俺は優子を守れず記憶を失い工藤新一として生きて来た……工藤優一なんだ」

「優……子？」

ベッドを降りて優子の傍らに佇んだコナンは双子の妹を紹介した

「工藤優子、俺の双子の妹だ」

「二十二年間、眠り続けている」

「……何かあったの？」

コナンに寄り添う様に立った蘭は、心配そうに優子を見下ろした

「俺が飲まされた薬剤の初期段階の試作品の実験体にされたんだ」

「酷い……」

コナンに残酷な事実を告げられた蘭は我が事のように胸を痛める

蘭が傷付くと良く解っていたコナンだったが、蘭には知って欲しかったのかも知れない

「俺は銀の悪魔から優子を守れなかった、だからこそ蘭と優子を重ね合わせ、蘭を守る事で探偵として事件を解決する事で自分を保つて来た」

「優子を失った、守れなかった事実から逃げていたんだ」

「未だ三歳だったんだから仕方ないよ？」

「ああ……、三歳の俺にはどうする事も出来なかった、だが皮肉にも十四年後に再びチャンスに巡り会えた」

「え……じゃあ」

「ああ、漸く解決した事件と関わりがあったんだ」

「二十二年前、ある施設内で迷子になった俺と優子は研究者夫婦と出会った。はぐれた父さんを待っていると言っていると銀の悪魔が研究室に入ってきて、出来ていた試作品を試させる為に研究者の奥さんの頭に銃を突き付けて二者択一を迫った。奥さんを愛していたその研究者は試作品を優子に投与し、優子は眠りに就いた。その研究者には二人の女の子がいて、末娘と同じ位の優子を犠牲にした事を責め、子供に会わせる顔がないと……全てのデータと手紙を認め自殺したんだ」

「その研究者が属していた団体は凶悪な犯罪組織の一面を持っていて、残された姉妹は生まれながらに黒である事を強いられた。姉は監視付きながら普通の生活を送れたが、妹は研究者として教育を受

け、普通の家庭の温かさや愛情を知らずに育った。組織の研究者として成長した妹は俺が飲まされた薬剤を開発し、組織にとつてなくてはならない存在になった。そんな妹を組織から抜けさせる為に、姉はある任務を半年間掛けて成功させたが、銀の悪魔に殺された。妹は殺された理由を知る為に、研究を中断すると言つて対抗手段を取り処分を待つ身となった。彼女は殺されるならと自身が開発した薬剤を飲んだが副作用で死にきれず……幼児化した」

「えー!!」

「何だと!!」

コナンの長い告白に蘭と小五郎は驚きを隠せなかった

「じゃあ？ まさか？」

「そう……、その妹こそが灰原哀だ。灰原は研究中の薬剤を銀の悪魔に無断で使用され、多くの命を奪った薬剤の研究者の汚名を着せられた。だが、灰原がその薬剤を開発してくれたからこそ、俺はこうして生きているし、組織を壊滅させる事が出来たんだ。その薬剤がなければ俺は間違いなく銃殺されていた。灰原は欠片程の幸せも知らずに育てられた上に、たった一人の姉を殺されて、自分を責め続けている」

「今……優子を起こす為に、必死に研究してくれている。俺を元  
体に戻す為にやっと解毒剤を完成させてくれたってのに、自分を責  
めてんだよ……あいつは……」

「俺は側にいてやる事しか出来ねえんだ……」

拳を握り込み自分の不甲斐なさを責めながらコナンは口を閉じた

全ての真実を知った蘭は……

「酷い……、哀ちゃんが何をしたって言うのよー!!」

「その銀の悪魔って人、酷すぎるわ!!」

「ご両親を自殺に追い込まれて、お姉さんを殺されて……酷すぎる」

欠片程も責めなかった……

「蘭……、ありがとな」

ベルモットにエンジェルと呼ばせた蘭は表面上では判断する事は  
なく、哀の背景に少なからず理解を示した上で、ジンに対し怒りを

露にした

真の優しさを兼ね備えた蘭

コナンは心優しい幼馴染みに心から感謝した

(ありがとな……蘭)

哀を思つて啜り泣く蘭を宥めながらコナンは辛そうに表情を歪ませて呟いた

「その組織のボスもかなり庇つたらしいんだがな、銀の悪魔は無断で殺したらしいんだ」

「え……ボスの命令じゃないの？」

「ああ、元々組織は国家犯罪を暴く為に有志達が集まって作られ、それを銀の悪魔が病に臥した初代のボスを懐柔し犯罪化させたんだ」

「そんな……、じゃあ、もしその銀の悪魔って人がいなかったら、沢山の人達が助かったって言うの？」

「ああ、無断で殺してたらしいぜ……全てボスの命令と称してな」

「……最低!!」

この瞬間、蘭の鉄拳がコナンの顔面を襲った

「どわっ？ アブねえ？」

「その男って最低!!」

怒り心頭して次々と繰り出される鉄拳、コナンは真譲りの受け身で回避した

「落ち着けて？」

「だって!!」

「もう死んでっからよ？」

「そう……、なら哀ちゃん大丈夫ね。確り守ってあげてね……新一」



「ああ……、わあってる」

にっこりと微笑む蘭の瞳に翳りはなく、蘭もコナンも本来の輝きを取り戻していた

「幸せか……蘭」

「うん」

「なら良い……、幸せなら良かった」

新出を思い出したのか、幾分類を染めた蘭はコナンの説明で出てきた国家犯罪が気になった

「ねえ、国家犯罪って例の？」

「そつ、国家権力に守られててよ？」

「国家犯罪を暴く為の証拠集めに時間が掛かって仕舞ってな……、共存せざるを得なかったらしい」

「それじゃあ、時間掛かって当然だね」

「まあな？」

## 掛け替えのない仲間

幼馴染みが追っていた - 厄介な事件 - は、蘭が予想していたより遙かに規模が大きく、真相はあまりにも悲しく残酷なモノだった……

コナンの懺悔とも言える告白を聞いた蘭は事の重大さを痛感し、  
- 何故話してくれなかったのか？ - と幼馴染みに対して不満を持った事を恥じていた

(大勢の人達が命懸けで闘った、世界規模の犯罪組織を壊滅させる  
と言つ、大きな事件の事なんて言える訳ないじゃない)

(私が今迄に遭遇して来た個人が起こした殺人事件と訳が違うんだ  
から……、私つては軽く考えてた)

蘭が俯いて自分の浅はかさを責めていると、コナンが心配そうに  
蘭の顔を下から覗き込んだ

「ごめんな……、蘭」

「やっぱり言わない方が良かったな……」

「ううん、大きな事件でびっくりしたけど話してくれて嬉しかった」

優しい笑顔を見せる蘭

コナンは無責任に待たせていた蘭に謝罪するべく言葉を紡いだ

「ごめんな……、待っててくれなんて無責任な事言って、長い間、おめえを縛り付けて……傷付けて……ごめんな……蘭」

(新一……)

「ううん、私こそごめん……」

「泣いて怒ってばかりじゃ駄目なのにね……、今ならどつすれば良かったのか解るよ」

「蘭……」

「お互い様だね、新一」

「そうだな、好きだったぜ……蘭」

「私も大好きだったよ、新一」

漸く幼馴染みに戻れた二人

端から見れば仲睦まじい恋人同士だが、一人忘れ去られた小五郎には解っている様だった

(漸くお子様の恋愛が終わったか、世話の焼ける奴等だ?)

「しかし、とんでもない事件に巻き込まれちゃって?」

「じゃあねえだろ、まさか犯罪組織が遊園地にいるとは思わねえよ?」

「それもそうだね、遊ぶ所だもん」

「無事に帰って来てくれて有り難う……、お疲れ様……新一」

「サンキュー……、蘭」

暫くの間、病室で過ごした蘭は並んで歩く小五郎に問い掛けた

「ねえ、お父さん」

「ん……なんだ？」

「お父さんは新一の事を知っていたの？」

少し俯いて歩く愛娘の問いに、小五郎は真面目に答えた

「ああ、記憶喪失の事なら英理に聞いて知ってたぞ。おめえは未だ三歳だったから覚えてねえだろうが、英理が探偵坊主の呼び名を直させたんだ」

「事故でとしか聞いてなかったがな？」

「そうだったんだ」

「私、何にも覚えてないな」

「そりゃ、ガキだったんだからしゃあねえだろ。探偵坊主が覚えていたのは生来の記憶力の良さもあるが、かなりのシヨックを受けた所為もあるからな」

「そっか……、目覚めると良いね」

「……ああ、そうだな」

(どうか目覚めます様に……)

蘭と小五郎が帰った後

コナンは哀に電話を掛けていた

「「じゃあ、彼女に話したの?」」

「ああ……逆に謝られちゃった、Ginの野郎に怒り狂って大変だったぜ?」

「「蘭さんらしいわね……」」

「ああ……、そんでよ。おめえと友達になりたいって言ってたぜ？」

「私と……？」

「ああ、おめえにはわりいが全部話したんだけどよ、おめえは被害者だって幸せにしてやれって言われた」

電話口の哀は噁り泣いていた

「有り難う……、優一」

「蘭さんに会うのが楽しみだわ」

「ああ、楽しみにしてるよ」

「ええ……」

その時の哀は、笑顔に満ちていた

蘭と小五郎の見舞いから二日後



本庁に駆り出され多忙の身の上となった平次が顔を出していた

「ぶわはははは？」

「姉ちゃんの鉄拳くろうたんか？」

「バー口、受け身取ったっつうの？」

大爆笑する平次をジト目で睨むコナンに、片手を挙げて謝るものの平次は未だに笑い転げていた

「くくくく？」

「笑いすぎだっつうの……」

腹を抱えて笑っていた平次は、コナンが拳を握ったのを見ると、慌てて笑うのを止めた

「済まん済まん？」

「流石、中学生チャンピオンやな？ 実力は高校レベルやて大阪でも評判なんやで？」

「蹴撃の貴公子・京極真・の愛弟子？」

「シャーロック・ホームズの愛弟子でもあるがな……」

ベッドを降りじりじりと平次に詰め寄ったコナンは工藤新一時代に培った黄金の右足をお見舞いし平次の髪の毛が散った

「ははは？（怖え〜？）」

平次が顔を真っ青にしていると、蘭が和葉・園子・真を伴って入って来た

「ちょっと何やってるのよ、優一」

「蘭・園子・真さん」

「もっとやっつかめんよ」

「和葉あ？」

「和葉ちゃん」

壁にへばり付いた平次から脚を下ろしたコナンは、和葉のお許しに不敵な笑みを浮かべた

「だよ、服部」

「はん、真剣お見舞いしたるわ」

コナンが空手を繰り出し平次が憎まれ口を叩く……コナンが真に空手を習い出してから見られる光景だった

「どうやら吹っ切れた様ですね」

「ええ、ご心配を掛けしました」

何かと自分を心配してくれている真にコナンは素直に礼を述べた

「弟子の心配をするのは当然ですよ、ところで蘭さんから聞きました

たが……」

「新一君って本当なの？」

「ほんまにちつこうなってもうたん？」

まるで小説か映画の世界の様な事実に困惑する和葉・園子・真に  
コナンは大きく頷いて肯定した

「あゝ、本当だ」

「じゃあ、蘭ちゃんの側にいたんやね」

「それでこそ新一君よ。って言うか気付かなかったの、蘭」

「疑う度に誤魔化されたのよ」

「命懸けやもんね」

責める事なく受け入れてくれた友人達に、コナンは心で感謝した

「ああ、蘭に何れ程泣かれても言う訳には行かなかったんだ……、蘭を守る為にも誰にも言えなかった」

「ほな何で平次は知ってたん？」

「服部には見破られた、他はサポートして貰うのに必要だったんだ」

祈り（前書き）

お気に入り登録&沢山のアクセス本当に有り難う御座いますm（  
|）m

## 祈り

本拠地が壊滅して一週間が経過

精神的疲労から不眠症に陥っていたコナンは入院生活を余儀なくされ、連日優子に語り掛けていた

内容は他愛もない世間話だったり睡眠学習の一貫で教科書や優作の新刊を読み上げたり様々だ

この日は元太・光彦・歩美が、入院中のコナンの見舞いに訪れていた

「うわ、綺麗な人」

（（凄い美人？））

黒髪巻き毛の優子に歩美は目を輝かせ、元太と光彦は顔を真っ赤に染め上げて三人共夢中になっていた

「優子、こいつ等俺のダチの歩美ちゃんに元太に光彦ってんだ」

眠り続ける優子に紹介するコナン

コナンの気持ちをくみ取って、元太達は当たり前のように自己紹介を始めた

「私、吉田歩美、宜しくね」

「僕は円谷光彦です、宜しくお願いします？」

「お？俺は小嶋元太ってんだ？」

眠っている優子に対し自己紹介をしてくれた小さな友人達の姿にコナンは嬉しそうに笑みを溢した

(サンキュー……)

「こいつ等は少年探偵団の一員で心配要らねえから心配すんな」

「俺達、有名なんだぜ」



「何かあったら遠慮なく言って下さいね」

「光彦君や元太君に言い難かったら歩美に言ってね」

「優子……（還って来い！！）」

返って来る筈がない優子の返事にコナンが優子の頭を撫でながら  
心中で思わず叫んだ瞬間

優子が深呼吸した

「……優子？」

突然の出来事に戸惑うコナン

元太・光彦・歩美も突然の覚醒に困惑して顔を見合わせた

「今……のって……」

「まさか……」

「起きるのか？」

一定のリズムを刻んでいた機器が覚醒に向かっていている事を示し始めた

「優……子……優子!!」

コナンの声に正気に戻った歩美達は慌てて知らせに走り始めた

「か……看護師さんに知らせなきゃ？」

「おっ?」

「光彦!!」

不意にコナンに呼ばれて振り向くと携帯が光彦の掌に飛び込んだ

「父さんと母さんに知らせてくれ!!」

「解りました!!」

慌ただしく光彦と元太が病室を飛び出して行き、コナンと歩美は懸命に優子に呼び掛けた

「優子、還って来い!!」

「優子ちゃん？」

「頼むから……優子!!」

「優子ちゃん、戻って来て!!」

「優子!!」

コナンの悲痛な迄の呼び声と、歩美の必死な呼び声

悲痛な想いが病室に充満した頃元太から知らせを受けた担当医と看護師が慌てて駆け込んで来た

「コナン君？」

「優子！！ 優子！！」

担当医は病室に飛び込むなり、看護師に指示を飛ばす

「心電図と脳波形から目を離すな！！」

「はい！！」

「優子ちゃん！！ 頑張れ！！」

担当医師もこの場にいる誰もが懸命に呼び掛け優子に覚醒を促す

酸素マスクが自発呼吸に依って水蒸気が付着して白く曇り、覚醒へ向けて着実に呼吸を始めた

「脳波、覚醒に向かっています」

「血圧は？」

「上昇しています」

「優子……、今度こそ守るから……もう大丈夫だから……還って来い……優子」

今にも泣き出しそうなコナンの声が病室に響き渡る

この場にいる全員、何があつたのか当然の如く知らされていない

それでも優子とコナンが固い絆で結ばれていると言う事は容易に解った

決して諦める事なく、毎日毎日優子へ語り掛け続けたコナンの想いが今、優子へ届こうとしていた

その頃

病院内の廊下を駆け抜ける光彦はコナンの携帯を手に外へ飛び出した

「はあはあ……、え」と

正面玄関から外に出た光彦は、コナンの携帯を操作して江戸川コナンの養父母である工藤優作へと電話を掛けた

「何かあったのか、優一」

数回のダイヤルの後、工藤優作へ繋がった途端に光彦は声を発していた

「も……もしもし？ 僕、円谷光彦です？」

「光彦君？」

息子の携帯から掛けて来た光彦に異変を感じ取った優作は、混乱した息子の友人の言葉に耳を傾けた

「はい？ 優子さんが？ 優子さんが自発呼吸をされたんです？」

「な ……！！」

これ以上ない位に驚いた優作に光彦は病院に来てくれる様に頼んだ

「それで、直ぐに病院へ来て貰えますか？」

「「解った、直ぐに行く!!!」」

「「有希子!!!」」

優作の愛妻を呼ぶ声を聞いた所で光彦は電話を切った

「ふう？ 車でしょうから十五分後位には見えるでしょう」

「でも……優一？」

「コナン君の日本名でしょうか？」

怪訝な顔で首を傾げた光彦だったが、それどころではない為駆け足で病室へ戻って行った

連絡を受けた工藤邸では優作の大声が響き渡った

「有希子!!! 有希子!!!」

珍しく声を張り上げて呼ぶ優作を怪訝に思いながら、有希子は夫の元へ向かう

「どうしたのかしら？」

「優作が声を上げるなんて珍しいわね」

ぱたぱたと足音を立てながら、有希子が顔を出すと最小限の外出の支度をした優作がいた

「どうしたの、優作」

「有希子、直ぐに支度しろ」

「え？」

「優子が自発呼吸を始めたそうだ」

「！！！」



「戸締まりは私がするから有希子は早くしたくしろ」

「う？うん？」

当然の如く家事を放り出した有希子は、慌てて上着を羽織りバツクを持つと玄関で待つ優作の元へ飛んで来た

「お待たせ？ 優作？」

「ほんとに優ちゃんが呼吸をしたの？」

「ああ、自発呼吸を始めたと……光彦君が知らせてくれたからな、悪質な悪戯する子達ではないし、少なくとも何等かの容態の変化があつたと見て先ず間違いない」

「ほ……ほんとなのね？」

待望の知らせに涙ぐむ有希子

「さあ、米花総合病院へ急ぐぞ」

「うん？」

「私が運転するから有希子は助手席に乗りなさい」

「ええ？」

と確り釘を刺した優作に異議を唱える有希子だったが……

「あんな……、今の君に運転させられる訳がないだろう？」

「どござしてよ？」

「なら渋滞していたらどござする？」

「片輪走行で飛ばすに決まってるじゃない!!」

「……ここは日本だ？」

「解ったわよ……」

言外に危険だと告げる優作に、有希子が渋々従つと猛スピードで米花総合病院へ向かったのだつた

## 覚醒

優作と有希子が米花総合病院へと向かっている頃……

病室では、コナンが懸命に優子を覚醒へと促していた

「優子！！ 還って来い！！」

涙こそ流してはいないものの、コナンの心が泣いている事はこの場にいる全員が解っていた

「……コナン君」

「優子さんの様子はどうですか？」

歩美が泣ぐんでいると、電話を掛けに外へ出ていた光彦が戻って来た

「光彦、連絡は付いたのか？」

「ええ、直ぐに見える筈です」

コナンは声を掛け続け、医師達が固唾を飲んで見守る中で元太達は黙って見守る事しか出来なかった

「お願い？ 優子さん起きて？」

この時の優子は真っ白な世界にいた……

何も無い空間に踞って眠っていた優子は一滴の雨が頬に落ちて目覚めた

- ぼたん -

「う……ん」

目を擦り小さな欠伸をした優子は周囲をきよろきよろ見渡す

「あれ？ ここ何処？」

知らない場所で心細くなり大きな瞳に涙を溢れさせる優子

「ふえ……、お父さん、お母さん、優一、何処」

とつとつ声を上げて泣き出した優子は、生まれた時から片時も離れた事がない優一を呼んだ

「優一、何処」

自分の体が大きくなっていると気付いていない優子の心は三歳の儘だった

「優一」

泣きながらぼてぼてと歩いていると……悲痛な優一の声が頭上から響き渡る

> 優子……！ 還って来い……！ <

優一の声が聞こえた優子は声のする方へ振り向いた

「優一？ 何処にいるの？」

> 優子!! 還って来い!! 優子!!<

悲痛な迄に響く優一の声

優子は優一が泣いている事に気付く

「優一が泣いてる……」

> 優子!! 優子!!<

「……待って? 今還るから?」

優子は優一の声がする方へ走り出した

不思議と疲れを感じる事はなく、優子はひたすらに優一が呼ぶ方向へ走り続けた

> 優子…… 優子…… 優子……<

「泣かないで? 優一?」

優一を泣かせて仕舞ったのは、他ならぬ自分だと悟った優子

「今還るから待ってて？」

何時の間にか涙は止まり

真っ白な世界が眩しい程の光に包まれた瞬間……

二十二年間、固く閉じられていた双眸が光を宿した

「！！！」

この場に偶然居合わせた全員が、奇跡的瞬間に驚愕し息を飲んだ

「……………」

目覚めた優子は知らない場所で知らない人達に見下ろされていた

周囲を見渡し見知った顔に似た男が、これ以上ない位に破顔して



いるのを見た優子は二十二年振りに優一と呼んだ

「……優一？」

「優……子……、優子……！」

コナンに泣きながら抱き付かれ、優一だと確信出来た優子は慌てて泣き崩れるコナンを宥める

「優一？ ごめんね？」

目の前で起きた奇跡に歩美達は勿論の事、医師や看護師も貰い泣きして涙ぐんでいた

「……奇跡だ」

「本当ですね……」

「コナン君の優子さんを想う気持ちがこの奇跡を起こしたんですね」

「うん」

「そうだね」

何者も入り難い静寂

暫くして落ち着きを取り戻したコナンが優子へ満面の笑みを向けた瞬間、優作と有希子が駆け付けた

「優子!!」

「優ちゃん?」

光彦の知らせを受けて、病室に駆け込んだ二人に飛び込んで来た光景は、コナンに笑い掛ける優子の姿だった

「父さん・母さん」

「お父さん? お母さん?」

優子のベッドの周囲にいた医師達は工藤家の為にそつと場所を空けた

「……優ちゃん!!」

「優子!!」

直ぐ様、優子へ駆け寄り確りと抱き締める有希子と、涙を堪えつつもコナン同様に破顔させた優作がいた……

その光景は、後から駆け付けた哀と阿笠博士も目撃し涙ぐんだ

「あ……哀ちゃん、阿笠博士」

「吉田さん」

「ゆ？ 優子君は？」

「し……!!」

「良い所なんだから静かにしろよな、阿笠博士」

「済まん？」

漸く家族が揃った光景を見た哀はほっと胸を撫で下ろした

（良かった……）

「良かった？ 良かった？」

「あゝあ、阿笠博士ってやっぱり泣いちゃった」

「阿笠博士は涙脆いですからね」

「しょうがねえな？」

鼻水を啜り上げ泣き出した阿笠博士を歩美・元太・光彦が宥めたのは言う迄もない

「お母さん？ 泣かないで？」

「ほら……有希子、優子が困ってるぞ」

喜んで泣きじゃくる有希子を、優子が必死に慰める姿が愛らしく  
思わず周囲に笑みが溢れる中で、優作が愛妻を促した

「うん？ ごめんね？」

元女優の欠片もなく

世界的推理小説家でもなく

迷宮なしの名探偵でもない

二十二年間眠り続けた眠り姫の目覚めを喜ぶ家族の姿だった

一頻り喜んだ後、優子は担当医による簡単な検査を受ける事にな  
った

「じゃあ、出ましようか」

「さっ」

真つ先に、阿笠博士等が出た後コナンと哀が出ようとした地点で優作が未だ残っていた

「あのね……優作」

「……？」

こめかみに血管を浮き上がらせたコナンは、優作の耳を引っ張り病室から連れ出した

「お〜？ や〜？ じ〜？」

「いたた？ 優一、引っ張るな？」

「ったく？ 哀ちゃんは付き合ってくれるかしら？」

「はい、解りました」

「じゃあ、頼むな」

「ええ」

「優一く？」

病室の外に連れ出された優作の耳が腫れ上がっていたのは言うまでもなく、コナンに苦情を申し立てるものの、真譲りの蹴りの寸止め  
に敢えなく撃沈した

「文句あるか……スケベ爺」

「済まん……（ほんと優一は怖いな？）」

診察を受けた優子は、やはり歩く事は出来なかった

「ん〜、二十二年間眠っていた為筋肉が相当固くなっていますね。  
明日の精密検査の結果次第でリハビリに入りますよ」

「解りました、宜しくお願いします」

「それで解毒剤の状況は？」

「そうね……もう少し掛かるわね」

「解りました、では体力を付けてからにしましょうね」

「はい」



杞憂（前書き）

「何時も私の小説を閲覧して頂き、本当に有り難う御座いますm」  
「m」

皆様に読んで頂いているお陰様で

「虚像の追跡者 - Pursuer -」  
100000アクセス

「真実へのCountdown」  
200000アクセス

二作品同時に突破しました!!

この場を借りてお礼申し上げます

本当に有り難う御座いますm「」m?

頑張つて更新して行きますので、これからも宜しくお願いしますm  
「」m

## 杞憂

優子の診察が始まると歩美達は阿笠博士に送られて帰路に付き、扉の前には優作とコナンだけとなった

「ふうん……。じゃあ、米花総合病院が外部組織と言う訳じゃねえのか」

「ああ、ただ被害者の遺族である院長が協力してくれてるだけだ。まあ、事情は知っているから、大して変わらないがな？」

「最初から見張られてたつて訳だ」

「そう言つな、これでも心配したんだぞ？」

「わあってるって？」

不敵な笑みを浮かべるコナンは苦笑する優作の親心も解っていた

米花総合病院

幼少期から何かと世話になっている大病院で、臓器移植のターゲットとなった人達を悟られずに保護し続けて来た病院だった

それ故、組織の諸事情に詳しくAPT X 4869を飲まされたコナンと哀、そして眠り続けた優子の経過観察を引き受けてくれていた

「じゃあ、ここで戻れるって訳だ」

「ああ、防音も完璧だし医療設備も警備設備も整っているからな」

「くくく……、米花町のボスやってんじゃねえのかよ？」

「似たようなモノではあるな」

「でなければ、優子に加えてお前を残してLAに行く訳ないだろう？」

「それもそつだな？」

まるで世間話をする様に裏話をする優作とコナンを、優子の診察を終えて病室から出て来た担当医師が止めた

「工藤さ〜ん、何処で話されてるんですか？」

「あ〜、済まないね」

「明日にでも精密検査をした後、リハビリ訓練に入ります」

「宜しく願います」

「お大事に」

「お父さん・優一！！」

満面の笑顔で呼ぶ優子の呼び声に優作とコナンは上機嫌で病室へ戻った

この日を境に工藤家は笑い声に包まれた、まるで失われた二十二年間を埋める様に語り合っていた

検査結果も別段異常は見られず、優作・有希子・コナンは担当医師の言葉にほっと胸を撫で下ろす

そんなコナン達はと言うと……優子を社会復帰させる為にテストをさせていた

時間だけは山程あった盗一は、眠っている優子に睡眠学習を施していた

「ねえ、優一」

「どうした、優子」

最低限の学力を身に付ける為、コナンお手製の問題を解いていた優子は、顔を上げると愛くるしい笑顔を向ける

「解けたよ」

「早かったな、睡眠学習の効果覲面じゃねえかよ」

「睡眠学習？」

首を傾げて問い返す優子

優子の愛らしい仕草にコナンは自然と笑みを溢し、隣のベッドへと向かった

「ああ、寝ている間に教科書とか読んで聞かせてたんだよ」

「ふうん、だから解けたのかな？」

「この耳がちゃんと聞いてたからな」

耳を指先でちゃんと突くコナン

誉めて貰えた優子は嬉しそうに頷いた

「うん」

優子から問題用紙を受け取ると……結果は全科目全問正解

「全主要科目満点か……小学校レベルの学力は身に付いてるようだな、漢字の書き取りを中心に勉強すれば問題ねえだろ」

「ほんとー!」

くしゃりとコナンが優子の頭を撫でると、優子は嬉しそうに微笑んだ

「ああ、後は一般常識とか礼儀作法・語学とかだけでいいだろう。頑張ったな」

「えへへ」

優一に誉められた優子は満面の笑みを浮かべてコナンを見上げた

「少し休憩すつか?」

「ううん、平気」

優子に疲れた表情も見られなかったコナンは中学校卒業レベルの主要科目の問題用紙を手を取った

「じゃあ、次は中学レベルだ」

「はい」

問題をすらすら解いて行く優子は未だ未だ一人では歩けない為、コナン達の介助を受けながらリハビリをこなす日々を送っていた

(にしても……書き取りを除けば完璧じゃねえかよ?)

(小学校履修はどの教科も完璧で、ただ漢字の書き取りだけは必要だな……)

完璧な回答をした優子だったが、漢字だけは辿々しい筆跡で思い出しながら書いたと言った状態だった

まあ、書いた事がない優子だから当然と言えば当然なのだが、筆跡を見る限り流石に心許ない

(漢字の書き取りと英語を始めとする外国語を中心に教えなきゃなんねえな)

(ここ迄完璧に身に付いてるって事は盗一さんの睡眠学習の賜物か……上手く行ったらば大学レベルの学力はあるそうだが?)



コナンが隣のベッドで問題を解く優子に視線を向けると、時おり  
思い出す様な素振りをしながら問題用紙に書き込んでいた

「え〜と、侵略は……、イ書いてヨ書いて……」

(……?)

(どつやら簡単な漢字を教われれば解る様に分解して記憶させたんだ  
な?)

(高校レベル問題の前に書き取り問題決定だこりゃ?)

今、優子が解いているの問題は中学卒業レベルの主要教科問題、  
この結果如何で高校卒業レベルの問題内容を決定するつもりでいた  
コナンは、有希子が持って来たパソコンを起動して新たな教材及び  
書き取り問題作成に取り掛かった

軽快な音を響かせながら優子に解かせる問題用紙を作成していく  
コナン

記憶を取り戻し優子が目覚めて一ヶ月、コナンの精神は至極安定  
し減退していた食欲も増加を見せ、順調に回復の兆しを見せている

顔色も格段に良くなり笑顔が戻る一方で、優子のリハビリの介助に取り組む事でコナンもまた、心のリハビリになっっている様だった

主だった人々には真実を告げており、残す所は元太・光彦・歩美の三人だけとなっていた

（後はあいつ等に言わねえとな……）

内部進学を決定する学期末試験を控えている為、真実を伝える予定の日は三日後の日曜日に話す事になっていた

（俺達の正体を知ったら最後……あいつ等を失うかもしれない）

（そうならねえ事を祈るけどよ……）

漸く訪れる穏やかな日々は、コナンの杞憂と裏腹に直ぐそこ迄来ていた……

（不思議なモノだぜ……）

（あれ程、推理推理の日々だったこの俺が平凡な日々を送っている

んだからよ)

(俺がこれ迄追い求めて来た真実とは事件の犯人ではなく……)

(工藤優一自身だったのかもしれない)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0581x/>

---

虚像の追跡者-Pursuer-

2011年10月31日01時06分発行